

---

# 盗賊ブレイブ@勇者パーティー御一行様

ブレイブ&秋留

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

盗賊ブレイブ@勇者パーティー御一行様

### 【Nコード】

N0331D

### 【作者名】

ブレイブ&秋留

### 【あらすじ】

【ブレイブシリーズ1】魔族討伐組合の依頼によって、魔族の鍛冶屋であるサイバーを倒しに行った俺達は、そこで一本の剣を手に入れた。しかし、それは呪われた魔剣ケルベラーだったのだ。俺達のリーダー「カリュー」は知らずに剣を装備し、呪われてしまった。はたして、この呪いを解くことは出来るのか？カリューの運命や如何に…。

## プロローグ

コースト暦三〇五九年七月。

二九九九年に起こった人間と魔族の争い『第三次封魔大戦』から六十年が経過した今でも、人々に平和は訪れていない。

人間と魔族の争いがこれ程長くなるとは、誰が予想しただろう。辺境の地では毎日のように魔族と人間の小競り合いが続き、その度に罪もない命が消えていった。

魔族が作り出した人間を排除するための獣『モンスター』は、その主である魔族の命令で力を振るっていたが、いつしか魔族の支配から逃れて野生化し、町や村を襲い始めた。

人々は魔族とモンスター、その残忍さと凶暴さに日々怯えていた。

「はあ、はあ……」

木々の間から差し込む太陽の光は明るく、森を吹き抜ける初夏の風は涼しい。

しかし口から漏れる息は荒く、砂漠の風のように熱かった。

森の中を散歩するには丁度良い陽気なのだが、なぜか俺達は鎧やスーツなど走り難い服装で全力疾走していた。その過酷な状況のため、顔からは大粒の汗が滝のように流れ出ている。

俺達の二十メートル程後方には、数え切れない程の凶暴なモンスターの息遣いと土煙が上がっていた。

「ぜえ！　ぜえ！」

俺の横では異様な剣を右手に持った体格の良い男が、今にも倒れそうな息遣いで走っていた。

短髪のその男は青を基調とした落ち着いた感じの装備だったが、なぜか右手には他の装備とは不釣り合いな、闇を象徴するかのような漆黒の剣を握っている。

「はあ、はあ。お、おい！ カリュー！ いい加減、そんな物騒な剣、捨てちまえよ！」

「ふ、ふざけるなよ！ ブレイブ！ 誰のせいで、こんな事になったと思ってるんだあゝ！」

俺の頭の上をカリューの異様な剣、魔剣ケルベラーが風を切り裂く音と共に通り過ぎ、間近に迫っていた羽を持った目玉だけのモンスター、フライアイを叩き斬った。真つ二つに切られたモンスターの返り血が、シャワーのように降り注ぐ。

お陰で俺の上から下まで黒で統一した大事な装備品は、ドロツとしたモンスターの血で染まり、最近茶色に染めたばかりの髪の毛まで真つ赤になってしまった。

「て、てめえ、カリュー！ わざとやりやがったなあ！」

「ぜえ、ぜえ。お、お前を助けてやったんだよあゝ！」

お互い疲れきっている割には、まだ冗談を飛ばすくらいの余裕はあるようだ。

「本気で走らないと、モンスターの群れに食われるよゝ！」

前方でマントをたなびかせながら軽やかに走っていた女性が振り向き、二人のやりとりを冷やかな眼で見ながら言った。その女性のピンクの髪の毛は、太陽の光を浴びてキラキラ光っている。

言い訳をするわけではないが前を走る女性、秋留の脚が速いわけではない。あくまで俺達の装備が重く、迫り来るモンスターを迎撃しながら走っているため、俺達の方が後方を走っているのだ。

ちなみに秋留は黒のチェストアーマーに赤いミニスカートという悩殺的な装備をしているため、俺は後方のモンスターに気をつけつつ、秋留の魅力的な生足にも注意を払っていた。

「ちっ、おい、ブレイブ！ お前の飛び道具で奴らを少し追っ払ってくれよ！」

俺は秋留の生足を見つめて現実逃避をしていたが、カリューの怒鳴り声で現実に取り戻された。

「はあ、はあ。ふざけるなよ、カリュー！ 俺のネカー&ネマーの

特性は知ってるだろう？ そんな軽々と命令するんじゃないよ！」

俺は現実引き戻された事と、カリューに命令された事による不快感の両方により、不機嫌になった。

「てめえ、金と命とどっちが大事だと思ってるんだあ！」

カリューは全速力で走って真っ赤になった顔を更に真っ赤にして、怒鳴った。

俺は命令されるのは好きじゃない。勿論、金と命、どっちが大切か分っているつもりだ。

金があっても、それを使える身体がなければ持っても意味が無い。金は使うためにあるのだ。

だから俺は、その辺に転がっている屍をあさって金品を頂くのなんて日常茶飯事なのだが、熱血漢のカリューや前方を走る秋留は、そんな俺の行動を非難する。

しかし、本当に奴らを追っ払わないと金を使える身体を失いかねない。

身ぐるみを剥がされる屍となるのは、俺かもしれないのだ。

「……………（ヒュヒュン）」

隣を走っているカリューの懷から錢袋を拝借した。これが俺の盗賊としての腕前だ。

例え、相手が全速力で走ってしようと、俺自身が汗だくになり走っていようと、俺の盗賊としての腕は、衰える事はない……………はずだ。

俺は素早くカリューの錢袋から硬貨を取り出し、俺の愛銃であるネカー&ネマーのマガジンにセットした。マガジンを銃に差し込む時に「カシン」という乾いた気持ちのいい音が聞こえる。

「……………（ヒュヒュヒュン）」

俺は、後々面倒になる事を嫌い、カリューの懷へ錢袋を戻しておいた。

俺以外のパーティーのメンバーはいつでも金に執着心がないらしく、自分の財布から少しくらい金がなくなっても全く気づく事はな

い。

ただし、俺がパーティーのメンバーから金を拝借するのは戦闘中のみに限定していた。俺は奴らの金で奴らの命を守ってやってるのだ。金より命が大事だと言っているカリューに万が一バレたとしても、反論の余地はない。

「さうって、それでは、俺の腕の見せどころだな！ ネカーにネマー！ 貴重な硬貨を無駄にしないでくれよ！」

俺は走りながら身体を反転させ、後方を走るモンスターの群れに向かって照準を合わせ、ネカーとネマーのトリガーを連続で引いた。追ってくるモンスターのうち数匹が、断末魔の叫びと共に砕け散った。

俺は盗賊の腕だけでなく射撃の腕も超一流だ。

振り向きざまに放った硬貨の弾丸は確実に狙ったモンスターの眉間を打ち抜いていた。

俺の愛銃のネカー&ネマーは硬貨をセットしてトリガーを引くと、硬貨を弾丸のような勢いで打ち出す事が出来る、世にも珍しい銃だ。しかも硬貨は高速で回転しながら的に目掛けて飛んでいくため、命中した時の破壊力は普通の弾丸以上なのだ。

しかし欠点もある。打ち出した硬貨は、的に当たった時の衝撃で砕けたり変形したりして使い物にはなくなってしまう。

もしかしたら百万カリム硬貨のダイヤや千万カリム硬貨のオリハルコンなら、ネカー&ネマーで打ち出した後も拾えば使えるかもしれないが、勿体無くてぶっ放す気にはなれそうにない。

俺は、更に連続でトリガーを引き、モンスターの群れに向かって、硬貨を発射した。

「いでえ~~~~~！」

モンスターが巻き上げる土煙の向こう側では、変わった鳴き声のモンスターがいるようだ。

「ぜえ、ぜえ、ブレイブ。今日はネカー、ネマーの使い方が豪勢じゃないか。やっと、命の大事さが分ったのか？」

相変わらずの真っ赤な顔で走っているカリューが言った。自分の金がモンスター目掛けて吹っ飛んでいるとは夢にも思わないだろうな。

ふと前を見ると、髪を振り乱しながら走っている秋留と眼が合った。秋留は俺に意味深な笑みを投げ掛けている。

俺がカリューの懷から錢袋を拝借した事が、秋留にはバレているのだろうか？

自慢ではないが、俺の拝借（決してスリではない）の能力は常人の眼には映らない程の速さのはずだ。それを秋留は見抜いているのだろうか……。

その時、後方を走るモンスターの群れから馬のひづめの音が鳴り響いてきた。

俺達のパーティーは勇者（自称だが……）であるカリューと、幻想士の秋留と盗賊の俺、そしてあと一人、聖騎士のジェットという四人メンバーになっている。

その聖騎士のジェットが持ち前のタフネスを生かして、俺達が逃げるための殿を務めてくれているのだ。馬のひづめは、ジェットの乗る愛馬「銀星」のものかと思われる。

暫くするとモンスターの群れの中から、レイピアで華麗にモンスターを捌きながら、ジェットが銀星に乗って現れた。

ジェットと銀星はモンスターの大群相手に殿をしていたため、その身体はボロボロだった。

ジェットの見事に磨き上げられていた銀色の装備一式はモンスターの返り血で真っ赤に染まり、銀星の銀色の毛並みも今やゴミ捨て場に転がっているボロ雑巾のように汚れている。

ジェットと銀星の身体には汚れだけではなく、モンスターの群れから受けたと思われる傷も無数にあった。

ジェットの太腿には剣が突き刺さり、レイピアを持っている右腕には小さなモンスターの頭が喰らいついたままとなっていた。銀星の片眼には致命傷になり兼ねない程、ナイフが深く突き刺さって

いる。

ジェットが銀星で俺の隣まで、モンスターを迎撃しつつ走ってきた。馬独特の「パカラッ、パカラッ」という音が俺の真横で聞こえる。

「ブレイブ殿、いくらワシが不死の身体を持っているからといって、この仕打ちは酷いですぞ！」

ジェットはそう言い、腹に空いた硬貨大の「穴」を俺に見せてきた。

どうやら「いでえ〜〜〜〜！」という悲鳴はモンスターのものではなく、ジェットの腹に硬貨が命中した時の悲鳴だったらしい。

俺はジェットの右腕に喰らいついているモンスターの頭をネカーで殴りつけ、払い落としながら言った。

「わりい、わりい。走りながらだったから、狙いが少しズレちゃったみたいだな。あはは……」

常人相手に対して腹に穴を空けてしまったら笑い事で済まされる事はなく、俺は殺人犯として指名手配されていたかもしれない。

だが、腹に穴が空いているのに平然と馬を駆り、モンスターと戦っているジェット。

そう、彼は死人なのだ。

片眼に深くナイフが突き刺さりながら走る銀星もジェットと同じ死人、いや、死馬だ。

そんな事よりも今は、この窮地をどうやって脱するかが最優先事項の大問題である。

「おい、秋留！ お前の魔法であいつら何とかならないっ……のかっ？」

カリューは空から攻撃してくるモンスターの攻撃をかわしつつ、剣で反撃しながら叫んだ。

羽のあるモンスターは常に空を飛んで襲ってくるため、あつという間に追いつかれてしまう。

俺達の走っている上空には、飛行可能なモンスターの群れが、ま



るで黒い雨雲のように追いかけてきており、次々と攻撃を仕掛けてきていた。

「私には、ブレイブみたく走りながら自分の仕事をするのは無理だよ。魔法の詠唱には時間がかかるし、集中力も必要なの」

秋留の言っている「自分の仕事」とは何の事だろう。やはり秋留には、俺がカリューの錢袋を拝借したのがバレているのだろうか。

俺達はモンスターの攻撃をかわしつつ、ひたすら全力で走り続けた。秋留の奴隷と化している銀星は、いつの間にか相棒のジェットと秋留の二人を乗せて前方を走っていた。

赤から自分の髪の色のように青くなってきた顔のカリューと俺は、依然として己の足で大地を踏みしめながら走っている。

俺達は自分で言うのも照れるが、それなりにレベルの高い熟練したパーティーだ。

リーダーのカリューは勇者でレベルが四十二、幻想士である秋留は三十六、生前はチェンバー大陸の英雄と噂されていた聖騎士のジェットは五十二もある。ちなみに、俺の職業は盗賊でレベルはパーティーの中でも一番低い。盗賊という職業はレベルが上がり難いのだが、俺の実力もあってか、レベルは三十四だ。

その熟練したパーティーの中の若い男二人だが、さすがに半日程走り続けていれば、体力も底をついてしまう。

体力が限界に近づいた頃、周りの空気が一瞬で重くなり始めた。

前方を見ると、幻想士の秋留が銀星に後ろ向きで座りながら、口ツドを構えて口を動かしていた。

不安定な体勢の秋留の腰の部分をジェットが後ろから支えている。

俺は嫉妬した。出来るなら俺がジェットと役を交代したいが、銀星はその主人と秋留以外を乗せようとはしない。あのエロ馬が……。

思考が反れた俺は必死に現実に関頭を切り替え、隣を走るカリューへ注意を促した。

「お、おい、カリュー！ 秋留が魔法を使うぞ！ ここを走っていたら危ない！」

「ぜえ、ぜえ……」

カリューは何も答えずに首を縦に二回振った。そろそろ、カリューも限界だろう。

俺とカリューは銀星の隣まで最後の力を振り絞って走り、秋留の放つ魔法の射程範囲に入らないようにした。

その瞬間、秋留は眼を見開きロッドを後方のモンスターの群れにかざして叫んだ。

「業火の身体を持ち煉獄の心を抱く者よ。灼熱の息吹を知らぬ哀れな者達を、汝の舞で焼き崩せ。コロナバーニング！」

その言葉と共に、秋留がかざしたロッドの前方の空間が歪んだ。

ロッド前方の景色が、透明な池を覗いたようにユラユラと揺れたかと思うと、突然、眼を覆いなくなるような大量の熱風が噴出してきた。

あまりの高温のためか赤く見えるその熱風は、轟音と共に後方から追いかけて来ていたモンスターの群れを容赦なく襲った。

銀星の隣を走り、魔法の効果範囲からは外れているはずだが、秋留の放った魔法の威力は伝わってくる。

後方からは熱風を浴びた大量のモンスターの叫び声が聞こえて来たが、俺はその断末魔を上げているモンスターの姿を確認する事なく走り続けた。

コロナバーニングは、オーブンから出てくる熱気とは比べものにならない位の熱風を、広範囲の対象目掛けて放つ強力な魔法だ。

レベルの低いモンスターなら一発で全身をドロドロのスープのようにな溶かしてしまう。

強いモンスターなら熱風にもある程度耐えられるかもしれないが、その熱さで身体中焼け焦げてしまい、暫く動く事は出来なくなるだろう。

そのモンスターが焼け崩れる姿や、その時の臭いときたら強烈で、暫くは飯が喉を通らなくなってしまう。俺がモンスターが崩れ落ちる姿を確認しなかったのは、そのためだ。

秋留が細身なのは、焼け崩れる光景を見て食欲が湧かないためかもしれない。

秋留は数々の魔法を使う事が出来るし、バリエーションは職業をも超えてしまう。

そもそも幻想士は魔法を唱える事は出来ないのだが、秋留は過去に様々な職業に転職して様々な魔法を習得したため、これらの魔法を使う事が出来る。たまたま今の職業が幻想士だけなのだ。

俺は魔法についてはあまり詳しくないが、コロナバーニングは魔法使いが使う事が出来る魔法と聞いている。

「お二方、後少しで森を抜けますぞ！」

ジェットが銀星に乗りながら叫んだ。

森を抜けた所で何の解決にもならない事は分かっていたが、何かが変わる事を期待していた。

秋留の魔法でも全てのモンスターを追っ払う事は出来ず、俺達は未だに獣の群れに追われていた。

中には顔の半分が焼けただれ、シューシューと煙を立たせながら追っかけて来ている根性のあるモンスターも混じっており、迫力的には以前を上回っている。

暫く走った後、ジェットが言った通りに突然、森を抜けた。

空は変わらず雲一つ無い晴天だった。

「あ、あいつら、まだ追ってきてる！ しつこいなあ！」

秋留が後方を見ながら悪態を吐いた。

いよいよ体力の限界だ。カリューは最早、ジェットの死人としての肌の白さと並ぶ程の蒼白な顔をしていた。

それから十分位走っただろうか。突然、秋留が笑い出した。

「あはははは！ あんたたち、ばっかみたい！」

俺とカリューは全速力で走りながら、必死に秋留の放つ言葉の意味を捉えようとした。

「カリュー殿、ブレイブ殿、後ろを見てみなさい」

ジェットに言われ、尚も全速力で走りながら後方を振り返った。

そこには、土煙を巻き上げながら追いかけて来ているモンスターの群れはなく、一面に美しい草原が広がっていた。

どうやらモンスターの群れは森の外までは追いかけて来なかったようだ。

そうすると、森を出てすぐに秋留が言ったあの台詞は……。

（はめられた……）

俺は既に声を出して悪態を吐く程の体力も残ってなく、その場に倒れた。

薄れ行く意識の中で、カリューの魂が天に上っていくのが見えた気がした……。

意識を失ってから、どれ位が経っただろうか。

俺は揺れる銀星の背中で眼を覚ました。

全速力で走り続け、酸欠状態になったためだと思うが、頭が朦朧としている。

俺は記憶をさかのぼり、数え切れない程のモンスターに好かれ、森の中を全速力で走り抜ける事となった発端を思い出そうとした。  
あれは、今から一ヶ月程前の春の暖かな日に起きた事件だった……。

## 第一章 狂った鍛冶屋

エアリードの町に滞在し始めてから一週間が経過した。

俺達パーティーの一員になったばかりのジェットもすっかりと仕事をこなしている。

今は町にある雑貨屋に、秋留と一緒に非常食などの食料を調達しに行っていた。

パーティーのリーダーであるカリューも、武器屋や防具屋を巡って必要な装備を揃えている最中だろう。

俺は一人、滞在中に世話になっている宿屋のベッドの上で横になっていた。

本来、冒険に出発しようとしている時の俺の役割は、魔族討伐組合に冒険の登録をしに行く事なのだが、今回は必要なかった。

昨日魔族討伐組合から直接依頼を受けたからだ。

大炎山に住む魔族お抱えの鍛冶屋サイバーを倒し、魔族の戦力を削ぐ事が今回の冒険の目的だ。

チェンバー大陸の西の方に位置する大炎山は上質な鉱物が採れる鉱山で、数多くの鍛冶屋が存在する。サイバーも豊富な鉱物を利用して一人なのだろう。

ペチンッ！

俺は突然、何者かに額を叩かれて眼を開けた。

目の前に秋留の手がある。

「皆がそれぞれ冒険の準備をしている時に一人のん気に昼寝？」

どうやら目を瞑って考え事をしている姿が、寝ているように見えたらしい。

目の前では秋留が口を膨らませて怒っている。

「今回の冒険について色々作戦を練ってたんだよお」

「へー、どんな作戦か聞かせて欲しいよね？ ジェット？」

俺は黙ってしまった。

秋留の後ろでジェットが哀れみの眼で俺を見ていた。まるで「口では勝てないですぞ、ブレイブ殿」と言っているようだ。

それにしても、盗賊の俺に気付かれる事なく近づく秋留は何者なのだろう。実は魔法を使って近づいてきてるんじゃないだろうか。

「ちゃんと仕事はしたぞ。魔族討伐組合へ行つてインスペクターを借りてきた」

俺はそう言うと、キャビネットの上に乗っているカメラに羽が生えたような妖精のインスペクターを指差した。

インスペクターは、魔族討伐組合で冒険を登録すると必ず受け取る事になる妖精で、元は静かな森で生活していた妖精を人間が捕獲し、都合の良いように変種させたものだ。

そのカメラのような眼を通して、別のカメラへ映像を出力する事が出来る。

魔族討伐組合で手渡しているインスペクターの映像の出力先は、全て魔族討伐組合本部のモニターへと繋がっており、常にミッション内容を監視している。

万が一、冒険に失敗して全滅してしまった場合でも、インスペクターを通して敵の親玉などの映像を入手する事が出来る優れものである。

インスペクターを連れた冒険で一番気をつけなければならないのは、モンスターの攻撃などでインスペクターが死んでしまうことだ。その時は、仮に親玉を倒した場合でも証拠になる映像が本部へ届かなくなってしまうため、報奨金を貰う事は出来ない。

今回のようにミッションの目的が魔族の討伐なら、仮にサイバーとの戦闘中にインスペクターが殺されてしまった場合、「インスペクターが死んだから、一回村に帰らせて」という訳にはいかない。金にならないし戦闘自体が無駄になってしまう。

ちなみにサイバーを倒した時の報奨金は八百万カリム。魔族とは言えたただの鍛冶屋にこの報奨金額は高いほうだろう。

秋留はキャビネットの上からインスペクターを持ち上げると、「

よろしくね」という風にカメラのようなインスペクターの頭へキスをしていた。俺は思わず生唾を飲み込んだ。

魔族討伐組合から借りたインスペクターは、いつも秋留が持つ事になっていた。

秋留は自分の右肩にインスペクターを置くと、後ろに向かって言った。

「ブラドー、いざという時はインスペクターを守ってね」

その声を聞いて、秋留の装備している真紅のマントが風のない部屋の中で大きく揺れた。

秋留はジェットの他にもう一匹、不気味なモンスターを手懐けていた。

ダンジョンにある宝箱の中で、普通のマントを装って冒険者が装備した瞬間に首を絞め殺してしまうモンスター、ブラッドマントだ。ブラドーと名づけられたブラッドマントは、秋留の事を絶対の神のようにあがめ、敵の攻撃から秋留の身を守り、敵が秋留に近づいてくるとそのマントとしての形状を変え鋭い牙となり敵を襲う。

敵に刺さった牙は、その名前の由来通り血を吸うのだ。

秋留がブラドーを装備してから間もない頃は、俺やカリューが近づいただけで鋭い牙になって威嚇して来たが、最近ではやっと俺とカリューを認めてくれたようだ。

ちなみに最近パーティーに加わった血のないジェットに対しては、ブラドーも相手にするだけ無駄だと思ったのか、威嚇すらしなかった。

「じゃーん！」

突然、秋留が俺の目の前に手の平サイズの奇妙な人形を差し出した。

「この町に来ていた露天商から買ったんだよ、いいでしょ？」

秋留が手にぶら下げているのは、全身真っ黒の人形だった。人形の背中には白い翼が生えている。

「なんだ？ これ？」

「墮天使のお守りだつて。露天商が言うには実際に地上で暮らす墮天使が、一つずつ手作りでこれを作っているらしいよ?」

随分と地域密着型の墮天使がいたもんだ。

どこかの教会では、墮天使は悪魔とされていると聞いた事があるが……。そもそも墮天使など存在するのだろうか。

目の前では、秋留が嬉しそうに自分のロッドに墮天使のお守りをくくりつけていた。

暫くするとカリユーが部屋に戻ってきた。

「大した物はなかったが、予備の剣や短剣を買ったぞ。外の銀星の背中にくくりつけてある」

カリユーは部屋の中に俺達全員の姿を確認すると続けて言った。

「ジェットは俺達のパーティに加わってから初の冒険だな」

カリユーの言う通り、チェンバー大陸の英雄ジェットが、俺達のパーティに加わって冒険するのはこれが初めてだった。

ジェットは俺達が今いるエアリードで仲間になったのだ。

この地で縛られていたジェットの魂を解放したのが俺達だった。

「ワシの命に代えてでも皆さんの命はお守りしますぞ」

不死身のジェットの命、と言われてもあまり信用出来ないが、チェンバー大陸の英雄としての腕には期待が持てる。

「期待してるぞ、ジェット。よろしく頼む」

その日、俺達は翌日の出発に備えて、早めに眠りについた。

翌日、エアリードは濃い霧に包まれていた。

この地で生涯を終えたジェットが出て行くのを、拒んでいるかのようだ。

俺達はここから馬車で四日程の距離にある、大炎山に向かって進む。

ちなみに俺たち冒険者の移動手段は基本的に馬車だ。どの大陸も、



とてもではないが歩いて横断等出来るような広さではないからだ。  
そりゃ、駆け出しの新米冒険者は馬車を借りる金も無いから徒歩  
が主流になる。

俺も冒険者になったばかりの頃は沢山歩いた。

冒険者は依頼をこなす為に街と街を移動する事が多くなる。新米  
冒険者は最初の移動でそれなりに足腰を鍛えられ体力も付くという  
訳だ。

「よろしくね、銀星」

秋留が銀星の頭を撫でた。

銀星の身体には馬車を取り付けてある。俺たちは銀星が引つ張る  
馬車に揺られながら大炎山を目指すという訳だ。勿論、銀星だけで  
俺たち四人が乗る馬車を引つ張る事など出来ないため、銀星の隣に  
は栗色の毛並みをした雄馬も繋がれている。

「アルフレッドもよろしくね」

このエアリードの町で借りた馬に秋留が名前を付けたのだ。アル  
フレッドは嬉しそうに口をブルブルと鳴らした。

「忘れ物は無いか？」

カリューが自分の荷物を馬車に詰め込んで聞いてきた。カリュー  
の荷物は武器や防具が多い。まるで武器防具マニアのようだ。

「ああ、全部詰め込んだぞ」

再びエアリードに戻ってくるかは分からないため宿屋に預けてお  
いた俺たちパーティーの荷物は全て馬車に積んでいる所だ。

「ん？ ジェットはどうした？」

そういえばジェットがいない。

キョロキョロしていると町の裏から小走りに近づいてくるジェッ  
トの姿が見えた。

「すみんですじゃ」

「どうしたんだ？」

俺は荷物の最終点検をしながら話しかけた。

「婆さんの墓参りをしていたんですじゃ。当分、戻れそうもないか

らのお……」

そっか。

ジェットの奥さんもこの地で眠っていたのか。ジェットの姿が少し寂しそうに見える。

「ワシと婆さんは同じ墓に入っているはずなんじゃがな。自分の墓参りをするとは予想にもしていなかったですじゃ」

ジェットは白い髭を触り苦笑いをしている。

「ジェット、良かったの？」

秋留が近づいてきて優しくジェットに声をかけた。

「ふおっふおっふお。こうして生き返ったからには世界の平和のためはこの力、震わせてもらいますぞ」

厳密に言う生き返ってはいないのだが、死人生活が始まったばかりのジェットにそれを言うのは酷だろう。

「婆さんが生きていれば『死ぬ気で世界を平和にしてくな！』と檄を飛ばされていたはずですよ」

パワフルな奥さんだったんだなあ。しかし今回の檄はそれでは何かが変だろうな。

「それでは出発しますぞ」

ジェットが御者席に腰を下ろして手綱を握った。

『おー！』

俺たちは同時に声を上げると深い霧の中、新しい仲間を加え、新しい馬車に乗って走り始めた。

視力の良い俺は度々馬車の幌に付いたビニールで出来た簡易窓から辺りを伺う。霧は相変わらず濃いがモンスターは近づいてきていないようだ。

馬の持久力と安全のため街道を走っているが、この辺りは町もないためモンスターも出現し易い筈だ。油断は出来ない。

上方の霧の間から太陽の光が差し込んできたのを確認して、俺達は大きな木のある丘で昼食を取った。

「今のところ順調だな」

昼食のジャガイモのスープを飲みながらカリューが言った。

ジャガイモはエアリードの名産で、このスープの粉末もジェットと秋留が買ってきたものだ。

この昼食は物足りなかったが、ジャガイモ好きな俺にとっては嬉しい。

「濃い霧に包まれていて、辺りが確認出来ないから少し不安だけだね」

「大丈夫だぞ。俺が常に辺りの気配を窺いながら進んでいるんだから、安心しろ」

俺は秋留を安心させるために言ったつもりだったが、秋留には俺が自慢しているように聞こえたらしい。

「はいはい、さすがブレイブだね」

秋留はこういう事については鈍感だった。いつもは何事も的確に判断して行動しているのだが、俺の秋留に対する気持ちは全然伝わっていないように思える。

俺は黙ってスープを飲み干した。

丁度その時、俺達から少し離れた所で草の揺れる音を聞いた。この草の擦れ方は風のせいではない。何者かが近づいてきている！

「俺の左方二十メートル程の距離に気配を感じる……」

俺は円を作って食事をしていたメンバーに向かって言った。

今までリラックスしていたメンバーの顔が一気に強張っていくのが分かる。

咄嗟にカリューとジェットが剣を手に持ち、俺が指摘した方向に向かって立ち上がった。

カリューは両手でセイントソードという聖なる力が籠った剣を構えた。

ジェットは秋留からプレゼントされた、魔力を込める事で威力がアップするマジックレイピアという細い剣を構えている。

「敵は一体。足音から判断するとかかなりの大型のようだぞ」

俺は辺りの気配を慎重に窺いながら言った。

その何者かの気配は俺達の十メートル程前方で突然、地面を大きく一度踏んだ。

俺はそれがどういう意味か理解していた。

「跳躍したぞ！ 上だ！」

俺が叫んだと同時に俺の後ろでロッドを構えていた秋留が叫んだ。  
「大地の精霊と風の精霊の宴は地底を走り虚空を舞う、アースブロ  
ー！」

呪文と共にかざしたロッドから強風が吹き荒れた。

その強風に、秋留のミニスカートが揺れている。まるで俺を誘っているかのようだ。

秋留のロッドから吹き荒れる風は、辺りの霧を一気に吹き飛ばした。

ついでに秋留のスカートも吹き飛ばしてくれ。

霧が晴れ上がったため、俺は秋留の肢体から眼を逸らして上方を確認した。

俺達の頭上に迫っていたのは大型の昆虫型モンスター、ブラックヘラクレスだった。その姿は巨大なカブト虫そのものだ。

その大きさに、剣を構えていたカリューもジェットもその場を離れ、衝撃から逃れようとした。

ズズウウウウン……。

辺りはモンスターの巻き上げた土煙と霧でほとんど視界がゼロになっってしまった。

俺は、はぐれてしまった仲間の位置を耳だけで確認した。

「秋留！ 目の前にモンスターが迫っているぞ！」

俺はパーティとモンスターの位置を把握し終わり、判明した事実を急いで叫んだ。

「きゃあああああ〜！ 虫iiiiiii！」

秋留は虫が苦手だった。俺はネカーとネマーに手を伸ばしたが、弾丸となる硬貨をセットしていなかった。硬貨は馬車の中だ！

「ジェ、ジェット！ お前の左前方、十歩行った所にブラックヘラクレスが身を潜めている！」

「了解！」

ジェットはそう言うと、大地を蹴り、ブラックヘラクレスに向かって飛び掛った。

視界がぼぼゼロの状態では、敵の急所をつく事は難しく、ジェットの剣はブラックヘラクレスの巨大な背中に突き刺さっただけのようだ。

しかし次の瞬間、体長五メートルはある巨大なカブト虫の身体が気持ちの悪い音と共に吹き飛んだ。

少し離れた所にいた俺の所までモンスターの破片が飛んでくる。

俺は辺りに散らばったモンスターの肉片を踏まないように、慎重に歩きながらジェットと秋留の元へ辿り着いた。

秋留はブラドーに全身を覆われていた。どうやら、ブラドーが秋留を守ったようだ。

もし、昆虫モンスターの肉片が秋留に直接降り注いでいたら、悲鳴どころでは済まなかっただろう。

「凄い威力だな」

俺はジェットに近づいて言った。

「秋留殿に貰ったこの剣のお陰じゃ。この剣は魔力を込める事が出来ると聞いていたのだな」

「それにしても凄い威力だったぞ？」

「ふおおおお、ありったけの魔力を込めたからのお」

ジェットと話していると横でブラドーに守られていた秋留がマントの中から姿を現した。

「ありがとう、ジェット。助かったよ」

「これからは、虫除けスプレーでも身体にかけておいた方が良いでしょうね？」

俺が秋留をからかうと、秋留は口を膨らませて言った。

「じゃあ、ブレイブも近づけなくなるね」

その後、霧の中ではぐれてあらぬ方向へ行ってしまったカリューと合流して、再び大炎山目指して進み始めた。

ブラックヘラクレスを倒してからは、たいしたモンスターとも出会わずに一日が終わろうとしている。そろそろ野宿出来そうな見晴らしの良い場所を探さないといけない。視界の悪い場所ではモンスターの接近に気付くのが遅くなってしまうためだ。

「今日はあの辺で野宿しよう」

俺は見晴らしの良さそうな小高い丘を指差してカリューを見た。俺たちパーティーのリーダーはカリューだから基本的な決定権はカリューにある。

「ああ、そうするか。今日も疲れたな」

カリューが大きく伸びをした。

馬車での移動は座っている時間がほとんどだが、乗り心地はあまり良くないため結構疲れる。金のあるパーティーなら振動の少ない高級馬車等もあるのだが、俺たちはそこまで裕福なパーティーではない。

もっと長距離の移動なら魔動列車という魔力で走る乗り物があるのだが、馬車で四日程の距離なら列車を使うまでもない。そもそも俺たちが向かう偏狭の山に列車の線路は通っていない、という問題もあるのだが……。

「へー、落ち着けそんな良い場所だね」

秋留が馬車から降りて言った。

近くには泉もあるため簡単に汗ばんだ身体を水で流すことが出来る。

「暗くなる前に野営の準備をするぞ」

カリューに促されて俺達はキャンプの準備を始めた。

俺はテントを建て始めた。器用な俺はテント設置等がキャンプ時の主な仕事だ。野郎共が寝る大きめのテントと秋留専用の少し小さいめのテントの二つ。何気なく秋留のテントの方を綺麗に設置していることを秋留は気付いていないんだろうなあ。

そして秋留は食事担当。

あり合せの材料で作っているとは思えない程に秋留の作る食事は美味い。俺がテントを設置している後ろで秋留は鼻歌を歌いながらジャガイモの皮をむいている。

暫くして食材集め担当のカリユーが新鮮な肉を袋に入れて持ってきた。狩った場所で解体してきたのだろう。

「楽勝、楽勝」

秋留の傍に新鮮な肉を下ろした。

暫くすると近くの川に釣りをしに行っていたジェットも銀星に乗って戻ってきた。

「久しぶりでしたが、沢山釣れましたぞ」

久しぶりのレベルが違うんだろうな、と頭に浮かんだが、勿論声に出しては言わない。

「うつわ。今日は大量だね。たっぷり食べないとね」

俺たち冒険者はいつでもどこで危険な目に合うか分からない。食事は取れる時に取る、睡眠は取れる時に取る、が鉄則だ。神経質でベツドじゃないと寝れない、レストランの食事じゃないと食べれない、などの我がままをいつまでも言っているような奴では立派な冒険者にはなれない。

俺たちはボリウムたっぷり、何よりも美味しい料理を平らげると二時間ごとに交代しながら見張りを行い、眠りについた。

翌日、その次の日も特に問題もなく馬車の旅は続いた。

エアリードを出発して三日目の夕方には遠くに大炎山のシルエットが見え始めた。

山の向こう側へ消えようとしている太陽が大炎山を揺れる炎のようを見せている。

俺は大炎山の名前の由来が分かった気がした。

「今日はこの辺で野宿しよう」

カリューに促されて俺達はキャンプの準備を始めた。

昨日に引き続き近くに川はないため、ジェットは近くの木から薪に出来そうな枝を拾ってきていた。

俺は早々にテントを設置し終え、秋留の手伝いをしている。

「コシヨウ取って」

「ほい」

「塩」

「はい」

手伝いと言っても野菜の皮むきもロクに出来ない俺は秋留の傍に立って言われるままに材料などを取ったりするだけだ。それだけだが、俺は秋留の傍にいられて幸せだ。

「今日はこれだけしか取れなかった」

カリューが小さな肉を持って帰ってきた。まあ、しょうがない。

この辺は獣の気配もほとんど感じないからな。

「じゃあ、干し肉を加えてボリュームを付けよっかね」

秋留が近くの樽から干し肉を取り出してフライパンに放り込んだ。今日はスパイシーな味の炒め物だ。相変わらず美味しいな。

「秋留殿は料理が美味いですなあ」

ジェットが感嘆と言う。

「あはは。ありがと。うちは家に両親がいないから毎日料理は私が作っていたんだ」

秋留の境遇は前に少し聞いていた。

父親は行方不明、母親はどっかの教会に勤めているらしい。秋留には妹が一人いて一緒に暮らしていたという事だ。俺には両親がいたからそういう苦労はした事が無い。

食事を終えた俺たちは焚き火の灯りで暫くトランプ遊びをした後に眠りに付いた。

昨日まではどちらかというと曇の多い天気だった。しかし今日は、



どこまでも見渡せるような空の青さに恵まれた。

「今日中に大炎山の麓まで辿り着けるかな」

カリューは荷物をまとめながら言い、それを馬車に放り込んだ。

冒険四日目は特にモンスターに襲われる事なく、大炎山の麓まで到着した。辺りは薄暗くなり始めている。

「ここら辺に小さな村があるはずだけど……」

マップを見ながら秋留が言った。

しかし俺の耳には俺達以外の人の気配は近くに感じられない。

「出来ればそろそろベッドで寝たいからなあ」

カリューが肩を抑えて言った。

確かに馬車移動とテント生活が長くて身体のアチコチが痛くなっている。風呂にも入りたい。

「確かにこの辺りに村がありそうじゃな。どれ、ワシがひとつ走りして、辺りを探索して来よう」

マップを覗いたジエツトは言うと、銀星に跨り、薄暗くなった林の中へ走っていった。

「ジエツトが戻るまではこの辺で焚き火でもしていようよ」

秋留の提案に俺達は焚き火を囲み、その場に腰を下ろした。いつの間にか辺りは真っ暗になっている。こうなってしまうては野宿の準備も出来そうにない。

まあ、最悪は馬車の中で眠れば良いか……。

「ちよつと用を足しに行ってくる」

俺はそう言うとその場を立ち去り、林に向かって歩き出した。

適当な茂みと大きな木を見つけると俺は木に向かって立ち、ズボンのチャックを下ろす。

「……………ふう」

用を足し終え、少し離れた所に見える焚き火まで戻ろうとした時、俺の真後ろで声が聞こえた。

こんな林の中に誰かがいるのだろうか。

「……を……して」

俺は恐る恐る後ろを振り返った。

「骨を返して……」

目の前にいたのは、透明のビニール袋のような身体をしたゴーストだった。

ゴーストは魔族に作られたモンスターではなく、魔族により惨殺された人間の魂がなってしまう場合が多い。どうやら、この辺りにもそういう場所がありそうだ。

「ちっ」

俺は舌打ちと同時にチャックを引き上げ、秋留のいる焚き火まで走ろうとした。秋留の魔法ならこの手の敵も倒す事が出来るが、俺やカリューの攻撃ではゴーストを倒す事は出来ない。

「骨を返せ……！」

俺の真後ろのゴーストは今やその形相を変え、俺に襲い掛かってきた。

「ま、間に合いそうにないか」

俺はベルトの後ろ側に取りつけている小さな鞆から、聖水の入ったビンを取り出した。

聖水には銀で出来ている一万カリム硬貨を漬けている。

「対ゴースト用の硬貨をお見舞いしてやるぜ！」

俺はビンから貴重な一万カリム硬貨を一枚だけ取り出すと、右手に構えたネマーのマガジンにセットした。

「お前の死体を見つけたら金目の物は預かってやるから、成仏しろ！」

トリガを引いたと同時に発射音が鳴り響き、聖水を含んだ銀硬貨の弾丸は、ゴースト目掛けて飛んで行った。

硬貨の軌跡には、硬貨から零れ落ちた聖水が月に照らされてキラキラと光っている。

弾丸は音もなくゴーストの透明の身体を貫いた。物理攻撃ではない銀の弾丸は、敵に命中して破裂する事もなく奥の林の闇に消えて

いった。

「ぬおおおん」

聖水に漬けてあった銀硬貨の聖なる攻撃を受けたゴーストは、指のない手で頭を抱えながら悲痛な叫び声を上げ、やがて霧が晴れるようにその姿を消した。

俺の愛銃の発射音を聞いた秋留とカリューが駆けつけてきたが、俺は暗闇に消えていった銀の硬貨を諦めきれずに、眼を凝らしていた。

しかし俺の盗賊の眼を持ってしても、暗闇に消えた硬貨一枚を探す事は無理そうだ。

「ど、どうした？ ブレイブ？」

「ゴーストに襲われたんだ。この辺りには魔族に滅ぼされた村があるのかもしれない」

カリューの問いかけに対して俺は上の空で答えた。諦めきれずに、まだ硬貨を探していたからだ。

「マップでこの辺りに記されていた村が滅ぼされたのかな」

秋留が言った。

そういう事はよくある。特に偏狭の地にあるような町では。警備にもそれ程力もいれられないような町は魔族やモンスターのかつこの餌食となってしまうのだ。

その後、三人で焚き火の元に戻ると、ジェットが既に戻ってきていた。

「何かあったのですかな？」

「近くに村はあった？」

秋留はジェットの質問には答えずに聞いた。

「ある事にはあるんだが、滅ぼされていたんじゃないよ……」

「やっぱり……」

俺たち三人は声を合わせてうめいた。

俺達はジェットが見つけた村の前までやってきた。村には大抵馬

車が通れる程の街道があるため馬車も引つ張ってきている。

「うっ」

俺は思わず鼻を腕で覆った。辺りには悪臭が漂っている。

「ひでえ……」

カリューは村の入り口にある半ば崩れたアーチを潜りながら言った。

カリューの持つている松明が辺りを照らしている。

そこは秋留の持つていたマップにドルと書かれた、小さな村だった。

木で出来た家屋は崩れ、広場の中央にある井戸はとうに干上がった。住人のいなくなった村は、雑草が伸び放題となっていた。

「とりあえず、寝泊りが出来そうな場所を探そう。物理攻撃の効かないゴーストが現れる可能性もあるから、二人一組で行動した方が良さそうだな」

俺はカリューが最良のチーム分けをしてくれる事を祈った。

「魔法が使える秋留と神聖魔法が使えるジェットは別のチームになった方がいいな」

俺は続きを待った。

「剣の使える俺とジェットも別になった方がいいな……。そうすると……」

残念ながら、チーム分けはカリューと秋留、ジェットと俺になった。敵に襲われた時の事を考えると納得せざるを得ない。

「銀星はアルフレッドと共にここで待っているんじゃないぞ」

ジェットは念のため銀星とアルフレッドから馬車から解放した。これで何かがあった時は銀星もアルフレッドも逃げる事が出来る。

「ヒヒヒーン」

銀星がいなく。まるで「モンスターが現れても撃退してやるさ！ 安心しろ！」と言っているようだ。

俺とジェットは村の南側を探索する事になった。この村の至る所

で悪臭が漂っている。

「この匂いは死臭じゃな……」

死臭を放ち続けている死人のジェットが言った。

俺は辺りを見回した。左前方の屋根が崩れて壁だけになってしまった家に、人の死体らしきものが寄りかかっているのを見つけた。

俺は傍まで行き、その屍を調べた。

普通、ある程度日数の経過した死体は、肉が腐り骨が露出するのだが、この屍に骨は見当たらない。身体の中は空洞だったのだ。

林の中で遭遇したゴーストの言っていた「骨を返せ」とはこの事なのだろうか。

俺は隅々までその屍を調べたが金目になるような物は何も見つからなかった。

「ブレイブ殿、何か分りましたかな？」

「死体の骨がなくなっている。他にも調べたけど、原因が分かるような物は何もなさそうだな」

俺達は、その屍がもたれ掛かっていた、壁だけになってしまった家の中に入った。上を見上げると夜空が見える。

俺は家の中にあるタンスなどを松明で照らしながら、目ぼしい物がないかどうか確認した。

素早い手の動きでタンスの中で見つけた金や短剣を音もなく拾い、上着の内側へ放り込む。ジェットは勿論気付いていない。

どうやらこれ以上、この家に金目の物は無さそうだ。

「この家にはもう、手がかりになりそうな物はないな。屋根がないんじゃあ泊まる事も出来ないし」

俺はジェットに言うところ、夜空の見える家を後にして、少し離れた所にある建物へと近づいた。

「この家は割としっかりしてそうじゃな」

ジェットがレンガで出来た少し頑丈そうな家を見ながら言った。

確かに他の家に比べると、屋根もあるし、泊まる事は出来そうだな。俺はその家のドアに手をかけた。

しかしドアには鍵が掛けられていて開かない。

「ジエツト、このドアをブチ破ってくれ」

少し時間をかければ、俺の盗賊としてのスキルを駆使して鍵の掛かったドアを開ける事は出来たが、面倒くさかった。

ジエツトは力任せにドアノブを引っ張った。「バキッ」という音と共にドアノブの部分だけが外れ、木で出来たドアが音もなく開いた。

「！」

静かな町の中に低い銃声の音が響く。

突然の発砲音と共にジエツトが吹き飛ばされた。開きかけた木製のドアの陰からは銃身が覗いている。その銃身は今にも俺の方に向きを変えそうだった。

俺はホルスターから素早くネマーを取り出すと、目の前の銃身目掛けて硬貨を発射させた。

「ガキユンツ」という金属同士が当たった音が響き渡り、レンガで出来た建物の中で何者かが床に倒れた音が聞こえた。

俺は素早く扉を開け放つと建物の中に入り込み、床に倒れている老人の目の前にネマーを突きつけた。

「動いたら殺す」

俺は脅して目の前の老人が動かないようにした。

老人は、銃が吹き飛ばされた時に痛めたと思われる右手を押さえながら、俺の顔を睨みつけている。

歳は七十位だろうか。頭は禿げ上がり、口から顎にかけて、白くてフサフサな髭が生えている。

部屋の中を見回すと、それなりに掃除がされており、屋根のない部屋や崩れ落ちた小屋に比べると快適そうだった。

部屋の反対側には、俺が老人の手から吹っ飛ばしたショットガンが転がっている。

「痛たた……」

ジエツトが腹を擦りながら部屋に入ってきた。腹の穴を通して向

こう側の景色を確認する事が出来る程、大きな穴が空いている。

「その御老人はいかがなされた？」

見ると老人は泡を吹き白目を剥いていた。どうやら、腹に風穴が空いたまま歩くジェットを見て、気絶してしまっただけらしい。

「おい」

遠くでカリューの声が聞こえた。ジェットの腹の穴から、カリューと秋留がこの建物に走ってくるのが見えた。

老人のいた建物は元は宿屋だったらしい。ベッドが一階に四つ、二階にも四つあった。

どの部屋も蜘蛛の巣が張られていたが、寝れない事は無さそう。俺達は老人を一階のベッドに寝かせると、残りのベッドに腰を下ろして老人が気付くのを待った。

部屋の中は、宿屋に備えてあったオイルランプで明るくなっている。

「俺と秋留の方は何もなかったな」

カリューが言った。何かあったとまるか。

「骨のない屍を見つけた。やはり、さっき俺が遭遇したゴーストはこの村の出身みたいだな」

「御老人が気がついたようじゃ」

俺の台詞を遮るようにして、老人を監視していたジェットが隣の部屋から言った。俺達はゾロゾロと隣の部屋へ移動した。

「あ、あんたらは何者だ！」

老人は先程の光景が頭に残っているのか、ジェットを見て、後ずさっている。

一方ジェットの腹には先程の傷がなくなっており、一層、老人の気を動転させているようだ。

死人のジェットはどんな傷でもあつという間に治ってしまう。

「落ち着いて下さい、おじいさん……」

秋留が老人に近づいていった。始めは「来るな！」と拒んでいた老人も、秋留が近づくにつれて静かになっていった。秋留は老人に

対して心が落ち着くような術をかけているのだろう。

「あなたは誰？」

秋留の優しい問いかけに対して、老人は静かに答えた。

「この村の長です……ドイツと申します……」

老人は朦朧とした眼で答えた。秋留は何か危険な魔法を唱えたんじゃないだろうかと不安になってきた。

「この村に何が起こったのですか？」

「魔族です……」

俺達の予想は的中した。という事は、今回の冒険の目的である鍛冶屋のサイバーに襲われたのだろうか。

「その魔族は人の骨を集めていたの？」

秋留は尚も優しい問いかけでドイツに話し掛けた。

「私達住人を直接殺したのは、全身を真っ赤な鎧で覆っている剣士でした……」

どうやら、今回の依頼は一筋縄ではいかないようだ。

金にならない戦闘はしたくないが、その真っ赤な鎧の剣士も倒さなくてはいけなくなりそうだ。

「剣士に殺された住人は、もう一人のドワーフ風の男に骨を抜かれた……」

ドワーフ族は昔から手先が器用で有名だが、魔族お抱えの鍛冶屋サイバーもドワーフ族なのだろうか。

ドイツは言い終えると、ベッドに再び倒れこんでしまった。

「これ以上、この老人から情報を聞くのは無理そうだね。明日はもう少し山の中に入り込んでみようよ」

秋留は俺達の方に振り返って言った。

それから、この家にあった保存食で簡単に空腹を満たすと、老人の隣の部屋で眠りについた。

翌日眼を覚ますと、部屋の中に香ばしい匂いが立ち込めているのに気がついた。



俺は部屋を出て食堂に向かった。食堂にある薄汚れたテーブルの上に、焼いたパンや目玉焼きなどの簡単な朝食が用意されている。「貴方はブレイブさんでしたかな？ おはようございます」

食事を用意していたのは、ドイツだった。

俺が不思議そうに食事の準備をしているドイツを眺めていると、後から秋留が話し掛けてきた。

「私達の事は、さっきドイツさんに言ったよ」

事情を理解した俺に、ドイツは食事の準備の手を休めて言った。

「話は秋留さんから聞きました。あなた方はこの村を襲った奴らを倒すために来てくれたんですね。昨日は大変な失礼をしました」

「昨日は危うく殺されかけたからな」

俺はドイツを睨みながら言った。

「またあいつらが戻ってきたのかと思ったんです……。申し訳ない……」

急に小さくなってしまったドイツを見て、悪い事をしたと思った。暫くすると、食事の匂いにつられたのか、カリューとジェットも起きてきた。

食事の準備をしているドイツの姿を見て啞然としている二人に対して、秋留は俺にした説明と同じ事を繰り返していた。

「そつえば……」

俺は秋留の姿を見て思った。やけに綺麗になっている気がする。シャンプーの良い匂いもする。

「ふふ。気付いたの？ ドイツさんにお風呂を借りたのよ。ちゃんとお湯も出るのよ」

それはグッドニュースだ。

朝起きてから頭が痒くてどうしようもなかったのだ。

「食事を終えましたら皆さんご一緒に入って下さいな。宿屋の風呂なので皆さん一緒に入れますよ」

俺たち男三人は朝食を終えると一目散に風呂へと向かった。

ゴシゴシと頭や身体を洗う俺たち。

今はシャンプーの匂いが浴場に立ち込めているためジェットの死臭も気にならない。

「はあ……良い湯だな」

カリューが湯船に浸かって伸びをした。ベッドも風呂も久しぶりだ。

「これは生き返りますなあ」

うーん……。とりあえずジェットに突っ込むのは止めておこう。

俺たちは久しぶりの風呂を堪能すると、鍛冶屋と謎の剣士に滅ぼされてしまったドル村を出発する事にした。あまりゆっくりはしていられないからだ。

去り際にドイツから聞いた情報では、村を襲った鍛冶屋と赤い剣士は北の林に向かって歩いて行ったという事だ。

俺達はドイツに礼を言っていると、大炎山の麓に広がる林の奥に向かって歩き始めた。

ちなみに山に登るのに馬車は使用出来なかったためドル村に置いて来ている。アルフレッドの面倒もドイツにお願いしてきている。

銀星はというと、元気にジェットと秋留の間を交互に移動して媚を売っている。死馬でも無ければ山登りなど出来ない。

「街道沿いには住んでないよね、きつと」

「そうだな」

魔族お抱えの鍛冶屋が人通りの多い所にあるとは考えられないと判断した俺達は、林の中の道なき道を歩き続け、太陽が真上に昇る頃に運よく一軒の小屋を見つけた。

小屋と言うには少し大きめの建物だ。壁は全て石を組み合わせて作っていて、屋根からは巨大な煙突が覗いている。

小屋のすぐ後ろは断崖絶壁になっていて、その崖の一部に大きな洞窟が口を開けていた。恐らくあの洞窟から鉱物を運び出しているのだろう。

「どうだ？ ブレイブ。何か分かりそうか？」

隣で息を潜めていたカリューが言った。

サイバーがいると思われる小屋に窓はなかったため、中の様子を確認する事は出来なかったが、何者かの気配は察知する事が出来た。「小屋の中に誰がいるな……気配を感じるの一人だけだ」

「どうする？」

カリューは作戦担当の秋留に聞いた。

「ダイツさんの話ではサイバーの他にもう一人剣士がいるらしいから、慎重に行った方がいいね。それに、ここがサイバーのいる小屋とは限らないし……」

暫く小屋を観察していると、小屋の後方にある洞窟から何かが歩いてくる足音が聞こえた。

「洞窟から何か出てくる。でかいぞ」

暫くすると、俺達が隠れている茂みの地面が揺れ始めた。

洞窟から顔を出したのは、見た事もないモンスターだった。

体長は三メートル。リスのような身体つきをしているが、その顔は愛くるしくはない。眼は白目の部分がなく真っ黒で、口は大きく裂けていた。全身は気持ちの悪い緑色だ。

その身体には似合わない小さな手には、巨大な鉾石が抱えられていた。

「よし、そこに置いとくれ」

リスの化け物の陰から現れたドワーフ風の男が言った。恐らく奴がサイバーに違いない。

背は子供位で良い体格をしている。服装はいたって普通で、皮で出来た黒いベストと、薄汚れたクリーム色のハーフパンツを穿いていた。いかにも鍛冶屋らしいスタイルだと思った。

その時、リスの化け物の鼻がクンクンと何かを探すように動いた。「どうした？ ダグ？」

ダグと呼ばれたそのモンスターは明らかに俺達の存在に気付いているようだ。

暫くダグの様子を見ていたサイバーは「その鉾石は喰って良いぞ」と言っと、一人で小屋の中に入っていった。

「あのデカイのには、俺達の存在がバレたみたいだな」

俺はそういうと、ベルトの左右に下げたホルスターからネカーとネマーと取り出して構えた。

俺が銃を抜いたのとほぼ同時に、ダグはその大きな口に大きな鉱石を放り込んだ。

そして、口の中でガリガリと鉱石を噛み砕き始めた。

「な、何を考えてるんだ？」

カリューは剣を構え、茂みから半身を出しながら言った。

「食事かなあ？」

秋留は言った。しかし誰の眼にもダグが食事をしているようには見えない。

ダグは真っ直ぐこちらを向いたかと思うと、膨らませた口から、鉱石を弾丸の様に飛ばしてきた。

一発目は俺達のすぐ横に立っていた木に命中した。木は後方へ「バキバキバキ」と大きな音を立てながら倒れていく。

「は、早いぞ！」

俺は言った。

ダグが口から発射する鉱石の弾丸は、俺の銃から放つ硬貨より、スピードも威力も高そうだ。

間を空けずにダグは口から二発目の鉱石を放った。一発目で障害物となっていた木が倒され、姿があらわになったカリュー目掛けて真っ直ぐと飛んできている。

茂みから半身を出していただけたカリューは体勢が悪く避ける事は出来そうにない。

カリューはセイントソードを目の前に構え、飛んできた鉱石をその剣で受け止めようとした。

だが、俺の目の前でカリューが吹き飛ばされた。

飛んできた鉱石はカリューの構えていたセイントソードを打ち砕き、そのままカリューの身につけていたブルーアーマーの胸部に鈍い音と共にぶち当たった。

「ぐはあっ」

カリューが口から血を吐いた。胸を強打したためだろう。

「私がカリューに回復魔法かけるから、ブレイブとジェットはこっちに攻撃されないようにして！」

秋留はカリューに駆け寄り、地面に膝を立てると呪文を唱え始めた。

「俺が援護する！ ジェットは奴に向かって攻撃をしかけてくれ！」

俺は比較的動きやすい場所に転がり出て、ダグに向かってネカーとネマーを構えた。

ダグの真っ黒な眼が俺を見つめている。

「頼みましたぞ、ブレイブ殿！」

ジェットはそう言うとかリューの傍に銀星を置いたまま、ダグの左側に回り込むために走り出した。距離はゆうに五十メートルはある。

俺はダグに向かって連続でトリガを引き、硬貨を発射した。

しかし硬貨があたる瞬間、ダグの身体の色が銀色に変わり、俺が放った硬貨の弾丸を全て弾いた。

「な、何だ？」

その光景を見ていたジェットもダグに向かって走る足を止めたようだ。

一体何が起こったんだろう。

気付くと、ダグの身体が元の緑色に戻り、口がジェットの方を向いていた。

その眼の近くまで避けた大きな口は、常に不気味に微笑んでいるように見える。

危険を察知したジェットが素早く後方へ飛び去った瞬間に、ダグの口から鉱石が発射され、ジェットがいた場所の地面を爆音と共にえぐった。

その土煙に混じり、ジェットはダグとの距離を一気に詰め、マジッククレイピアをダグの腹に突き刺そうとする。

だが、またしてもダグの身体が銀色に変わり、ジェットの攻撃を弾いてしまった。

ダグの身体に弾かれたジェットは体勢を崩し、地面に方膝をついた。その瞬間を待っていたかのようにダグは再び緑色の身体に戻ると、ジェット目掛けて鉋石を放とうとした。

「ちっ、間に合わない！」

俺はジェット目掛けて硬貨を発射した。硬貨はジェットが左手に身につけているシルバーシールドに当たり、ジェットの身体を吹き飛ばした。

ダグが発射した鉋石は、またしてもジェットを外れ、地面をえぐる結果となった。

攻撃を邪魔されたダグは俺の方へ向き、息を荒立て睨みつけてきた。

「気持ち悪い眼で見るな」

俺は奴の眼目掛けて硬貨を発射した。身体の色が変わった時でも眼に当たる攻撃は防げないと判断したからだ。

しかし俺の予想とは裏腹に、銀色に姿を変えたダグは眼に当たった硬貨すら弾いてしまった。

奴が銀色になっている時は、弱点はないのだろうか？

もしかしたら秋留の魔法ならダメージを与えられるかもしれないが、今はカリューの回復をしているし、秋留に戦闘に関して助けを求めるのは少し格好悪い。

再び防御を解いたダグは大きく深呼吸をすると、口から鉋石を放ってきた。

俺は盗賊としての能力を最大限に発揮して、すさまじい勢いで進んでくる鉋石を見つめ、寸前のところで身をかわした。それと同時に俺は硬貨を放った。

何度やっても結果は同じだった。硬貨が当たる瞬間に奴は銀色になり、硬貨を弾き返す。

「あんまり硬貨を無駄にさせるなよな」

俺は愚痴ったが内心では焦っていた。こいつの能力を把握しなくてはならない。

俺は五感全てを研ぎ澄まし、奴を観察した。

ダグは銀色の防御体勢を解くと、同じ事の繰り返しだと言わんばかりに息を吸い込み、鉤石を発射してきた。

俺は同時にネマーで硬貨を発射した。俺とダグとの間で鉤石と硬貨がすれ違い、目の前に鉤石が迫ってきたが落ち着いて上体を屈めて避けた。

一方俺が放った硬貨は、ダグの銀色の身体に弾き返された。

ダグの身体の周りには俺の放った硬貨が虚しく散らばっている。

と、俺はある事に気づいた。

銀色になっている時のダグは呼吸をしていない。緑色の身体で俺を睨みつけている時の奴の呼吸は荒いのに、銀色になっている時はその呼吸が止まるのだ。

「試してみる価値はありそうだな」

俺はダグの身体を正面に捕らえ、ネカーとネマーのトリガを引いた。

いつもの繰り返しで奴は銀色に姿を変え俺の硬貨の弾丸を弾き返したが、銀色になった奴の身体目掛けて俺はそのまま連続でトリガを引いた。

俺の予想が正しければ、あいつは銀色になって防御体勢を取っている間は息を止めているはずだ。

息を止める事で身体を硬質化出来るのではないだろうか。だとすると連続で長い間銀色になる事は出来ないはず。

俺の予想は正しかった。三十秒程硬貨を放ち続けたところで、突然ダグの色が元の緑色に戻った。硬貨が大分無駄になったが成果はあった。

俺は目の前で酸欠のためか、真っ黒な眼を白黒させているように見えるモンスター目掛けて、連続でネカーとネマーのトリガを引く。今度は奴の身体に次々と硬貨が当たり、ダグの上げた奇声と共に

辺りに肉片が散らばった。

「ジェット！ とどめだ！」

俺は状況を見守りマジックレイピアを構えていたジェットに向かって言った。ジェットは既に魔力を込めているのか、マジックレイピアが淡く光っている。

ジェットは走り出し、倒れかけていたダグの眉間に剣を突き刺した。

断末魔の叫び声と共に頭の無くなったダグはその場に倒れた。

「ふう」

俺は今まで五感を研ぎ澄ませていた事もあり疲労していた。しかし俺達の相手は休ませる暇を与えてはくれなかった。

「パチパチパチパチ……」

小屋の中からドワーフ風の男が出てきた。

「まさかダグが倒されるとはなあ。見事だ」

小屋の比較的近くにいたジェットが言った。

「お主がサイバーじゃな？」

「いかにも。私がサイバーだ。大勢で何のようかな？」

後の茂みから、秋留に回復してもらっていたカリューが出てきた。顔には若干脂汗が浮かんでいたが、なんとか大丈夫そうだ。

「魔族討伐組合からお前を倒すように依頼された。おとなしくしろ」  
秋留が遠くでインスペクターを肩に乗せているのを確認する。これで依頼内容の記録はバッチリなはずだ。

カリューはサイバーを睨み付けると銀星に取りつけてあった布の包みから、予備の剣を一本取り出した。

エアリードで買った鋼の剣だ。

「随分とチャチな剣を装備しているなあ。そんなのでよく今まで戦ってこれたもんだ」

サイバーは右手に持った身長程もある鋼鉄のハンマーを軽々担いで言った。

「お前のペットに破壊されたんだよ。また新しいのを買わないとな」



「はっはっは。なんならお前の剣、俺が作ってやろうか？」

魔族お抱えの鍛冶屋の作る剣には興味があるが、頼んで作ってもらえる訳がない。

カリューが言い返そうとした時に小屋の中からもう一人姿を表した。

俺が小屋の中で初めに気配を感じたのは、こいつらしい。

全身を真っ赤な鎧で包んでいた。こいつがドイツの言っていた剣士に違いない。

「サイバー、お前は急いで武具を作らないといけないんだ。客人の相手は俺がしよう」

真っ赤な剣士が言った。剣士が現れた途端に辺りの空気が重くなった気がした。

サイバーも今までの皮肉を言っていた顔とは変わり、どこか赤い剣士を恐れているようだ。

「じゃあ頼んだぞ、ガゾル。私は武具の製作を続けるとしよう」

赤い剣士はガゾルという名前らしい。

サイバーはそう言うと言物の中に入ってしまった。

「さて、まずは自己紹介をさせてもらおう。俺の名前はガゾル。魔族だ」

ガゾルは名乗ったが、その顔は確認出来ない。ガゾルが身につけている真っ赤な兜は頭全体が隠れるタイプで、見えているのは魔族独特の赤に黒の瞳だけだ。

その隙間から覗く怪しげな眼は秋留の肩に乗っているインスペクターのカメラを見ているようだ。余裕をかましていられるのも今のうちだぞ。

盾は装備していないが全身を覆うタイプの鎧なので全身が盾と言ってもいいかもしれない。右手には赤くて異様なオーラを放った剣を装備している。

「わざわざ自己紹介とは律儀だな」

カリューは続けて言った。

「俺はカリュー。勇者だ。お前らを倒すためにここまで来た」

ガゾルに対抗して自己紹介をしているのか、自身の律儀さなのか分からないが、カリューも自己紹介をしていた。

カリューの事を見つめていたガゾルが言った。

「はっはっは。勇者だと？ とんだまがい物だな」

「な、なんだと？」

カリューはガゾルを睨みつけながら言った。

「勇者に選ばれた者は、その瞳が黄金色に輝くと聞いているが、お前の眼の色は黒じゃないか！」

カリューは自称勇者だった。

だから瞳の色が黄金に輝いていたり、聖なる魔法が唱えられるわけではなかった。

「偽物勇者のいるパーティなど恐れるに足らん！ 全員でかかってこい……相手になつてやる」

ガゾルは剣を構えた。その堂々とした姿に、この魔族の強さが窺えた。こいつは強い。

俺がネカーとネマーを構えたところでカリューが言った。

「俺一人で十分だ。ここまで馬鹿にされて黙っている訳にはいかな  
い」

そう言うと、カリューはガゾルの前まで歩いていった。いくらカリューでも戦闘派の魔族と一対一で勝てるのだろうか。

魔族はモンスターとは比べ物にならない程に力がある。特にガゾルのような剣士を装っているタイプと剣術で勝負しようとするのは危険な事だ。大丈夫だろうか。

二人は手を伸ばせば届く距離で睨み合った。

「勝負だ、ガゾル！」

熱血漢のカリューが言った。あいつはこういうシチュエーションが好きに違いない。

「いいだろう。一対一も悪くない」

そう言うと、ガゾルは真っ赤な剣をカリュー目掛けて振り下ろし

た。

一瞬、持っていた剣でその攻撃を受けようとしたカリューだったが、寸前のところで後方に飛んでガゾルの攻撃をかわす。

「ほう……その剣では受けきれないと判断して避けたか」

そう言うところガゾルはカリューに詰め寄り、突きの一撃を放った。

それを左手に装備したオリハルコンの盾で弾いたカリューは、鋼の剣をガゾルの真つ赤な鎧の、脇の隙間目掛けて突き出した。

「甘い！」

ガゾルは身体を交わしながらカリューに更に一步踏み込んだ。

そしてそのまま膝蹴りをカリューに食らわす。

「ぐっ」

カリューは痛みを堪え突き出していた剣を勢いよく引き戻した。

再びカリューの剣がガゾルの鎧の隙間を狙う。

「ちいっ」

ガゾルは舌打ちし、身体を半分反らしてカリューの攻撃を避ける。

「根性は座っているようだな」

お互い間合いを開けて再び対峙した。カリューが下段で、ガゾルが上段で剣を構えている。

地面を蹴って再び攻撃を繰り出す。

しかし武器をかばいながら戦っているカリューの方が分が悪いようだ。丈夫そうな剣などは荷物になると思ってドル村に置いてきたからなあ。まさかセイントソードが折られるとはカリューも思っていないかったに違いない。

その後もカリューもガゾルもお互いに攻撃を繰り出したが、決定的なダメージを与える事は出来なかった。カリューが良い武器を装備しているなら既に勝負はついていたかもしれない。

「ふう、ふう……中々やるな……」

ガゾルは肩で息をしながら言った。

「カリューと言ったな？ 俺の鎧の肩の部分を見てみる」

俺はガゾルの言った通り、真つ赤な鎧の肩当ての部分を確認した。

塗料が剥けているのか分からないが、一部分だけ白かった。

その事をカリューも確認したようだ。

「この肩当ての部分が血で染まれば、この鎧の塗装は完了するんだ」  
ガゾルは言った。どうやら奴の装備の色は全て血によるものらしい。

その事に気付いたカリューは歯を食いしばり、鋼の剣の柄を力強く握り直した。

ガゾルはカリューの事を挑発したようだが、カリューは冷静だった。

「何の血で染めたんだ？ 鶏か？ 豚か？ そのナマクラ刀じゃあ、大した物は捌けないだろ？」

カリューは逆にガゾルを挑発した。

ガゾルの顔色は窺えないが、その肩が少し震え始めている。

「ナ、ナマクラだと！ この剣はサイバーに作ってもらった特注品だ！」

それを聞いたカリューは溜息をついて、ガゾルに言い放った。

「いい加減その特注品の威力を見せて欲しいもんだな」

カリューの痛恨の一言で逆上したガゾルは、カリュー目掛けて剣を振り上げて来たが、その大きなモーションをカリューは見逃さなかった。

腕を上には振り上げた事により、鎧の腰の部分に隙間が出来ている。それを見つけたカリューは、鋼の剣をガゾルの腹に突き刺した。

「があああ！」

頭に装備した兜の隙間から魔族独特の青い血が霧のように噴出した。

しかし後少しの所でカリューの装備している鋼の剣が折れてしまった。魔族の強靱な肉体に剣が勝てなかったらしい。

苦し紛れのガゾルの拳がカリューを殴りつけた。真っ赤な手甲の付いた拳によりカリューの額から血が飛び散った。カリューの片目が塞がる。

「カリュー！」

秋留が叫び近づこうとした所をカリューは手を挙げて静止させた。  
「まだだ。こいつをぶっ殺すまでもう少し待っててくれ」

傷だらけのくせして無茶しやる。

正義感の強いカリューは途中で諦めたりする事もしない。少しは妥協も必要だと思っただが。

「貴様、許さんぞ……」

ガゾルは荒い息をしながら脇腹の傷口に手を持っていった。まさか……。

「ぐおおおおお」

ガゾルは傷口に手をつ込むと折れた剣を引き抜いた。見えているだけで痛い。

「はぁ……はぁ……」

ガゾルの息も荒いがカリューもだいぶヤバそうだ。額から垂れる血を腕で拭って視界を取り戻そうとしている。

「しかし……武器が無くなってしまったては最早勝つ見込みは無くなつたな」

ガゾルが剣を構えながらカリューに近づく。

一方のカリューは折れた鋼の剣を見つめながら動こうとしない。

「死ねええ！」

ガゾルが剣を振り下ろした。それを身体まわしてカリューが交わす。しかし視界が狭まっているせいかカリューは背中を斬られた。

痛みを我慢しカリューは装備していた盾でガゾルの兜を殴りつけようとする。

「苦し紛れだなあ！」

それをガゾルは難なく交わすと剣をカリューの首目掛けて振り上げた。

「きゃああ」

秋留が叫ぶ。俺は思わずネカーとネマーを構えた。

再び金属と金属がぶつかり合う音。

カリューが盾でガゾルの攻撃を防いでいた。その盾に体重をかけてガゾルの剣を押し出す。

「うおっ」

ガゾルは思わず体勢を崩しそうになるのを踏ん張って耐えた。

「その剣……本当に特注品か？ そんなによく斬れるのか？」

ここへ来てカリューがガゾルの耳元で囁いた。

「貴様！ まだ言うかつ」

ガゾルが激怒したと同時にカリューの持っていた折れた鋼の剣がガゾルの手首を狙った。盾の圧力により押し広げられた手甲の隙間だ。

「ぐあうっ」

ガゾルの特注品の赤い剣が手から落ちた。

その剣が地面に落ちるより早く、カリューがその剣を握り締めた。ガゾルが喋るより早く。

カリューが握った真っ赤な剣がガゾルの胸を下から薙いだ。青い血が辺りに吹き飛んでガゾルの上半身だけが宙を舞った。

「確かによく斬れる……」

その真っ赤な剣を汚れ物にでも触るようにカリューは地面に突き刺した。

「どんなに立派な装備を身につけようとも、弱者相手にしか振るった事のないような剣じゃあ、俺に勝つ事は出来ない……」

ガゾルの鎧は最後にその持ち主の青い血で染まった。赤と青のまばらな趣味の悪い鎧が出来上ったようだ。

最近目立つ活躍をしていなかったため忘れていたが、カリューの剣士としての腕は一流だ。

だが戦闘が終わると、カリューもその場に倒れこんだ。

「さっきのダメージも回復しきつてないのに動き回るからだよ」

今まで茂みの近くで見守っていた秋留が俺の傍まで来て言った。

「ブレイブとジェットでサイバーを始末してきて」

そう言う秋留はカリューの傍で片膝を付き、回復魔法をかける

ために集中し始めた。

秋留から受け取ったインスペクターを肩に乗せネカーとネマーにセットされている硬貨を確認する。

俺は隣にいるジェットを見て溜息をついた。

「また一緒ですな」

俺の心の中を見透かしたようにジェットが言った。

俺は諦めてジェットと仲良くサイバーの小屋の扉に向かって歩き出した。

カーン、カーン！

サイバーの小屋の中から鉄を叩いている音が聞こえる。あの巨大な鉄のハンマーで叩いているのだろうか。

「どうしますかな？ ブレイブ殿？」

俺はジェットに答える事なく、そのままドアを開けた。ドアを開けると、部屋の中から熱気が飛び出してきた。俺は思わず顔を背けた。

部屋の中ではサイバーが背中を向け、炉から取り出した真っ赤に燃える鉄を叩いている最中だった。

部屋の隅には、おそらくドル村の住人の物と思われる骨が積み上げられている。

「ガゾル、もう終わったのか？」

サイバーは背中を向けながら言った。

「ああ、終わったぞ。奴は外で最後の塗料を塗り終えたところだ」

俺はサイバーに銃を突きつけながら答えた。

サイバーは一瞬止まると、身を屈めながら巨大な鉄のハンマーを振り回した。

反撃する事を予想していた俺は、落ち着いてサイバーの右肩を銃で撃ち抜いた。

「ぎゃああ」

サイバーは鉄のハンマーを放り投げ、右肩を押さえながら転げまわった。

「う、後からとは卑怯だぞ……」

顔中から冷や汗を垂らしながらサイバーは言ったが、俺は答えない。

「お前、大炎山の麓の林の中にあるドルの村って知ってるか？」  
俺は聞いた。

「ドル？ あ、ああ、あの村か……」

右肩から流れ出る青い血を必死で押さえながらサイバーが言った。  
どうやら外見はドワーフだが、中身は立派な魔族のようだ。

「あの村の住人の死体には骨がなかったんだが、あんた何か知ってるか？」

今や恐怖で声も出せなくなっているサイバーは、振り絞るように言った。

「に、人間の骨を燃やして、その火で鉄を打つと、強度が何倍にもなって美しい仕上がりになるんだ……」

「そうか……」

俺はそう言っていると、暫くサイバーの眼を見つめていた。

サイバーの怯えきった眼を見てみると、こいつを殺そうとする意思がなくなりそうで怖かった。

奴の激しい呼吸が聞こえてくる。

「これからは人間と関わらないと誓うなら許してやるう」

俺は言ったが、勿論許すつもりはなかった。

こいつら魔族の習性は知っている。口では「誓う」と言っても、背中を見せた瞬間に襲ってくるのだ。

「わ、分かった。誓う。許してくれ……」

予想通りサイバーは言った。俺は奴の台詞を聞くと黙って後ろを振り返り、ジェットに言った。

「行くぞ、ジェット」

ジェットは困惑していたが、サイバーを一度睨みつけると俺の後



をついて外に出ようとした。

俺とジェットが背中を見せた瞬間、今まで激しかったサイバーの呼吸が、何かを決心したように一気に落ち着いた。

俺は気配でサイバーの動きを追った。

今まで真っ赤に燃えていた剣を左手に構え、今にも飛び出そうとしている気配を感じる。

俺は振り返るとネマーを構え、予想通り剣を振り上げていたサイバーの左腕も吹っ飛ばした。

「ぐおおお……」

両腕を撃たれ、身動きの出来なくなったサイバーの頭上には、俺が吹き飛ばした左腕に握られている剣が迫ってきていた。

「人間の骨で打った剣の威力を、一度自分で味わってみるんだな」

剣はサイバーの眉間に突き刺さった。

依頼達成だ。サイバーの最期を肩に乗ったインスペクターがしっかりと映像に収めている。

「サイバーは？」

外に出ると、カリューの傍に腰を下ろしていた秋留が言った。

「退治したぞ。やっぱり魔族は信用出来ないな」

俺は大抵、自分で魔族にとどめを刺す時は魔族の非道さを再確認していた。

そうしないと姿形が人間に似た魔族を殺す時にためらってしまうからだ。

「痛ててて」

暫くすると、カリューが胸を押さえながら立ち上がった。

俺からサイバーを倒した事を聞くと、村に帰る準備をしようとする案してきた。

「その前に、小屋の裏側にあつた洞窟に行った方がいいかな。さっきサイバーの小屋へ行ってみたけど、サイバーが製造したと思われる武器が見当たらなかったの」

## 第二章 呪いの剣

今は春だったが、サイバーの小屋の裏にある洞窟の中は冬のようにヒンヤリとしている。

俺達は、残党がいる可能性があるため慎重に行動していたが、特に敵は襲ってこなかった。

目の前にはサイバーの作成した武具が収められていると思われる倉庫の扉がある。

俺は何があるか分からない扉を丹念に確認して、鍵を開けた。

「おお……」

俺は思わず声を上げてしまった。倉庫の中には、これから魔族に手渡される予定であろう武器や防具がぎっしりと詰まっていたからだ。

俺は眼を輝かしながら、沢山の武器・防具を眺めていた。

「これらの武具は処分しなくちゃ駄目だね」

秋留が信じられない事を言った。

「な、なんでだよ？ そんなの勿体ないってば！」

俺は必死に訴えかけたが「魔族お抱えの鍛冶屋サイバーを倒し、魔族の戦力を削ぐ事」が依頼の内容だから、サイバーが作成した武具も処分する必要があると言うのだ。

「なあ、頼むよ。一本くらい、いいじゃんかあ？」

俺は秋留の傍にひざまづいて懇願した。

「ブレイブ！ てめえ、また金のために眼が眩んでやがるなあ！」

カリューは顔を赤くして怒ったが、物を粗末にしたら罰が当たると子供の頃から教育されてきた俺には、処分なんて勿体ない事が出来るはずもない。

十分程粘ったすえ、呆れ返ったカリューと秋留が一本だけ拝借する事を許してくれた。

俺が剣を物色している間は、秋留の持つインスペクターには違う

方向を向いてもらった。

どれもこれも逸品揃いだ。中には黄金色に輝く剣もあって迷ってしまうが、俺は一本だけ赤い台座の上に置かれていた真っ黒な剣を選んだ。

俺が選んだ黒い剣以外の武具はカリューとジェットが倉庫から運びだし、サイバーの小屋で未だに熱せられている炉の中に放り込んでいった。

サイバーの倉庫は綺麗さっぱり、武具が片付けられてしまった。

俺達はサイバーの小屋近くの広場でドル村へ戻るための準備を始めた。

村長のドイツにも仇を取った事を伝えなくてはならない。もしかしたらお礼をくれるかもしれないが、あの寂れた村には何も無いだろう。

少し離れた森の陰から煙が出ているのが見える。

サイバーの小屋の煙突から出ている煙だろう。カリュー達が鍛冶屋の真っ赤に燃え盛る炉につつこんだ武具が溶かされている最中だ。今から戻れば間に合うかもしれないが、俺が変な気を起さないように、秋留に忠実なジェットがしっかりと見守っている。

準備を終えた俺は、今回の戦利品である黒い剣を取り出し眺めた。俺が唯一手に入れる事に成功した黒い剣は、重さがほとんどなく、太陽の光を浴びて刀身が光り輝いている。

しかし見た目の美しさとは裏腹に、どこか禍々しい感じがするのは気のせいだろうか。

俺が惚れ惚れと剣を眺めていると、突然目の前の剣を誰かに取り上げられた。

「ちよつと貸せ、ブレイブ！」

俺から剣を奪い取ったのはカリューだった。

剣士としての血が騒いだのだろうか。カリューは眼の色を変えながら、両手で奪い取った黒い剣を構えて、その場で素振りを始めた。剣士としての腕はかなり高いカリューの素振りは、その禍々しい

剣とは裏腹に神秘的な感じがする。

カリューが剣を振るう度に、空気を切り裂く乾いた音が聞こえる。その時、俺はカリューの握る剣の柄の部分にプレートが貼っているのに気付いた。

「おい、カリュー。その柄についているプレートには何て書いてあるんだ？」

カリューは剣を振り回すのを止めて、柄のプレートを見つめた。

「ん……、暗黒騎士ケルベロス様・魔剣ケルベラー……」

カリューが言い終えた瞬間、その名前を呼ばれる事を待っていたかのように、黒い剣から今までとは比べ物にならない程の異様な空気が流れ出てきた。

「だめ！ カリュー！ その剣を早く捨てて！」

今まで黙って俺とカリューのやりとりを見ていた秋留が、突然叫んだが既に遅かった。

剣を取り上げようと飛び出した秋留の目の前で、カリューは闇に包まれていった。

「カ、カリュー……」

俺はあまりのショックに言葉が出なかった。だが次の瞬間には闇も晴れ、何事もなかったかのようにカリューが平然と立っていた。右手には異様な気を発している剣をしっかりと握りながら……。

「全く、信じられねえよ！」

前を歩くカリューは先程から文句ばかり言っている。

俺達はドイツのいるドル村に向かって歩いていた。

林の中は夕暮れの光に照らされて木々の葉が赤く輝いているが、カリューの持つ魔剣の周辺は太陽の光を吸収してしまっているかのように薄暗い。

カリューは俺がサイバーの倉庫で手に入れた魔剣ケルベラーに呪われたのだ。

一般的な呪いの効果と同様、カリューは魔剣を身体から離す事が出来なくなってしまった。

色々とした結果、魔剣を身体どこかに装備しておけば問題ないが、魔剣以外の剣を握る事は出来ない事が判明した。

予備の剣を握ろうとすると、見えない力にカリューの手が弾かれてしまうのだ。

「落ち着けよ、カリュー。その剣、結構似合ってるぜ」

青色の聖なる装備に身を包み、右手に真つ黒な剣を装備しているカリューに向かって言った。

「ブレイブ！ カリューをからかわないの！ 元はと言えば、あなたが奇妙な剣を倉庫から持ち出したのが悪いんでしょ？」

怒りに顔を真つ赤にし始めているカリューに代わって、銀星に乗って隣を歩いている秋留が静かに言った。

「それにしてもサイバーは性質の悪い剣を作りましたな」

ジェットが銀星の手綱を引きながら言った。

「元々呪われた剣を作るなど……。一体どういう目的で作ったんじゃないだろうか」

ジェットの言う通りだった。

普通、呪われた装備というのは、主人の悲惨な死により怨念が武器に伝わって作られる。

初めから呪われているのでは、誰も装備したがないのではないだろうか……。

それからドルの村を目指して歩いていたが、行きと比べてモンスターの出現率が高かった。夜遅くなってきたからだろうと判断した俺達は、特に気にすることもなく襲い来るモンスターを討ち倒していった。

カリューの持つ魔剣は見た目は禍々しかったが、その威力は凄まじく、実体のないゴーストのようにモンスターを軽々と切り裂いていた。

ドルの村に着いたのは、初めてこの村に来た時と同じ深夜だった。ドイツのいる宿屋の扉の取っ手は、俺達が壊したままとなっている。

ジェットが木の扉に手を掛けた時、またしても中から銃身が姿を現した。

「あ、あのジジイ！ ボケてんのか！」

俺は叫んだが、遅かった。

ショットガンの威圧感のある発砲音と共に、ジェットがうめき声を上げて吹き飛んだ。

俺は木の扉を蹴って開けると、ネマーをホルスターから抜いてドイツの顔の目の前に構えた。

「おい！ ジジイ！ どういうつもりだ！」

俺はキョトンとしているドイツの目の前で聞いた。

「あ、あんたらだったのか……。あまりにも妖しい気を感じたんで、つい魔族かと……」

俺は無言でカリューの持つ魔剣ケルベラーを見つめた。

翌日も雲一つない青空だった。

「さて、次はどこに向かう？」

カリューが地図を広げてメンバーに問いかける。今は宿屋の部屋で作戦会議を行っている所だ。

「ちよつと良いですか？」

パーティーの作戦会議にドイツが口を挟んできた。全く、これだから素人は困る。

「何です？」

カリューが顔を上げてドイツを見る。若干、非難の色が浮かんでいるのは呪われて色タイライラしているためかもしれない。

「い、いや、差し出がましいとは思うのですが……」

「気にしなくていいですよ」

秋留が優しく言った。秋留は本当に優しいな。

「カリューさんのその剣……。どうするおつもりですか？」

俺たちパーティーが怖くて敢えて触れていなかった話題にドイツは触れた。それはそれで助かったかもしれない。

「その辺の村にいる司祭にでも頼んで呪いを解いてもらっさ」

カリューはぶっきらぼうに答えた。

「もし司祭でも呪いを解く事が出来ないようなら、アステカ大陸にあるガイア教会本部を目指した方がいいでしょう」

「……大陸中央に位置するアース・プレイヤ教会ね？」

秋留がマップも見ずに言った。一度行った事があるのだろうか？

「ふむ……それなら船に乗ることになりますかな？　まずは港町を目指して進みますかのお」

カリューが再び地図を覗き込んだ。

「それじゃあ、街道を港町ヤードに向けて進もう……そうすると次の目的地はワンドナだな」

俺達は早速ドルの村を発ち、サイバーを倒した報酬を受け取るため、そしてアステカ大陸に渡るためにワンドナを目指す事にした。

「住人の仇を取ってもらい、ありがとうございます」

ドイツは言った。俺の予想していた通り、御礼の品は無さそうだ。「まずは魔族に殺された住人を弔い、ドルの村を少しずつ復旧させていきます」

「今度からは外の様子を正確に窺える家に住むといいんじゃないかのお」

腹に二発のショットガンの弾丸を受けたジェットが言った。

ドイツは汗を拭いながら謝った。

「では、そろそろ出発します。色々ありがとうございます」

秋留が言った。いつもはパーティーのリーダーであるカリューの言う台詞なのだが、魔剣に呪われたカリューは不機嫌だった。

最後に俺たちはドイツに礼を言くと、ワンドナ目指して出発した。

ワンドナへは馬車で五日程の距離にある。街道を進めるためモンスターの出現率もそれ程高くないだろう。

……と思っていたのだが、予想以上にモンスターに襲われる回数が多かった。

「珍しいですな」

ジェットがポツリと呟いた。そのジェットの視線が一瞬、カリユーの持つ剣に向けられたのを俺は見逃さなかった。

やっぱりあの黒い不気味な剣のせいなのか。

モンスターに襲われる回数が多かったせいか、ワンドナの町が見えてきたのはドル村を出発してから七日が経過した朝だった。

「もう身体痛いしお風呂に入りたい」

秋留が元気良く馬車から飛び降りた。

「じゃあ俺達は宿屋を探してくる。ブレイブは魔族討伐組合に行つていてくれ」

カリユーが元気良く言った。七日の馬車旅で落ち込んでいたカリユーも若干元気を取り戻したようだ。

魔族討伐組合担当の俺は他のメンバーと別れてこの町にある組合の営業所目指して歩き始めた。

魔族討伐組合でサイバーを倒した報奨金を受け取ると、パーティーのメンバーで山分けした。魔族二匹を倒したのがインスペクターにより報告されたため、報奨金も倍以上になった。お陰で俺の懐はホクホクだ。

俺たちは疲れきった身体をベッドに投げ出すと速攻で眠りに落ちた。

翌日、教会に行き司祭に解呪を頼んだが、カリユーの剣の呪いが解かれる事はなかった。そんな単純なものとは思っていなかったが、やはり簡単に解呪出来ないとなると色々心配な事も出てくる。

司祭が言うには「レベルが低くて解呪の効き目が薄かったのかもしれない」という事だ。

仕方なく俺達はドイツの提案通り、ガイア教会の本部を目指す事



にした。

### 第三章 困惑

昨日までの雨もすっかり止み、今日は雲一つない青空だ。

俺達パーティーはアステカ大陸にあるガイア教会本部のアース・プレイヤ教会へ行くためワンドナを更に南下し、同じ大陸にある港町ヤードを目指して今は深い森を歩いている最中だ。

「それにしてもさあ、間抜けな話だよな」

俺は秋留に話し掛けた。

「ん？ 何が？」

秋留が黒い瞳で俺を見つめながら答えた。

俺は少し照れながら言った。

「だってさ、この世界のどこに、禍禍しい呪われた剣を装備した勇者がいると思う？」

俺達はカリューの剣の呪いを解くために、アース・プレイヤ教会を目指しているのだ。

ワンドナを出発してから、今、俺達が歩いている森に到着するまで、半月程かかってしまった。

カリューの持つ魔剣の効果で呼び寄せられたモンスターを倒しつつ旅を続けていたからだ。

前を黙々と歩いてきたカリューが振り向いた。

「元はと言えば、プレイブ！ お前が暗黒騎士ケルベロスからこんな剣を盗むからいけないんだろう？」

確かに剣を拝借したのは俺だったが、カリューが俺から剣を奪い取らなければ呪われる事もなかったはずだ。

反論しようとした俺を隣の秋留が眼で制した。今はカリューに口答えしない方が良さそうだ。

それから特に話す事もなく黙々と歩いていると、いつの間にか森の中は薄暗くなって来ていた。

さっきまで空には太陽が出ており暖かな空気が流れていたのが、

今は涼しげな空気へと変わっている。

その時、前方を先行して探索していたジェットが銀星に乗って戻ってきた。

「まだまだ森は抜けられそうにありませんな。少々危険ですが、今日はこの辺で野宿しといた方が良さそうですぞ」

俺達は早速、野営の準備を始めた。

この森に入る事が決まった時に馬車は売り払っていた。今は銀星とアルフレッドにテントや雑貨等を紐でくり付けている状態だ。

不思議な事に森を歩いていた時に獣に襲われたりしなかったため、今日のメニューは木に生っている果物を食べる事になった。

モンスターの一匹や二匹襲って来てくれれば、その場で捌いて今夜のおかずになったのだが……。育ち盛りの俺としては肉を食べたかったが我慢するしかなさそうだ。

今日のメニューは森に必ずと言っていい程生息している野イチゴと、高い木に生っているリンゴに似た果物、ワツカだ。

ワツカは見た目こそリンゴのようだが、その果汁はトロリと甘く疲れを癒してくれる。

俺は適当なサイズの小石を探し、木の上の方に生っているワツカ目掛けて投げた。

普段ネカー&ネマーで慣らしているだけあって、小石は百発百中でワツカに命中した。

俺は落ちてくるワツカをキャッチし、調理担当の秋留へ渡した。

飛び道具が得意ではないカリユーはチマチマと茂みを漁り、野イチゴを採っていた。

馬で念のためキャンプの周りを探索しつつ、獲物も探していたジェットが戻ってきた。

「この周辺には、獣の気配すらありません。森深くにいるとは思えませんな」

秋留が果物の皮をナイフで剥きながら言った。

「おかしいのは、この周辺だけじゃないよ。この森に入ってから一

度も襲われてない。いつもならカリューの放つ魔剣ケルベラーの殺気に誘われて、モンスターが集まってくるのに……」

結局その日は一人ずつ見張りを立てて交代で寝る事にした。始めに秋留が見張りに立ち、ジェットが見張りに立ち、三人目で俺が見張りに立つ事になった。

「ふあ~~~~、早く交代の時間が来ないかなあ……。つてか何で死人のジェットは眠るんだろうなあ。死んでんだから睡眠なんて必要ないんじゃないかなあ……」

俺は一人、文句を言いながら辺りを見回した。いくら昼間に獣に襲われなかったからと言っても気を抜くわけにはいかないし、俺は肉を喰いたい。

その時、右前方の茂みでガサガサと音が聞こえた。

俺はホルスターから素早くネカーとネマーを取り出し構えた。既に硬貨はセツトされている。

荒い息を立てながら茂みから出てきたのは……。大型の狼ワイルド・ウルフだ！

俺は生唾を飲み込んだ。こいつの後ろ足は筋肉が発達しており、焼いて食べると大変な美味なのだ。

ワイルドウルフのステーキは美食家である俺の好物のうちの一つなのだが、貴重品のため数える程しか食べた事はない。

市場では大体片足一本十万カリムで売られている超高級品だ。

俺が今、正に、口からよだれが垂れるのを我慢しつつトリガーを引こうとした瞬間、後方でもガサガサと音が聞こえた。

俺はとっさに、左手に持ったネカーをワイルド・ウルフに構えながら、右手に持ったネマーを後方に向けた。

二本の張りのある後ろ足……。なんと、後方から現れたのもワイルド・ウルフだった。貴重品であるワイルド・ウルフの足に一晚で二度もお目にかかれるとは、俺はなんて幸せ者なんだ。

俺はとっさに考えた。二匹で後足が四本分という事は、十万カリム×四＝四十万カリム、という事だ。俺が一人で二本分を食べたと

しても、残りの二本を市場で売れば、二十万カリムになる。

いやいや、貴重なワイルド・ウルフの肉を苦勞もしていない下民共に食わしてやる必要はない。俺がこの場で四本分食い尽くしてくれようか……。

俺が錯乱していると、目の前の茂みから唸り声と共に、蛙と熊を足して二で割ったような外見のモンスター、ポイズンベアが現れた。身長はカリューよりも高く、大きく開かれた口からは涎を垂らしている。こいつは狙った獲物に対して毒液を吐く事で有名だ。

ポイズンベアの口から垂れた涎が、地面に落ちる度にシューシューと煙が上がっているのが見える。

奴の眼には、ワイルド・ウルフの後ろ足のように、俺の身体が旨そうに見えているのだろう。

俺は、素早い動きでワイルド・ウルフ二匹に構えた銃をポイズンベアに向け、ネカー&ネマーのトリガーを同時に引き、ポイズンベアの眉間と心臓に硬貨を打ち込んだ。

戦闘では、特殊能力を持ったモンスターを真っ先に倒すのが常識だ。

硬貨が命中し、ポイズンベアが断末魔の叫び声を上げる前に、俺は既にワイルド・ウルフ二匹にそれぞれ一発ずつネカーとネマーの硬貨を眉間に打ち込んでいた。

その戦闘が合図となったのだろうか。俺達のキャンプの周りの茂みから一斉に獣の唸り声が聞こえ始めた。

「おい！ みんな起きてくれ！ モンスターに囲まれちまった！」

俺は次々に茂みの中から飛び出してくるモンスターを倒しながら、仲間が装備を整え終わるのを待った。

「な、なんだこりゃ？ なんでこんなに沢山のモンスターに囲まれてるんだよ？ ブレイブ！ てめえ、見張りをサボって居眠りしてたんじゃないだろうなあ？」

テントから装備を整え終えたカリューが出てきてののしった。カリューは早速、襲い来るモンスターを魔剣ケルベラーで切り倒して

いる。

昨日寝る前に一通りタオルで磨いたカリューの装備一式が、あつという間にモンスターの血で汚れていった。

カリューの隣ではジェットがレイピアで華麗にモンスターを捌いている。さすが英雄とされるだけあって、その動きには無駄がないそれにしても、ここまでモンスターに囲まれていたのに気付かなかったのはおかしい。

盗賊である俺は、常人よりも五感が発達しており、モンスターの息遣いなら二十五メートル離れていても察知出来る自信がある。

ちなみに敵との距離やモンスターの大きさなどの目方が正確なのも、盗賊としての特徴のひとつだ。もちろん俺は、その辺にも自信がある。

「これは……、悪意の霧！」  
マリス・ミスト

テントから準備を終えた秋留が出てきた。寝起きの悪い秋留の眼は、市場でいつまでも売れない魚のような濁った眼をしていたが、頭は働いているようだ。

秋留の隣には銀星とアルフレッドが寄り添っており、時折カリューとジェットの嵐のような攻撃を擦り抜けたモンスターを、強靱な後ろ足で蹴り飛ばしている。

「悪意の霧ですと？　霧に包まれている者の五感を下げる魔術師の技でしたな？」

さすが年長者のジェットというところか。悪意の霧なんていう技は俺は初耳だ。

その霧のせいで、俺は近づくモンスターの気配を察知する事が出来なかったのだろう。

俺がなまけていたのではない事が、これで判明した。

「とりあえず悪意の霧の有効範囲内にいたら駄目！　一点突破でこの場を逃げるよ！」

秋留の指示に従って俺達は荷物をまとめ、モンスターの群れから逃げ出した。

しかし、いつまで走っても悪意の霧の有効範囲から出る事は出来ずに、ただひたすら森を抜けるまで走りつづける事になったのだった……。

これが、俺達パーティーが森の中を全力疾走した理由だった。

残念な事に途中でアルフレッドを失う結果にもなってしまった。冒険経験も少なく死馬でもないアルフレッドにはきつかったのだらう。

「あ、やっと起きたんだね」

秋留が銀星の背中で眼を覚ました俺を見ながら言った。

俺の隣では銀星の背中でカリューが涎を垂らしながら寝ている。森の中で遭遇したポイズンベアのぞつとするような涎を思い出して身震いがでる。

男と添い寝する趣味のない俺は銀星から飛び降り、秋留の隣まで歩いて近づいた。

横目でチラッと銀星の顔色を窺ったが、やはり野郎二人を乗せていたせいか、かなりの膨れっ面で歩いている。

「秋留！ よくも騙したなあ！ もう死ぬかと思ったぞ」

「あはは、死ななかつたんだから良いでしょう？」

秋留の悪戯っぽい眼を見ると、何も言い返せなくなってしまう。

「お？ ブレイブ殿、丁度いい時に気がつかれましたな。後少して村に着きますぞ」

ジェットが近づいてきて言った。

ジェットと言えば、森の中の戦闘で太腿に剣が刺さっていたりと傷だらけであったが、今はその傷もすっかりなくなっていた。

腹の部分の鎧は相変わらず硬貨大に砕けていたが、鎧の砕けた穴から見えるジェットの肉体自体は元通りになっている。

死人であるジェットと死馬である銀星は、傷を負っても暫くすると、傷口からミミズのようなモノがウネウネ出てきて、あつという

間に元通りとなってしまうのだ。

その傷が治っていく様は大変気持ち悪いのだが、今回は眠ったため見なくて済んだ。

眠りから覚めたばかりで、まだ意識もはっきりしない状態だったが、歩きながら前方を見ると、ジェットの言った通り、小さい村が見えた。

ワイルド・ウルフの旨そうな後ろ足を食い逃した俺は、腹がペコペコだったし、銀星の背中では休んだくらいでは体力が全快するはずもなく、まだまだ疲れが溜まっていた。

俺は最後の気力を振り絞り、遙か前方に見え始めた村を目指して歩き始めた。

十分程歩くと、村の全体が見えてきた。村と言うくらいだから、あまり大きくはないようだ。

村全体は頑丈そうな木の柵で囲まれ、村の入り口には鉄で出来た簡単な門があり、その左右には馬に乗った騎士が見張りをしていた。柵の周りを定期的に巡回している別の騎士や冒険者の姿も見える。どこの村や街でも住人を守るためにこうして警備の者がいる。警備の数が多い程、ある程度は安全な住処である事になるのだが、その分、住民税が高い場合が多い。

常に冒険を続けて決まった住居を持たない俺たち冒険者には関係の無い話だが……。

俺達が近づくと、門の右側で鉄の槍を構えていた騎士が話し掛けてきた。

「身分証を見せてもらえるかな？」

少し大きめの村や町になると、警備も厳しくなってくる。

大陸全土に渡って指名手配されている罪人や、人間に化けた魔族などを入れないための措置だが、力づくで侵入されてしまう場合もある。

俺達は完璧に寝ているカリューの身分証も合わせて騎士に見せた。



「貴方がブレイブさんですね……。で、そちらが秋留さん、馬の上に寝ているのがカリューさん……」

騎士はそこまで言うと、ジェット顔を見つめつつ言った。

「そちらの御老人がジェットさん？」

「いかにもワシがジェットじゃ」

槍を持った騎士は門の左側で同じく門番をしている三十歳前後の騎士の所に馬を歩かせ、ジェットの身分証を見せているようだ。

二人の騎士の顔がみるみるうちに険しくなっている。

その時、様子を見守っていた秋留がロッドを二人の騎士の目の前にかざしながら、近づいていった。そのロッドには堕天使のお守りが情けなくぶら下がっている。

「何も問題はないはずです……」

秋留は優しい声で二人の騎士に向かって言った。

「ここを通してもらえますか？」

思わず通してしまいたくなるような優しい声だった。秋留が俺の横を通り過ぎた時に、甘い香りが漂った。

ドル村のドイツから話を聞く時に使った方法をまたしても行っているようだ。一体どんな術なのか俺は知らない。

目の前では、二人の騎士が黙って鉄の門を開けている最中だった。門を抜けて暫く歩くと、『ジェーン・アンダーソン村へようこそ』と書かれたアーチが頭上に見えてきた。

村の中央には小川が流れ、道端には花々が咲き乱れていて、この村のどこかを前面に押し出していた。

家は全てレンガで造られていて、冒険者目的の宿屋や武器・雑貨屋も多く目立つ。

門を少し離れた所で秋留が言った。

「ジェットの身分証は役に立たないね。誕生日が二九四三年だもん。今が三〇五九年だから、ざっと計算すると、ジェットの年齢は……百十六歳という事になってしまう。」

そんな高齢の老人が村の外からやってきたら、誰でも疑問を持つ

てしまうだろう。

「そのうち、なんとかしないと駄目だなあ」

それを聞いて、ジエットは面目無さそうに秋留の後について歩いて行った。

村の雰囲気には癒され長閑な町並みを眺めながら歩いていると、村の広場へ出た。

雲ひとつ無い青空の下、噴水の周りでは町の子供達が元気よく遊んでいる。

噴水の石で出来た囲いには、子供達の親と思われる三十歳前後の女性数人が腰を掛けて談笑していた。広場の反対側では、散歩をしている老人の姿も見える。

「なんか、これでもかかってくらいなのどかさだな。さっきまでモンスターに追いかけられていたのが夢みたいだ」

俺は、町の暖かさにほっとしながら言った。

その時、噴水の周りを走り回っていた子供が突然、俺達を見て立ち止まった。

「おっす！ 坊主。今日は天気が良くて気持ち良いなあ」

俺は子供の目線まで腰を落とし話掛けた。

しかし、その子供の大きな瞳は、銀星の上で未だにへばっているカリューを見つめていた。

「？」

俺は子供の視線につられてカリューを観察した。

やたらとドス黒い。

「カリュー殿の剣が……邪悪な気を発していますですじゃ」

ジエットが思わず腰に下げたレイピアに手をかけた。

「な、何！ 何で急に！」

いつも冷静な秋留が頭に手を当てて右往左往している。

「うきやあああああ~~~~！」

眠気も一発で覚めるような子供達の金切り声だった。まるでマンドラゴラを地面から引き抜いてしまったかのようなうだ。

子供の目線まで顔を落としていた俺は、その声を間近で聞いてしまい、暫く頭がクラクラした。

その子供の泣き叫ぶ声をきっかけに、広場にいた子供達の全員がカリューの持つ剣を見ながら、泣き叫び、散歩をしていた御老人は心臓を抑えその場に倒れこんだ。

子供達の母親もカリューの持つ剣の余りの禍禍しさに気付いたのか、子供達を連れ、広場から立ち去っていく。

広場でパン屑を摘んでいた鳩達も危険を察知して一斉に飛び去る。少し離れた場所の家に繋がれている馬も凄じい勢いで暴れ始めている。『……』

俺達は仲良く固まってしまった。銀星の上でそ知らぬ顔で寝ているカリューが羨ましい。

「！」

いち早く秋留が現実逃避から戻ってきたように頭を降り始めた。そして広場の向こう側を凝視している。秋留の視線を追うと、自分では身動きの出来なくなった老人が、胸を押さえながら天に向かって右手を伸ばしているのが確認出来た。

先立たれてしまった御婆さんの姿でも見えているのだろうか。

「助けに行った方が良さそうだね。ブレイブ、手伝って？」

俺が失礼な想像をしていると、秋留が言った。

秋留は老人の所まで走り寄って回復魔法をかけ始めた。

「もう大丈夫そうだね。ブレイブ、老人をオンブしてくれる？」

俺の背中は秋留のためだけに用意してあると言いたかったが、秋留を怒らせる訳にはいかないので、渋々老人を背負った。

老人は意識が朦朧としている中で、はっきりと自宅の場所を説明している。

ただ、俺の背中に背負われている老人の声が、俺の丁度耳元で聞こえてくるため、その吐息が耳に当たり全身に鳥肌が立った。やはり男なんて背負うもんじゃない。

老人を自宅のベッドに寝かせると、俺と秋留は噴水のある広場に

戻ってきた。

今まで沢山の人で賑わっていた平和な風景が一転して、殺風景な噴水へと変わっている。繋がれていた馬まで自力で綱を切つてどこかへ走り去ってしまったようだ。

「てめえ！ カリュー！ いつまで寝てやがるんだ！」

俺は未だに熟睡しているカリューの頭を殴った。

俺達は治安維持協会のＪ・Ａ村支部へ連れて行かれた。

治安維持協会は本来、治安維持を目的として罪人などが連れて行かれる施設なのだが、カリューの呪われた剣のせいで、俺達は今、治安維持協会のＪ・Ａ村支部の椅子に座っている。

「困るんですよ、そういう物騒な物を町の中に持ち込まれては」

俺達がパイプ椅子に座らされているのに対して、治安維持協会Ｊ・Ａ村支部長のフランスキーは、本革の豪華な椅子にその巨体に乗っけていた。

馬である銀星がパイプ椅子に座る訳もなく、建物の外でロープに繋いで留守番をしてもらっているが、俺達のリーダーのカリューもなぜか椅子に座らずに、部屋の片隅に立たされている。

Ｊ・Ａ村支部長のフランスキーは五十二歳という事で、死ぬ前のジェットと良い勝負なのだが、カリューの剣を目の前にした時に、広場の老人同様にその場に蹲ってしまったのだ。

そのため、カリューは膨れっ面で部屋の隅に立っていた。

「まあ、呪われていて剣を外す事が出来ないからと言って、村の外で野宿しろ、とは言いません。今、この村にいる司祭のジーニスを呼んでいますので、少々お待ちになって下さい」

俺はジーニスという女性が現れるのを待っている間に、部屋の中を観察した。

初めて来た町や村などは、隅から隅までくまなく調べないと落ち着かないのが、俺の性格だからだ。

まず、目についたのは、フランススキーの後ろの壁に飾ってある趣味の悪い大きな写真だ。

いかにも装飾用といった感じの鎧を身にまとい、右手には槍を構えているフランススキーの間抜けな姿が写っていた。

部屋の中には写真以外にも、フランススキーに関するような物で溢れていた。まるで『フランススキー記念博物館』といった感じだ。

フランススキーが言い終わると同時に、部屋のドアがノックされ、白いローブに身を包んだ女性が現れた。

髪は秋留と同じストレートで、地面に届きそうな程長く、綺麗な金色をしている。

年は俺達よりも下のように見えたが、司祭という職業柄か、少し落ち着いて見える。

「どうも、フランススキーさん。それと皆様方、遠い所、よくジェーン・アンダーソン村へ来て下さいました。私、司祭のジーニス・アンダーソンと言います」

「アンダーソン？ この村の名前と一緒にですな。何か関係があるのですか？」

無口な方のジェットが柄にもなく積極的に聞いた。

「はい。この村を作ったのは、私の曾祖母になるんです……。まあ、アナタですね？ 確かに全身から死臭が漂っているようです。早速、私の魔法で呪いが解けるかどうかやってみましょう」

ジーニスと名乗ったその娘は、死人であるジェットに対して、魔法を唱え始めた。

「小鳥の囀り、川のせせらぎ、大地の恵み……。この自然に溢れるガイアの力よ、この者の呪いを解きたまえ……」

ジーニスは詠唱と共に手を上に掲げ、力を溜めているようだった。「浄化の光？ ちょ、ちよっと、司祭さん？ 何してるんですか！」

勝手に暴走している司祭のジーニスに暫し呆れていた秋留だったが、魔法を唱え始めた瞬間、パイプ椅子から立ち上がり、ジェットとジーニスの間に割って入った。

「まあ、あなたは同じパーティーの方ですね？　この方の呪いを解きたくないのですか？」

ジーニスは信じられない、といった顔をして秋留を見つめた。

「ジェットは死人なんです！　死臭がして当たり前なの！」

秋留の後ろでは、ジェットが半分浄化され、身体から青白い煙を放出している。

ジェットが死人であると聞いたジーニスは顔を真つ赤にして、秋留とジェットに対して謝っていた。

ジェットは、「大丈夫です」と言っていたが、眼は涙目だった。やばかったんだろうな。

それを離れて見ていたフランスキーは言った。

「ジーニスさん、もう少し落ち着いて下さい。曾祖母のジェーン・アンダーソンさんは、どんな時も冷静な司祭であつたと聞いていますよ」

「は、はい、すみませんでした！」

「全く、アンダーソン家は代々司祭の家系で、あなたの母親は、かの有名な勇者ボウストのパーティーにも参加していた事もあるというのに……」

フランスキーはジーニスの慌てぶりを見ながら悲しそうに言った。

勇者ボウストとは、義手の勇者とも呼ばれ、一度は再起不能と噂されたが、最近になって再び活躍が噂されるようになった冒険者だ。

俺達のパーティーのリーダーとは違い、ボウストは金色の眼を持つた本物の勇者らしい。

「ご、ごめんなさい……」

ジーニスは言った。

最早、司祭として登場したジーニスに威厳はなかった。

「ジーニスさん。それでは早速、部屋の隅にいる剣士さんの呪いを解いてもらえますかな？」

フランスキーは気を取り直して、ジーニスに言った。

「ええっ？　隅に人がいるんですか？」

ジーニスは部屋を見回し、隅にカリューがいるのを発見した。どうやら、今まで気付かなかったようだ。フランスキーは再び自分の世界に入り込み、ブツブツと文句を言い始めている。

今まで慌てふためいていたジーニスだったが、カリューの持つ魔剣ケルベラーを見た途端、一瞬で顔が険しくなった。

「魔剣……ケルベラー……ですね。その剣、どのように手にしたのですか？」

「お嬢さん、この剣の事、知ってるんですか？」

カリューは言いながら、ジーニスに歩みよったが、それと同時にフランスキーが苦しみだした。

仕方なく、フランスキーを除いた全員が、部屋の隅に移動して話し合う事になった。

狭いスペースに集まると、死人のジェットの香りが漂ってくるが我慢する事にする。

「曾祖母を殺したのが、暗黒騎士ケルベロスだったんです」

それを聞いて、俺達は言葉を失った。俺はよりもよって、何て剣を選んでしまったのだろう。

俺達は魔剣ケルベラーを手に入れた経緯を話した。

俺に向けるジーニスの視線が痛い気がする。

「とりあえず、私のレベルで、呪いが解けるかどうかやってみましよう」

ジーニスは先ほどと同様に手を掲げて、呪文を唱え始めた。

「小鳥の囀り、川のせせらぎ、大地の恵み……。この自然に溢れるガイアの力よ、この者の呪いを解きたまえ……。浄化の光！」

ジーニスの言葉と共に、カリューの身体を柔らかい光が包みだした。

魔剣ケルベラーから異様な殺気が薄くなり始めたと思った時、カリューが険しい顔を始めた。

「ぐおおおお。お、俺から離れる……。俺の右手ごと、剣が勝手に動きそうだ……」

カリューは左手で右手首を必死に押さえている。まるで右手が別の生き物にでもなってしまったかのようだ。

その時、魔剣ケルベラーに呪われた時と同様に、カリューの身体を闇が包んだ。

「危ない！」

ジェットは叫びながら、カリューの目の前で呆然と立っていたジーニスを押し倒した。

一瞬でもジェットの判断が遅かったら、ジーニスの首は飛んでいただかもしれない。

ジーニスが居た空間に、カリューの持つ剣が振られたのだ。的を外れた剣は、そのまま部屋の木で出来た床を砕いた。

俺はカリューの姿を見て愕然とした。カリューの身体からは異様な殺気が放たれ、肌は薄黒くなっている。

「カ、カリュー……」

俺は、名前を呼ぶので精一杯だった。

カリューは呼びかけに気付いたのか、俺の方を振り向いた。

俺を見つめるカリューの眼は燃えたぎる炎の様に赤かった。

青い短髪の髪の毛は、その殺気を象徴するように真っ黒に染まり、口元には牙のようなものが生えているのが見える。

「これは、呪いなんていう生易しいものじゃないよね」

秋留が俺の隣でロッドを構えつつ言った。

カリューの後方では、ジェットがジーニスを守るようにレイピアを構えている。

J・A村支部長のフランスキーは机の下にでも隠れているようだ。俺は目の前のカリューに注意を払いつつ、辺りを窺った。

支部長席の机の端から、フランスキーの汚くてデカイ尻が出ている。頭かくして尻隠さずとは、正にこの事だ。

俺がフランスキーの今の状態をもっとよく表現出来る比喻を考えていると、突然カリューが床を蹴り、俺と秋留の方へ攻撃してきた。戦闘中でも何でも、すぐに思考が反れてしまう事が俺の欠点だが、



身体はカリューの攻撃に対して条件反射的に避ける動作へと移っていく。

俺と秋留は成す術もなく、左右に飛んでカリューの攻撃を避けた。カリューはそのまま剣を振り、レンガの壁を叩いた。高い音と共に火花が散る。

「ぐるるる……」

カリューは俺達に背中を見せながら不気味な声を発している。

その隙を見逃さなかったジェットはカリュー目掛けて突進し、カリューの身体を壁に押しつけた。

カリューの身につけている聖なる鎧が壁に叩きつけられ、鈍い音が響く。

「ワシが押さえつけている間になんとかしてくれい！」

ジェットが必死になって叫んでいる。いくらレベル五十二のジェットでも五十八歳という年に勝てる訳もなく、今にもカリューの力に振り払われそうだ。

「な、なんとか、って言っても……」

俺は助けを求めるような眼で秋留を見た。

「分かっていると思うけど、原因はあの剣だよ。だから、あの剣に対して攻撃してみよう」

秋留は冷静に答えた。

なぜここまで冷静になれるのだろうと思いつつ、俺はネカー＆ネマーを構える。

秋留も隣で魔法を唱え始めた。

「炎の精霊イフリートよ。炎の弾丸で敵を撃ち抜け……」

秋留が攻撃のタイミングを視線で送ってきた。

「おう！ 任せろ！」

「ファイヤーバレット！」

秋留が魔法を唱えた瞬間、ロッドの先から炎の弾が発射された。

俺はカリューの持つ魔剣ケルベラーに照準を合わせ、魔法が発射されたのと同時にネカーとネマーのトリガーを引いた。

秋留が放ったファイヤー・バレットの炎の弾丸と、俺がネカーとネマーから発射した硬貨が回転しながらカリューの剣を目掛けて飛んでいく。

しかし、カリューは俺達が攻撃を行った時には、ジェットの押さえ込みを振り払っていた。

「うがああああ」

カリューは不気味な叫び声を上げ、壁に向いていた身体を回転させると、そのまま魔剣ケルベラーを振るった。

カリューに押さえ込みを振り払われて体勢を崩していたジェットは、魔剣ケルベラーの攻撃を避ける事が出来ずに、脇腹を切り裂かれた。

ジェットの身体からは血が吹き飛ぶ事はなかったが、代わりに白い蛆虫のような物が飛び散った。

「ぐああああ」

ジェットもカリューに負けない叫び声を発した。いくら死人の身体といっても、ダメージを受けた時の痛みは伝わるのだ。

それを考えると、森の中でジェットの腹に俺の銃から発射された硬貨が命中した時は、かなり痛かったに違いない。

ジェットを振りほどいたカリューは、襲いくる炎の弾と硬貨の弾を寸前でかわし、俺と秋留に再度狙いを定めた。

カリューを外れた炎の弾丸は近くの書棚に命中し表面を軽く焦がし、俺の放った硬貨の弾丸はレンガの壁を打ち砕いた。

燃えるような赤色になってしまったカリューの無気味な眼が、俺と秋留を見つめている。

「浄化の光！」

カリューが再び床を蹴って攻撃を繰り出そうとした時、カリューの後方にいたジーニスが解呪の魔法を唱えた。

その眩い光を浴びて、カリューの動きが一瞬止まった。

俺はその一瞬を逃さずに、カリューが元に戻る事を祈りながら、ネカーとネマーのトリガーを引いた。

俺の放ったネカーとネマーの硬貨が魔剣ケルベラーの刀身に当たり、鈍い音を放つ。

普通、武器への攻撃を行った場合は、相手の手から武器だけを飛ばす事が出来る。しかしカリューは呪いの影響で、どんな衝撃が発生しても手から武器が離れる事はないようだ。

カリューの身体は、威力のある俺の愛銃の攻撃で魔剣ケルベラーごと吹っ飛び、J・A支部長室の木製のドアをブチ破り、廊下のレンガの壁に思いつきり打ちつけられた。

廊下には壊れたドアの破片が散らばり、惨劇の後を物語っている。誰も口を開けようとはしなかった。

カリューは思っていたよりも派手に吹き飛んだが、大丈夫だろうか。

今まで脇腹を斬られうずくまっていたジェットは、傷口を抑えつつ立ち上がった。その傷は今、正に治っている最中であり、白いミズのような物が傷口を治しているのを俺はまともに見てしまった。廊下に倒れているカリューの右手には相変わらず禍禍しい剣が握られていたが、その身体からは異様な殺気を放ってはいなかった。肌の色も元に戻り髪の毛もいつものような青い色をしている。

「とりあえずは落ち着いたみたいね」

秋留はカリューに近づき様子を見ながら言った。

隣では司祭のジーニスも心配そうにカリューを見守っていた。

「すみません、私の未熟さでこのような事になってしまつて」

ジーニスは尚も謝まろうとしたが、秋留がそれを制した。

「気にしないで？ 腕は関係ないと思うよ。ただの呪いじゃあ無さそうだし」

騒ぎが落ち着いたのを確認し、机の下に隠れていたJ・A支部長のフランスキーが出てきた。

よっぽど恐怖に怯えていたのだろうか。顔には汗をたっぷりとかき、白いYシャツの脇の部分は色が変わっている。

「なんという事だ。こんな危険な奴を放っておく事など出来ないぞ

！ 今すぐ治安維持本部へ連絡を取って、対応を行ってもらおうとする！」

フランスキーが広い額に血管を浮かび上がらせながら怒鳴った。奴の唾がここまで飛んできそうだ。

フランスキーの言葉に対して、俺達は何も言い返せなかった。

反論の余地はない。『ひ弱で傲慢な』一般の市民を危険に晒した事には変わりはないのだから。俺達冒険者は常に一般住人の安全を考えながら行動する事が決まりとなっている。

それを破った者は罪人として、罰を受ける事になっているのだ。

真っ赤になっっているフランスキーを後にして、俺とジェットは二人掛かりで気を失っているカリューを担ぎ、外へ出ようとした。

「ま、待ちなさい、君達！ またその剣を持って外に出たら、どういう事になると思ってるんだ！」

俺はイチイチしつこい支部長を睨んだ。しかし、童顔な俺ではイマイチ迫力がなかったようで、フランスキーは何事も無かったかのように尚も喋り続けている。

「ジーニスさん、何とかならんのかね？」

フランスキーは、救いを求めるようにジーニスに尋ねた。

「ああ、すいません！ すっかり忘れていました。事情を聞いた時に、万が一呪いを解く事が出来なかった時のために、聖なる羽衣を持ってきたのでした。この布を剣を巻いておけば、剣の殺気は消せると思います」

そう言うジーニスは、魔剣ケルベラーに布を巻きつけた。今まで剣から出ていた殺気が多少、弱まったようだ。

「良かった。少し邪気が弱まりました。この程度なら外に出ても大丈夫だと思います。それでは、私はこの方達を宿屋に連れて行きますので、失礼します」

ジーニスは相手に話す暇も与えず、ただ一方的に喋り続け、唸然とするフランスキーの返事を待たずに、そのままドアの破れた支部長室を後にした。どうやら彼女もフランスキーの態度には腹を立て

たようだった。

もしドアが健在だったら、おもいつきり閉めていただろう。

俺達は、治安維持協会J・A村支部を出て、外で待機していた銀星の背中にカリューを乗せた。銀星は「また野郎かよ」という眼でカリューを見ている。

カリューを銀星に乗せると、ジーニスに連れられ、ジェーン・アンドンソン村の入口近くにあるという宿屋のリフレッシュ・ハウスを目指して歩き始めた。

宿屋に向かう途中に何人かの村人とすれ違ったが、突然泣き出したり、うずくまったりする事はなかった。どうやらジーニスが巻いた聖なる羽衣の効果のようだ。

すれ違う人々は銀星の背中で倒れているカリューの姿を心配そうに眺めていた。

暫くすると落ち着いたたたずまいの宿屋が見えてきた。

他の民家や武器屋などと同様に赤い色のレンガで作られている。

「皆さん、着きました。ここがこの村一番の宿屋、リフレッシュ・ハウスです」

「助かりました、ジーニスさん。私達はこの町でフランススキーさんの言う「本部の対応」とやらを待ちます。カリューの剣について相談するために、アステカ大陸を目指すのはその後になりそうですね」

秋留が嫌味を込めて言った。

「すみません。フランススキーさんも悪気があった訳ではなくて、この村の事を第一に考えた結果、ああいう態度に出してしまったのだと思います……」

「ジーニスさんが謝る事ではないですよ。悪いのは全部、あの中年デブのせいですから」

相変わらず、秋留は言葉がキツイ。それを聞いたジーニスは笑いながら言った。

「ふふ、そうですね。あの中年ハゲ親父のせいですね。それでは、

私はこれで失礼します。何かありましたら、この町のガイア教会にいますので呼んで下さい。それでは」

ジーニスは中年ハゲ親父発言を残して、そそくさと宿屋を離れていった。

早速俺達は宿屋の外に銀星を繋げて、チエツクインを済ませた。

秋留はいつも通り、俺達男三人とは別の部屋にチエツクインを済ませている。何かあった時のために隣の部屋を借りているが、俺は一緒にの部屋でも一向に構わない。むしろ同じ部屋がいい！

俺達が借りた部屋は、宿屋の二階にあった。

部屋に備えつけの家具はモノクロでまとめられていて気持ちを落ち着かせてくれる。

ふと、部屋にあった姿見を覗くと、モンスターの返り血やほころびの目立つボロボロの装備をしているのに気付いた。

昨日から今日にかけて、一日中森の中を駆け抜け抜けモンスターと戦闘をしていた俺達の装備は、モンスターの返り血で汚れきっていたのだ。

綺麗好きな俺の提案で『松屋クリーニング』を呼ぶ事にした。

松屋クリーニングは、冒険者専用の、装備品を新品同様にしてくれると評判の店だ。

クリーニングに出している間は、俺達の装備は予備で用意していた皮の鎧や布の服になってしまいが、町の中ならモンスターに襲われる事もそうそうないだろう。

いつもならカリユの持つ魔剣の影響があるので町の中でも油断出来ないが、今はジーニスが巻いてくれた聖なる羽衣があるので更に安心だ。

暫くすると、俺達の部屋に松屋クリーニングの受取係がやってきた。

俺達は汚れてしまった自分の防具と、未だに気を失っているカリユの装備を外して受取係に渡した。念のため剣やロッドなどの武器は装備しておく事にする。勿論、俺の愛銃ネカー&ネマーも装備

したままになっている。

ついでに汚れてしまった銀星の身体も洗ってもらえるように、宿屋の主人に頼んだ。ただし健康チェックはしなくてもいい、という条件をつけておいた。

俺達は身支度を整え、最近気を失う事が多くなってきたカリューをベッドに横たえようと、遅めの昼御飯を食べるため定食屋を探しに宿屋を離れた。

俺は森の中で見たワイルドウルフの後ろ足が忘れられず、ワイルドウルフの肉を扱っている店を探したが、無駄な努力に終わった。俺達が見つけたのは、町の広場から少し奥に入った場所にある、牛肉のステーキを食べさせてくれる牛肉天国という店だ。

この際、肉が食べられればどの店でも良い。すでに俺の腹は獣の雄叫びのような音を発していた。

店内は薄暗く、まだ午後五時を回ったばかりの時間だったため、客は少なかった。俺達三人は町の噴水が見える窓際の席に座った。

席について暫くすると、若いヒョロとした男性のウェ이터が注文を取りに俺達の席にやってきた。

ジェットはステーキ五百グラム・ライス付き、俺はこの店イチオシらしいステーキ丼を頼んだが、秋留は牛肉天国でチキン煮込み定食を頼んだ。

一通り注文を聞き終えたウェ이터は俺達の出で立ちを確認してから、話し掛けてきた。

「お客さん達、冒険者ですね？」

「ああ、そうだ。サーカス団にでも見えるか？」

俺は凄みを効かせて意地悪っぽく言ってみたが、またしても童顔では迫力がなかったようで、ウェ이터は俺の冗談は無視して話を続けた。ここの勘定を払う時は、ネカー&ネマーで硬貨をぶっ放して払ってやろうと心に誓った。

「お客さん方、結構屈強なパーティーに見えるんですが、もしかし

て惑わしの森を抜けてきたんですか？」

ウェイターは気になる事を言い、その言葉に秋留が反応した。

「惑わしの森？」

「そうです、惑わしの森です。この町の北にある森で、野生の凶暴なモンスターを手なずけて操っている、魔術師の魔族がいるらしいですよ」

それだ。俺達が必死で駆け抜けた森は惑わしの森という名前らしい。

マップを確認した時は、森を迂回するように街道が通っていたのだが、『遠回りは弱虫のする事だ』という熱血漢のカリユーの意味不明な意見で、森を突破する事になったのだった。

それにしても、あのモンスターの大群は魔族が操っていたのか。どうりで秩序もないモンスターが隊列を組んで襲ってくる訳だ。

暫くすると注文した料理が運ばれてきた。牛肉の美味そうな匂いが漂い、俺は思わず唾を飲み込んだ。

肉を一切れ、口に運ぶ。ステーキソースが見事に肉にからみ、旨みを引き出している。

俺は昨日からまともに食事を取っていなかった事もあり、ステーキ丼をただ無心に食べ続けた。空腹だったのは、他の二人も一緒らしく、特に会話もなかったひたすら料理を口に運んでいる。

俺の右の席に座っているジェットが、器用にナイフとフォークで肉を切り分けていた。そのナイフ捌きは、モンスターをレイピアで細切れにしているかのようだ。

ジェットのマナーの良さは育ちの良さを表しているが、寝たり食べたりする死人のジェットは俺の中で最大の不思議となっている。

全員で食後の酒を飲みながら、テーブルの上にマップを広げて今後の予定について話し合った。前までは酒に強かった俺も、最近ではめっきり弱くなってしまったため、運ばれてきたビールを少し飲むと、黙ってマップを見る事にした。

「とりあえず、今いるジェーン・アンダーソン村が……マップのコ



「だから……」

秋留はマップを広げ、ジェーン・アンダーソン村を指差していたが、本当にあっているのかどうか疑問だ。俺も秋留もどちらかという方向音痴な方だからだ。

「チエンバー大陸の港町ヤードまでは、順調に進めたとしても二週間ばかりそうだな」

ジェットがマップを見つつ答えた。どうやらマップを指差している場所があっていたようだ。

「後は、治安維持協会本部の対応を待つしかなさそうね。どれくらいで結果が出るのかな」

秋留は頬杖をついて外を眺めている。夕焼けに秋留の顔が染まりとても幻想的だ。

さすが幻想士、というところだろうか。

俺が暫く秋留の顔を見てみると、向こうも気付いたのか、少し照れた顔をして言ってきた。

「ブレイブ、何見てんのよ？」

「見てるだけだよ、悪い？」

俺は赤くなりそうな顔を必死で抑え、さりげなく、且つ、それなりの好意をアピールしてみせた。

隣ではジェットが俺と秋留のやりとりを聞いて、ニヤニヤしている。まるで「若いもんはいいなあ」と心の中で思っているようだ。

「ふうん」

秋留はそう言い、再び窓の外の景色を眺め始めたが、その秋留の顔が一気に青ざめていった。

俺も気になり窓の外を眺めようとした瞬間、店の扉を勢いよく開け、子供が泣き叫びながら転がり込んできた。

「ぱぱぱぱぱぱ、助けてよぱぱぱ、怖いよぱぱぱ！」

店を入ってきた子供が、この店の店主と思われる三十歳位の男性の腰にしがみついて叫んでいる。

「おい！ シェーン！ 男が簡単に泣くなと前にも言っただろう？」

どうやら、店に入ってきた男の子はこの店主の子供らしい。しかし一体、何があったのだろう。

まるで何かに怯えているようだ。まさか、モンスターが町に侵入して来たのだろうか。

店の中にいた他の客も心配そうに子供を見ている。

今まで薄暗くて気付かなかったが、店の丁度反対側には、あの・A支部長のフランススキーもいた。

治安維持協会の支部長を務めるフランススキーは子供の過剰な反応に、今にも席を立ち上がり子供の元へ近づきそうだ。

フランススキーは同じ店で夕食を食べていたようだが、店内の暗さもあり、向こうはこっちに気付いていない。

「おい、秋留。店の反対側にあのフランススキーがいたぞ。ちょっと悪戯してやろうか？」

俺は左手にネマーを構えながら言った。

しかし、秋留はフランススキーが店にいる事を知って、更に青ざめたようだ。

「ブ、ブレイブ、ジェット。店の窓から広場の方を見て……」

俺とジェットは同時に窓から噴水のある広場を見て絶句した。

夕日の明かりが町を照らして赤いレンガの家が綺麗に輝いていたが、広場の一角だけは異様な空気と共に闇が落ちている。カリューだ……。

カリューは魔剣ケルベラーを背中にかけた鞘に入れている。

カリューは鎧を着けている時は腰の鞘に剣を収めているが、今のように普段着の時は背中に鞘をぶら下げて剣を収めているのだ。

異様な殺気が少し離れたこの店でも感じるという事は、ジーニスの巻いた聖なる羽衣は取ってしまったらしい。

泣き叫ぶ子供。傍にいたフランススキー。確実にこちらに近づいてくる呪われた剣を持つカリュー。

どう考えても良い状況とは言えない。秋留が青ざめていたのも納得出来た。これ以上の問題を起せば、今後の冒険者活動に支障をき

たすかもしれない。

今やカリューはこちらの三人の姿を確認して、のん気に手まで振り始めている。

「三人同時に席を立て店を出たら、フランスキーに気付かれるかもしれない。俺が一人で店を抜けてあいつを止めてくる」

俺はそう言うと、フランスキーに気付かれないように牛肉天国を出て、一目散にカリューの元へ走って行った。こんな事ならカリューをベッドに縛りつけておけば良かった。

「おい、ブレイブ。一体何がどうなったんだ？教えてく……」

俺はカリューが最後まで話し終わる前に奴の口を抑え、宿屋のある方へ引きずっていった。

「カリュー！　なんで聖なる羽衣を取ったんだ！」

俺は、秋留と一緒に夕日を見ているのを邪魔された事もあって、カリューを怒鳴りつけた。

「もがもが……」

口を俺に抑えられているカリューは喋る事が出来なかったが、俺の必死の形相に気付いたのか、暴れる事もなく、ただ素直に宿屋まで引きずられていた。

その日の夜、カリューに対して詳しく状況を説明をするため、俺達男部屋に秋留を呼んだ。

男だけでむさ苦しかった部屋が一気に明るくなった。

カリューはジーニスに呪いの魔法を唱えられてからの記憶がないらしい。気付いたら剣に布がまかれていて、邪魔だったので外してしまった、と説明した。

カリューは自分に起きた出来事について、必死に整理しようとしていたが、顔には困惑の色が浮かんでいる。

「とりあえず、ここで私達だけで悩んでいても何も解決しないと思うよ。明日、ジーニスさんに会って少し話を聞いてみよう？　魔剣ケルベラーについて知ってみたいだし」

秋留はカリューを安心させるべく、優しい口調で言った。

その後、俺達は長旅の疲れもあり早めに寝る事にしたのだが、俺はしばらくして目が覚めてしまった。ベッドに入れば一分もしないうちに熟睡出来るのが俺の特技だが、今日はなぜか目が冴えている。隣のベッドには死臭を放つジェットが寝ていたが、反対側のベッドにカリューの姿はなかった。

俺は気分転換を含めて、外の空気を浴びるために宿屋を出た。

夜空には沢山の星が散らばっている。この景色を秋留と二人つきりで見たいものだ。

宿屋の軒先に吊るされている、少し早い風鈴の涼しげな音色に耳を澄ませると、宿屋の裏側から剣の素振りの音が聞こえてきた。

裏手に回ると、カリューが全身に汗を流して魔剣ケルベラーを振るっていた。

その顔からは鬼気迫るものが感じられる。

俺は暫く傍にあった岩に腰を下ろして、夜空を眺めていた。

「……ブレイブか。いつからそこにいたんだ？」

カリューが流れる汗をタオルで拭きながら、俺の隣までやってきた。男の匂いが鼻を突く。

「眠れなくて夜風に当たりに来たのさ。カリューこそどうしたんだ？　こんな夜中に必殺技の特訓か？」

「ふっ、必殺技なんてあるわけないだろ。敵を必ず殺す事が出来る技なんて、この世にあるわけがない」

カリューが思いつきり剣を振ると、腕に付いていた汗が飛び散り、月明かりの下で気持ち悪く輝いた。

「なあ、ブレイブ。俺の身体は一体、どうなっているんだ？」

やはりカリューはその事が気になって眠れなかったのだろう。カリューに呪いをかけてしまったのは、元はと言えば俺がサイバーの剣を一本持ち出してしまった事が原因だ。

その事をカリューに謝りたかったが、俺はその一步をいつまで経っても踏み出せないでいた。

そんな俺の心中を察したのか、カリューが今まで隠していた事を話し始めた。

「ブレイブ。俺がこの魔剣に呪われたのは、お前のせいではないんだ。ただ先に断っておくが、お前の責任がゼロ、という事ではないからな」

俺は何も言わず、夜空を見上げながらカリューの次の言葉を待った。

「お前がサイバーの鍛冶屋の前でこの剣を太陽にかざして眺めている時、俺の頭の中に声が聞こえてきたんだ」

「声？」

「そう、声だ。とても低く威圧感のある声だった」

「その声は何て言ってきたんだ？」

俺はカリューに質問したが、回答はすぐには返ってこなかった。

カリューは何かを恐れているようだ。

「俺を掴め」

カリューが突然言った。

「え？」

俺はカリューの言った事が理解出来ずに、思わず聞き返した。

「この剣から聞こえてきたんだ。俺を掴め、と……」

俺は何も言えなかった。剣から声が聞こえてくる事などあるのだろうか？

素振りのため聖なる羽衣が巻かれていない魔剣ケルベラーからは、異様な殺気が噴出している。

まるで剣が呼吸しているように定期的に殺気が放たれている。この剣は生きていても言うのだろうか……。

話し終えたカリューは無言でその場を去っていった。

俺は暫く岩に座り夜空を眺めながらカリューの言った事について考えていたが、強烈な眠気に襲われ始めたため宿屋に戻る事にした。部屋にカリューの姿はなかったが、俺はベッドに横になると数分もしない内に眠りについた。

翌日、空には薄っすらと雲がかかっていた。再び眠りについてしまいそんな涼しい風が、町並みを吹き抜けている。

カリューは朝方部屋に戻ってきたが、一睡も出来なかったようで眼は真っ赤になっていた。

「勇者の眼は金色のはずだけど、お前の眼は魔族と同じ赤だったのか？」

と、言いたい気持ちを必死で押さえた。

司祭ジーニスがいるというガイア教会は、町の南側にあった。赤い大きな屋根には鐘が釣り下がっており平和の象徴である鳩が羽を休めている。

ジーニスは教会の前の通りをホウキで掃除していた。どうやらこの教会に勤めているのはジーニス一人だけのようだ。

俺達の姿に気付いたジーニスは軽くお辞儀をして、教会の中に招き入れてくれた。

室内には教会お決まりの赤くて長い座席が左右に並び、正面には銀で作られたガイア神像が祭られている。ガイア神はこの大地を創造した神とされており、ガイア教ではその神を信仰していた。

「どうですか？ その後、魔剣のせいで町民を脅かしてなどはいませんか？」

早速痛い質問であり、カリューは下をうつむき黙ってしまった。

「問題ないですよ、ジーニスさん。聖なる羽衣は予想以上の効果のようです」

まるで本当の事を言っているように秋留はすんなりと返事をした。秋留は平気で嘘をつくが、人を傷つけるような嘘はついた事がない。「それは良かったです。それで、今日はどのようなご用件でしょうか？」

今まで沈黙を保っていたカリューが突然話始めた。

「魔剣ケルベラーについてジーニスさんが知っている事があるなら教えてくれ。何でもいいんだ。一体、この剣は何なんだ？ 俺の身体はどうなってしまったんだ？」

「カリュー殿、落ち着いてくだされ」

興奮しているカリューに向かってジェットが言った。

カリューの必死な剣幕にジーニスは一瞬たじろいだ、教会の奥にある晩餐用の部屋に俺達を案内してくれた。

「皆さん、座ってください。魔剣ケルベラーについて私が知っている事をお話ししよう」

俺達はそれぞれ椅子に腰を下ろし、ジーニスの言葉を待った。

「昨日、J・A村支部長室でお話した通り、その剣は私の曾祖母の命を奪った剣です。曾祖母が亡くなったのは、今から十五年程前になります。私がまだ三歳の時でした。その時の事は覚えていませんが、母からよく曾祖母の事について聞かされていました」

俺達はそのまま、ジーニスが出してくれた紅茶を飲みながら話を聞いた。

「ある日、ジェーン・アンダーソン村に一人の傷ついた剣士が倒れ込んできました。当時この村の長であった曾祖母のジェーンは、その剣士を村に泊め、傷が癒えるまで看病を行いました」

「剣士の名前はなんと云ったのですか？」

秋留は訊ねた。

「武亮と名乗っていたそうです。その武亮という剣士が村を訪れて一週間が経った日の事でした。傷もほとんど癒え、武亮が町の広場を散歩している時に突然それは起きたと言います」

ジーニスは一呼吸置いて、話し続けた。

「武亮が広場にいた住人を惨殺し始めたのです。曾祖母のジェーンは知らせを受けるとすぐに広場へ行き、武亮の前に立ちはだかりました。そして問いただしたのです。なぜ、このような酷い事を、と……」

全員、静かにジーニスの話を聞いていた。この町にそれ程酷い過

去があるとは知らなかった。

フランスキーのあの態度は、カリューが暴走した事により、十五年前に受けた心の傷が蘇ったためかもしれない。

俺は気になって訊ねることにした。

「ジーニスさん。J・A支部長のフランスキーは町が襲われたとき、既にこの町で支部長をしていたのですか？」

「武亮が暴れた時に真っ先に止めようとしたのが、前支部長であるミラノさんでした。ミラノさんは若い頃は剣士として活躍しており、お歳の割には中々の腕前だったと母は言っていました。しかし、そのミラノさんも武亮によって殺されました……。後任としてJ・A支部に配属になったのが今のフランスキーさんです」

つまりフランスキーのあの性格は地だったということか。紛らわしいキャラクターだ。

「すみません、話を続けて下さい」

俺は大して関係ない質問で話の腰を折ってしまった事を反省しつつ、ジーニスに話の続きを促した。

「はい……。えっと、そうそう」

ジーニスはどこまで話したか忘れてしまったようだ。悪い事をしてしまった。

「曾祖母のジェーンは武亮に聞いたいただきました。武亮は、右手に持っていた禍々しい剣をかざして、こう答えたそうです。『こいつが、魔剣ケルベラーが血を欲しがっている』と」

俺は昨日の夜、カリューが言っていた内容を思い出した。

（この剣から聞こえてきたんだ。俺を掴め、と……）

「じゃあ、武亮が暗黒剣士ケルベロスの正体だったのか？」

カリューは真剣に聞いていた。いつもは熱血論一筋で猪突猛進型のカリューだったが今は違っていた。

「武亮が暗黒剣士ケルベロスの正体だったかどうかは分かりません。ただ、ケルベロスは魔族の剣士と聞いていたのですが、どうやら武亮はただの人間だったようです」



「武亮はその後どうなったのですか？」

うつむいたまま黙ってしまったカリューに代わって、秋留が続きを聞いた。

「武亮はジェーンに襲い掛かりました。司祭であるジェーンに接近戦は向かなかったため、ジェーンは武亮と距離を置きました。そして、神聖魔法を唱えたんです」

「何と言う魔法ですか？」

魔法マニアの秋留は興味津々だ。

「上級神聖魔法のセイント・インディグネーション（聖なる怒り）です。高司祭にしか使えないという神聖魔法ですね」

「心の清い人間には全くダメージはないが、邪悪な心を持ったモンスターや魔族には絶大の威力を発揮するという魔法でしたな？」

今まで黙って聞いていたジェットが突然、口を開き説明した。ジェットは時々、その年の功のためかマイナーな魔法を知っている事がある。

「まあ、随分詳しいですね。あまりの高等な神聖魔法のため、知っている人はごくわずかだと聞いていますが」

「ワシは職業が聖騎士だから神聖魔法について、ある程度の知識は身につけているんじゃない」

ジェットは生前に聖騎士だったので今も聖騎士という事になっているが、その身体は死人、つまりゾンビだ。

今も聖騎士特有の神聖魔法を使う事は出来るのだが、聖なる魔法を唱えようとすると身体に激痛が走るようになってしまった。そのため、ジェットは余程の事が無い限りは、神聖魔法は唱えようとはしない。

「確か、ジェットさんと言いましたよね。聖騎士……ジェット……」  
ジーニスは暫く考え込んでいた。必死で何かを思い出しているようだ。

「あ、ああああ！ 貴方は！」

ジーニスはジェットを指差し叫びだしたかと思うと、部屋の奥に

走り出して行ってしまった。

戻ってきた時には、一冊の本を右手に持っていた。その本を開き、あるページとジェットの顔を交互に見比べているようだ。

暫くするとジーニスは唐突に気絶した。ジーニスが床に倒れる寸前に、傍にいたジェットが抱きかかえた。

倒れたジーニスの右手には冒険者百科事典のジェットのページが開かれている。

そのページには、ジェットの顔写真と共に文章が書かれていた。

『コースト暦二九九九年の第三次封魔大戦で、魔族連合軍の軍団長マクベスを討ち取ったチェンバー大陸の英雄・聖騎士ジェットは三〇〇一年、故郷の町エアリードで愛馬である銀星と共にその生涯を終えた』

俺達は倒れたジーニスを奥の部屋のベッドまで運んだ。

暫くしてジーニスは目を覚ましたが、ジェットの顔を見るなり再び気絶しそうになった。

いい加減、話を進めて欲しかった。

さつきから話の続きを聞きたくて俺の隣でウロウロと歩き回っているカリューが目障りだ。

「チェンバー大陸の英雄ジェット様が、なぜ死人としてパーティーに加わっているのですか？」

ジェットは目を瞑り、何かを思い出しているように話し始めた。

「我が故郷のエアリード。そこに巢食っていたモンスターに縛られていたワシと相棒の銀星の魂を解き放ってくれたのが、この御三方じゃった」

ジェットは落ち着いて言った。

それだけの理由では納得出来ならしくジーニスは口を開きかけたが、それを制し、ジェットが再び話始めた。

「助けて貰った恩を返すまでは、ワシはこの御三方に忠義を尽くすと決めたのじゃ」

死人を助ける、とは理解不能な原理だったが、ジーニスはジェッ

トの意思を理解して、秋留の方へ向いた。

「それでは、秋留さんがジェット様を死人として復活させたのですか？」

「その時、私たちパーティーは三人と少なかったし、強力な仲間が欲しかったから」

パーティーを組む場合は四、五人が普通なのだが、俺達パーティーは組んだ時から三人だった。ただ、全員レベルが高いせいか、三人でも苦勞する事はほとんどなかったが。

秋留は話し続けた。

「ジェットから申し出があったのは、丁度仲間を探している際中だったの。チェンバー大陸の英雄が仲間になってくれれば、これ以上心強い仲間はいない。私は迷う事なくネクロマンサーの力を使ってジェットを死人として復活させたわ」

秋留はそう言っているが、計算高い秋留の事だ。きっと、ジェットを仲間に入れると心に決めた上で、ジェットの魂をモンスターから解き放ったのだろう。

伝説の英雄を死人として復活させ、パーティーに入れようと思える人はあまりいないのではないだろうか。そう考えると、秋留はただ者ではないと思ってしまう。

「秋留さんは、ネクロマンサーなんですか？」

「ふふ。今の職業は幻想士だけど、前はネクロマンサーだったの。だから、ネクロマンサーの力も使えるのよ」

秋留の話を聞いて、ジーニスは驚いたようだ。

「そうなんですか？ 大概、魔法系の職業は人それぞれの特性が決まっっていて、他の職業にはなりにくいと聞いていたんですが……」

その話は初耳だ。秋留は飽きっぽい性格だから、コロコロと職業を替えているのかと思っていたが、それは簡単な事ではないらしい。やはり秋留はただ者ではない。

「今は幻想士だけど、ネクロマンサーの他にも魔法使いとか召喚士とかになった事があるよ。全部、初期の段階で転職しちゃったけど

ね」

秋留は自分の飽きっぽい性格を暴露しているとは気付いていないようで、自慢気にジーニスに話している。

「へへ、すごいんですね……」

ジーニスは、秋留の性格に気付いたようだが、それを悟られないように話を続けた。

「パーティーにジェット様のような信頼出来る仲間がいるというのは、大変心強い事だと思います」

会話が一段落したのを確認して、カリューが今まで溜まっていた物を吐き出すかのように、ジーニスに対して質問した。

「ジーニスさん、話の続きを頼む。神聖魔法を喰らった武亮と名乗る剣士はどうなったんだ？」

突然カリューから質問され、今まで自分が話の続きをしていなかった事にジーニスは気付いたようだ。

ようやく、視界の端で映るソワソワカリューを見なくて済みそうだった。

「あ、ごめんなさい！ すっかり忘れていました！ えっと……」

ジーニスは先程と同様にどこまで話したか忘れてしまったようだ。今度はさつきより沈黙が長い。司祭というのは全員、こんな天然なパワーを持っているのだろうか？

秋留が言っていた自分が就いたことのある職業の中に、司祭がなかったのは、その性格の違いからではないだろうか。

痺れを切らしたカリューがもう一度、一字一句違わずに質問した。「神聖魔法を喰らった武亮と名乗る剣士はどうなったんだ？」

ジーニスはやっと思ひ出したようだ。紅茶を一口含んだ後、話し始めた。

「ジェーンの唱えたセント・インディグネーションは、暴走している武亮の身体を光の柱で包みました。その光の柱は空に浮かぶ雲まで届いていたと言います。光が消えると、武亮が立ち尽くしていました。不思議な事にその右手には、魔剣ケルベラーは握られています」

なかったそうです」

「武亮は元に戻ったのか？」

カリューは聞いた。

「武亮はそのまま気を失い、その日は宿屋に寝かしていたのですが、翌日になると姿を消してしまったそうです。ある村人が惑わしの森の方へ武亮が消えていくのを見たそうですが、さだかではありませんせん……」

ジーニスの説明を聞く限り、セイント・インディグネーションという魔法を唱えればカリューの呪いも解けそうだが、その後、カリューがどうなってしまうのかは分からない。

神聖魔法により消えてしまった剣が、どうして鍛冶屋サイバーの小屋にあったのかも疑問だ。

「ジーニスさん、色々教えてもらってありがとうございました。ちなみにジーニスさんはセイント・インディグネーションを唱える事は出来ますか？」

秋留の意図は読めた。ジーニスがセイント・インディグネーションを唱える事が出来るなら、カリューに唱えてもらおうという事だろう。

「ごめんなさい。子供の頃から練習はしているのですが、まだレベルが低くて成功した事はないんです……」

カリューは隣で落胆していた。しかし、セイント・インディグネーションをカリューに唱えれば呪いを解く事が出来るかもしれない。そういう情報を得る事が出来ただけでもジーニスの話を聞いた甲斐はあった。

それから宿屋で十分休養を取りながら何をする訳でもなく、J・A村に滞在して三日が過ぎようとしていた。

三日目も終わりに近づいた時、俺達の寝泊りしている宿屋に治安維持協会員が訪ねて来て、今すぐJ・A支部長のフランスキーに会

いに来て欲しいと告げた。

支部長室の木の扉は新しいものに取り替えられていたが、俺が銃で開けた壁の穴やカリューが砕いた床板はそのままとなっている。

「治安維持協会本部から指令があった。まさか、あんたらがレッド・ツイスターだったとはな……」

フランスキーが疑わしい眼で俺達を睨みつけてきた。

「今までの功績に免じて、今回の事は不問にすると指令にはあった。しかし次に同じような事があった場合は……分かってるな？」

「本当にご迷惑をお掛けしました」

部屋の隅のカリューに変わって秋留が答えた。

俺達は数ある冒険者パーティーの中では有名な方だった。ただ単にレベルが高いだけではなく、それなりの戦果も上げているからだ。レッド・ツイスターとは、ジェットが俺達のパーティーに加わる前につけられたパーティーの異名だ。

今から二年程前に、ゴールドウィッシュ大陸のアラム国に攻め込んできたモンスターの大群を、カリュー、秋留、俺の三人で追いつめた時の戦闘があまりにも凄まじかったため、そう呼ばれるようになった。

まるで紅い旋風のようなと、アラム国の国王が言った事が始まりだ。

俺達を罰せられなかった事が相当悔しかったのか、鬼のような形相で俺達を睨みつけているフランスキーを後にして、俺達は治安維持協会J・A支部の玄関を出て町の噴水の傍にある軽食処の喫茶・アルマジロにやってきた。

この村の飲食店は全て、村の中心にある噴水の周辺に密集しているようだ。

喫茶・アルマジロの店内には一日を読書して過ごす若者と、孫を連れてチョコレートパフェを食べに来た老人がいるだけだ。

俺達は店の奥の方の個室に案内してもらい、今後の作戦を練るところにした。

「ジーニスの話を聞いただろ？ 当初の予定通り、アステカ大陸のガイア教会本部を目指そう。そこに行けば、ナントカっていう神聖魔法を唱える事が出来る司祭がいるはずだ」

カリューは交渉の余地は無い、といった感じで言い放った。

「待って、カリュー。ジーニスさんの話には不明な点があるよ。なぜ武亮は町から消えてしまったの？ 呪いが解けたなら、逃げる必要なんてなかったはずだよ？」

「人を殺してしまったという罪の意識に耐えられなくなって、逃げだしたに決まっている！」

「それだけじゃないよ。セイント・インディグネーションを唱えられて、なぜ剣はなくなったの？ そして、どうして鍛冶屋のサイバーが持っていたの？ 結局、その剣がどんな効果があるのかなんて何も分ってないんだよ？」

話し合いで秋留に勝てるはずもなく、カリューは暫く黙ってしまったが、再び口を開いた。

「じゃあ、どうすればいいんだよ？」

最早、落ち着きを無くしたカリューをなだめながら、秋留が言った。

「一番、確実な方法は、武亮を探し出して話を聞くことね」

俺は嫌な予感がして、秋留に聞いた。

「まさか、惑わしの森に武亮を探しに行く……とか言わないよな？」

「惑わしの森に入ったのなら、例の魔族が武亮の行方を知っているはず。だから、直接魔族に話を聞きに行きましょう。この前の借りもあるしね……」

秋留はいつまでも根に持つタイプだが、俺は金にならない事と無駄な事はしない性格だ。

魔族の魔術師に話を聞くだけでは一銭の金にもならないし、万が一、その魔族が武亮の居所を知らないと言った場合は、遠路はるばる森の中までモンスターを倒しつつ進んだ事が無駄になってしまう。  
「なあ、秋留？ 魔族が武亮の事なんて知らない、と言ったらどう

するんだよ?」

俺は秋留を納得させようと、慎重に言葉を選んでから質問した。

「何事もなく森を通過したという事になると思うから、今までのルートを戻って途中の町で情報収集をするしかないかな」

俺は黙っていた。それが俺の答えだ。

「無駄になるかもしれないと思いますが、神聖魔法のセイント・インディグネーションを唱えた後、カリュー殿がどうなってしまうのか分らない以上、安全策を取るしかないですな」  
見かねてジェットが口を挟んだが、俺はモンスターだらけの惑わしの森に再び入る気にはなれなかった。

「二千万カリム」

秋留が言った突然の高額な台詞に、俺は思いっきり反応してしまった。

「二千万カリムがどうかしたのか?」

俺は平静を装って秋留に聞いた。

「惑わしの森の魔族を倒した時の報奨金だよ」

秋留はいつもこうだ。話し合いの時には必ず切り札を用意してくる。

きつと、治安維持協会本部からの指示を待っている間に、魔族討伐組合に問い合わせたに違いない。

一日中寝ていたかと思っていたが、いつの間にそんな情報を手に入れていたんだろう。

「ブレイブ! てめえ、また命よりも金を選びやがったなあ? しかも俺の命と金を比べやがってえ!」

カリューがいつもの様に隣で怒鳴っているが、俺は無視した。

「話し合いは決定じゃな。一人頭五百万カリム。久しぶりに良い仕事が出来そうですぞ」

ジェットが話し合いを締めくくった。

テーブルの向こうでは、秋留が満面の笑みを浮かべて勝利の余韻に浸っているようだった。



俺は顔に不満の色を浮かべるようにしていたが、頭の中は久しぶりの高額な仕事に心をときめかせていた。

俺達は翌日、旅立ちの準備のため、別行動を取っていた。

俺達パーティーが冒険に出発する時は、それぞれメンバーの分担当が決まっている。

カリューは、薬草や予備の剣などの戦闘に関係するアイテムの購入。

秋留とジェットは、食料品の買出し。

そして、俺は最寄の魔族討伐組合に行き、冒険のための手続きを取る事になっている。

ジェーン・アンダーソン村にも魔族討伐組合はあった。小さな町や村には無い場合もあり、その時は隣の町まで登録しに行かないといけない。

魔族討伐組合J・A村出張所は、他の建物と同じ赤いレンガで出来ていたが、周りに冒険者らしき男や不思議な格好をした魔法使いらしき女性がいるため、どこか別の町に来てしまったような気がしてしまう。

「あ、あの、レッド・ツイスターの盗賊ブレイブさんですよね？」  
突然、十代と思われる若い女性が走ってきて聞いてきた。

町や村にある魔族討伐組合の入り口付近には、こうした冒険者マニアが待ち構えている事が多々ある。

「そうだよ。君は？」

「あ、あの、リリーと言います。握手して下さい！」

俺は笑顔で握手に応じ、女性が持っていた『冒険者クラブ八月号』の俺のページにサインをした。

この冒険者クラブという雑誌のページには、親切にも、冒険者がサインする場所が設けてある。

その出版会社の心遣いが、全てのサインを手に入れたというマ

ニア心を余計にくすぐっているに違いない。

サインは面倒臭いが、こういう雑誌の取材が時々入ったりして、俺は小銭を稼ぐ事が出来た。

若い女性が走り去った後も、俺と女性のやりとりを聞いていた他の冒険者が俺の方をチラチラと盗み見ていた。

注目されるのは悪い気分ではないが、俺は誰よりも秋留に注目されたい。

俺は周りの冒険者の眼をシカトして魔族討伐組合の扉を開けた。

中は冒険の登録をしようとしている冒険者達で賑わっていた。この場所では、見知らぬ者同士で初めてのパーティーを組もうとする人もいる。

ただ、俺達パーティーはそんな簡単に説明出来るような出会いではなかったが……。

俺はカウンターの向こう側に座っている、眼鏡をかけた三十歳後半の男に声をかけた。

「冒険の登録をしたいんだけど」

カウンターの向こうの男は何か書き物をしていたが、その手を休め顔を上げた。

胸につけている名札には、ホップと書いてある。

「あ！ 貴方はブレイブさんですね？ どうです？ 最近も竜巻っぷりを発揮するような冒険をしていますか？」

ホップは一目でレッド・ツイスターのブレイブだと分かったようだ。即座に俺に合った話題を出してきた。

最近だと突風並の速さで森を駆け抜けた事があったが、それは言わないでおく事にした。

それよりもこの組合員のでかい声によって、建物にいた他の冒険者にも俺がブレイブだとバレてしまったようだ。

魔族討伐組合員のホップは話を続けた。

「冒険の登録ですか？ この辺だと、この村から南にある黄昏の洞窟に居座っているモンスターの掃討、などの依頼がありますが。黄

昏の洞窟は美味い茸が採れるので、村人は困っているんですよ。ただ、モンスターの質と量が高くて他の冒険者では荷が少し重いみたいです」

量が多いのは好きではないが、金が第一の俺は重要な事を聞いた。

「報奨金は？」

「三百万カリムです。」

惑わしの森の魔族討伐に比べると大分下がるが、小遣い稼ぎにはなりそうだ。

俺は黄昏の洞窟に関する情報を一通り聞いて、本題に入る事にした。

「今日来たのは、惑わしの森の冒険に出発するからなんだ」

「惑わしの森ですか？ この村の北にある森ですよ？」

組合員も驚いているようだが、この建物にいる他の冒険者にまで聞こえたらしく、辺りでザワザワと話声が聞こえ始めた。

「さすがだ……」や「調子に乗るなよ……」などの様々な声が聞こえてくる。

「ああ、そうだ」

俺は組合員に対して怒りの気持ちを込めて言っただつたが、全く伝わらなかったようだ。

「さすが、レッド・ツイスターと呼ばれるだけありますね。あのモンスターの巣窟に殴り込む訳ですね」

出来ればモンスターの相手をせずに、魔族のみを倒したいものだが。

「惑わしの森に関する情報を教えてくれ」

ホップは資料の束をめくりながら、細かく説明してくれた。

まず、既に知っていた事だが、惑わしの森にはモンスターがウヨウヨ徘徊しており、そのモンスターの全ては魔術師に操られているという。

魔術師の名前はデール。噂通り魔族だ。

惑わしの森の中にある屋敷に住んでいて、その屋敷自体はレベル

の高いモンスターに守らせている。

俺はデールの顔写真を受け取った。

髪は緑色で腰位までの長さ、眼は白目の部分が赤で黒めの部分は人間と同じ黒だ。

年は俺と同じ位に見えるが、俺よりも何倍もの時を生きているに違いない。

「それでは、インスペクターを渡します。ミッションの成功を祈ります」

ホップは魔族討伐組合お決まりの台詞を言うと、更にお決まりのインスペクターを渡してきた。

ちなみに俺が受け取ったデールの顔写真は、以前デールに挑んだ冒険者が持っていたインスペクターを通して、映像を写真に収めたものだろう。インスペクターにはそういう機能もある。

その冒険者がどうなってしまったかは、あまり考えないようにしているが、俺は後任のための映像を残してやるつもりはない。

俺は自分の担当の仕事を終え、リフレッシュ・ハウスに戻ってきた。他のメンバーはまだ買い物をしているようだ。

暫くすると、秋留と、荷物を抱えた召使いの爺やのようなジェットが部屋に入ってきた。

「あれ？ カリューはまだ帰ってきてないんだね」

「あいつはいつも要領が悪いからな」

俺がカリューの悪口を言っていると、目の前を風が吹き抜け、俺の真横にある部屋の柱に短剣が突き刺さった。

「誰が要領が悪いって？」

部屋の入り口にはカリューが立っていた。

「お前の新しい短剣だ。黒の短剣探すの大変だったんだぞ！」

カリューは買ってきた荷物を床に置き、ベッドに腰を下ろしながら言った。

俺は柱に刺さった短剣を抜いて鞘に収め、腰の後ろのベルトに装備した。

黒い剣、という事でカリューとお揃いな感じがして余り嬉しくないが、短剣の代金はカリュー持ちだったため、深く考えないようにした。

パーティーのメンバーはとことん金に執着心がないらしく、他のメンバーの分の買出し分も自分で払っている。

俺が魔族討伐組合の登録の役を選んでるのは、金を使わなくていいからだったが、ジェットと食料の買出しに行っている秋留も、ジェットに金を払わせているようだ。

「さて、準備も整ったし、今日は飯食って早めに寝て、明日朝早くに出発するぞ」

カリューに促され、俺達は宿屋の食堂で夕食を取った後、風呂に入ってから早めにベッドに潜り込んだ……。

## 第四章 解放

ジリリリリリリッ！

翌日、五時丁度に目覚まし時計の激しい音に起こされた。

暫くは心臓が高鳴っていたので、落ち着くのを待ってベッドの毛布から出た。

部屋を見渡すと、昨日のうちに返って来ていた銀色の装備一式を、ジェットが鏡の前で身につけているところだった。

「ブレイブ殿にカリュー殿、起きましたか。今日も晴れそうですぞ」  
死人のジェットに寝起きの悪さなどないようだ。朝からナイスミドルパワー全開だった。

今はジェット一人だけ支度も終わり、お気に入りの口ヒゲを整えている際中だ。

隣のベッドでは、カリューが起きてベッドに腰を掛けている。

カリューも寝起きの良い方ではない。

「久しぶりの高配当な冒険だからな。気合を入れて行こうな」

俺はカリューに言ったが、カリューは朝から不機嫌そうな顔で答えた。

「おい、ブレイブ。今回の冒険の目的は、武亮の足取りを掴む事だぞ？ あくまで魔族退治はついてだ。分ってるな？」

「あ、ああ……」

俺はカリューの機嫌をこれ以上悪化させないように答えたが、胸の中では全く同意などしていなかった。

俺の目的はあくまで魔族退治で、二千万カリムは必ず頂く。武亮の行方は二の次だ。

俺はクリーニングから返って来たばかりの綺麗なスーツに袖を通した。

この黒いスーツは特注品で、鋼の糸が編み込まれた布で作られているため、防御力が高くとても軽い。

ベルトには俺の愛銃のネカー＆ネマーをホルスターでしっかりと固定し、シーフ専用の足の裏に動物の毛皮を張った黒い靴を履いた。ベルトの腰の部分には、昨日カリューが買って来た短剣を装備し、最後に色々仕込んでいる黒の手袋をはめて、俺の装備は完了だ。

カリューも光り輝く青い装備に身を包んでいた。身体にはガイア教会で清められたブルーアーマーを装備し、左手には貴重なオリハルコンで作られた盾を装備している。また、背中には世界に一つしかない風のマントを羽織っている。

風のマントはカリューの家に代々伝わるマントで、どこでどのようにに作られたかは不明だが、高い所から飛んだ時は、暫くの間、空を飛ぶ事が出来るらしい。カリューは怖くて今まで一度もその能力を使ったことがないという事だったが。

俺はいつもカリューの貴重で高価な装備品一式を売りに出したくてウズウズしていた。いったい、総額いくらになるのだろう。

「さて、出発しよう。秋留は起きて準備終わってるのか？ 女の準備は遅いからなあ」

部屋を出て行くカリューの腰には、聖なる羽衣に包まれた魔剣ケルベラーが装備されていた。

今回の冒険で、剣の呪いから解放されるのだろうか。

宿屋の前で六時に待ち合わせをしていたが、十分程過ぎた頃に秋留が眼を擦りながら宿屋から出てきた。

秋留は、黒いチェストアーマーに赤いミニスカート、背中にはブラドーを装備している。

「秋留、おはよう」

俺は秋留に軽く右手を挙げながら挨拶をしたが、秋留は黙ったまま何も言わなかった。

やはり、朝早いのは辛いようだ。

俺達は荷物を銀星の背中に縛りつけ、初めてこのジェーン・アンダーソン村に入ってきた時と同じように、『ジェーン・アンダーソン村へようこそ』というアーチの下をくぐって、惑わしの森に向か

おうとした。

「待って下さい！」

後から声をかけてきたのは、ジーニスだった。

「惑わしの森に行かれるそうですね。私も連れて行ってください」

ジーニスは真つ白のローブを身にまとい、右手には太陽をイメージさせる飾りのついた杖を握り、背中にはリュックサックを背負っていた。

「これから行く所は、モンスターが戦陣を組んで襲ってくる惑わしの森だぞ？ 危なくて連れて行くななんて出来る訳ないだろ」

カリューは言った。

「私も知りたいんです！ 私の曾祖母の命を奪った魔剣ケルベラーと暗黒騎士ケルベロスの関係を！ どうか連れて行って下さい！ 足手まといにはなりません！」

ジーニスは顔を紅潮させて訴えていた。

それ程曾祖母への想いが強かったようだ。一体、ジェーン・アンダーソンとはどのような人物だったのだろうか。

「ねえ、カリュー？ パーティーに司祭がいるのは良い事だよ？

ジーニスを連れて行かない？」

秋留はジーニスをパーティに加えるのは賛成のようだ。

カリューは考えているようだったが、暫くして口を開いた。

「じゃあ、パーティ全員の意見を聞こう。まず、ジェットはどうだ？ 賛成か？ 反対か？」

「構わないですぞ。か弱い婦女子を守るのも騎士の役目ですから、ジーニスさんは安心してついてきて下され」

ジェットの意見を聞いて、ジーニスの顔が明るくなった。

か弱い婦女子……。俺は思わず秋留の方を見て、秋留と眼が合ってしまった。

「ブレイブ、何見てるのよ？ どうせ私はか弱くないですよーだ！」  
秋留はそう言って、口を膨らませていた。俺は秋留のそういう顔をした時が大好きだ。



「じゃあ、ブレイブはどうだ？」

秋留の膨れっ面に見とれていたが、俺が唯一気にしている事は一つだけだ。

「デールを倒した時の報奨金の分け前は無しだぜ？」

俺以外の全員の眼が白くなっているのを感じたが、俺にとっては頭数が一人増えるのは重要な問題なのだ。

二千万カリム÷五〇〇四百万カリム。つまり一人増えただけで分け前が百万カリムも減ってしまう。

「は、はい、勿論、お金なんていりません！ 真実さえ分ればそれで満足です！」

暫く呆気に取りられていたジーニスだったが、良い返事をしてくれた。

俺の意見を聞いて、呆れて話す気にもなれないカリューの代わりにジェットが言った。

「それでは、惑わしの森に向けて出発しましょう。ジーニス殿は荷物を銀星にくくりつけて下され」

ジーニスが荷物をくくりつけている間、銀星は嬉しそうだった。

正直、ジェットの性格に銀星は合っていないのではないだろうかと思ってしまう。

ジーニスの荷物を銀星にくくりつけ終わると、俺達はジェーン・アンダーソン村のアーチをくぐり、惑わしの森に向けて出発した。外はまだ完全に日が出る前なので、幾分か涼しかった。

体力の少ない秋留とジーニスは銀星に乗り、俺とカリューとジェットは歩いていった。

銀星の野郎は女性二人を乗せて上機嫌で、足も速くなっている。

「おい！ 銀星！ もう少しペース落とせよ！」

俺は銀星に向かって言ったが、奴は有頂天になっていて全然聞こえていないようだった。正に馬の耳に念仏だ。

太陽が真上に来る前には、惑わしの森が遠くに見え始めていた。

照りつけられた草原から熱気が立ち上り惑わしの森の外観を覆っていたが、森自体の威圧感は離れていても感じる事が出来る。

「で、これからどうするんだ？ 前みたいに全速力で森を駆け抜けるのだけは勘弁だぞ？」

俺は銀星に乗って、爪を弄っている秋留に聞いた。隣ではカリユーも同意、という風にうなずいている。お互い全力疾走は、もうコリゴリだった。

「私がホーク・アイを唱えてデールのいる館の場所を探し出して、後はそこに向かってひたすらダッシュよ」

ホーク・アイは召喚魔法で、唱えるとその者の眼に上空からの映像が見えるようになるらしい。

しかし秋留の作戦だと、結局はまた走るという事になる。俺はそれだけでやる気が無くなってしまう。

「館までの最短ルートを探して、なるべく森の中を走る距離を短くするから」

俺とカリユーの不満気な顔を見て秋留がつけ加えたが、結局は走る事には変わらないようだ。

「後は、幻想術で私達の姿が見えないようにする。どれくらい相手を騙せるか分らないけど、やってみる価値はあるよ」

「な、なあ、走らないと駄目なのか？」

俺は懇願するように秋留に聞いた。

「うーん、デールに存在がバレる前に館に着きたいんだけど……」

全員が何か良い方法はないかと考えていた沈黙の時間を破ったのは、ジェットだった。

「ワシが囹になりますぞ。幻想術も何もかかっていない状態で森に入って暴れますから、その間に皆様方は館に近づくという事でどうですか？」

確かにその方法だと先程の作戦よりは、何倍も確実な気はする。

「そ、そんな！ ジェット様が囹なんて！」

今まで黙って聞いていたジーニスは、ジェットの意見には賛成出

来ないようだった。

もしかすると、ジーニスも「冒険者オタク」なのかもしれない。しかも、ジェットのような老兵がタイプなのか？

「ジーニス殿、安心して下され。ワシは死人だから、何があっても死ぬ事はないんじゃない？」

「で、でも……」

ジーニスは悩んでいるようだったが、結局納得したらしく、銀星の背中から降りた。

秋留もジーニスの意図を察し、銀星の背中から地面に華麗に着地した。

「じゃあ、ジェット、銀星に乗って存分に暴れてね。私達が館にいたら合図を送るから、受け取ったらジェットも館に来るようにして？」

秋留の説明を聞いて、ジェットは銀星に飛び乗った。

「それでは皆様方、無事を祈ってますぞ。何かあった時も合図を送って下されば、即行で駆けつけます。間に合わない場合は、ワシの仲間入りですな。ふおっふおっふお」

笑えない冗談を言ってから、ジェットと銀星は惑わしの森に向かって消えていった。

「さうって、いつまでもジェットに囿になってもらう訳にもいかなしいし、急がないと囿だとバレル可能性があるからこっちも早速始めるよ」

ロッドを構えつつ秋留は言った。

「天空の覇者ホルスよ、その眼力で万物を捉えよ……」

秋留は眼を瞑って詠唱している。

「ホーク・アイ！」

呪文と同時に秋留は空に顔を向け眼を開いた。その眼は鷹の眼のように鋭くなっているような感じを受ける。

暫く秋留は眼を開けながら空中を眺めていたが、突然、俺達の方へ向き直った。

その時には、いつもの可愛らしい秋留の眼に戻っていた。

「ここから少し東に進んでから森に入ろう。そのルートが館までの距離が一番近い。多分一時間程歩けば、館に到着するはずだよ」

秋留の言った朗報に俺は胸を撫で下ろした。一時間くらいなら、万が一全力疾走する事になっても楽勝で走りきる事が出来るだろう。早速俺達は東へ二十分程歩き、森の入り口までやってきた。

「じゃあ、次の段階だね。全員に幻想術をかけるよ」

そう言うのと、秋留は大きく円を描くように腕全体を動かしながら、呪文を詠唱し始めた。

魔法と違い、幻想術は大きな声を発して呪文の詠唱をする訳ではないため、盗賊の俺の耳にも秋留が何を言っているのか聞き取る事は出来なかった。

「静寂の塵気楼！」

その言葉と共に俺達の周りにうつすらともやがかかったように見えた。

「これで相手は私達の姿が見え難くなったはずだよ」

秋留が言ったその言葉を待っていたかのように、カリューが言った。

「よし！ 惑わしの森、再突入だ」

太陽の位置からすると、昼を少し過ぎたところだろうか。

森の中は以前と同様に静まり返っていたが、獣の気配は感じる事が出来る。

「いる、いる……。そこら中を獣が徘徊しているぞ。俺が安全なルートを探して先頭を歩くから、皆は俺の後をついてきてくれ」

俺は全員に注意を促した後、ネカー&ネマーをホルスターから取り出して構え、先頭に立って辺りを見渡した。

「どうやら今のところはデールに気付かれていないようだね。ブレイブの五感が生きているって事は、悪意の霧は使われていないみたいだし」

俺の後ろにピッタリくっついていいる秋留が言った。今の俺達の陣

形は先頭が俺で、その後ろが秋留、ジーニス、パーティの後ろをカリューが守っている。

暫く進んでいると、遠くの方で獣の叫び声が聞こえ始めた。

もともと、盗賊である俺の耳には聞こえているが、他のメンバーには何も聞こえていないはずだ。

「どうやら、ジェットが戦闘を始めたみたいだ。辺りのモンスターが西に集まって行っている」

「ジェットはうまく囷をやっているようだね。今のうちにドンドン進んじやおう」

もしかしたら、秋留はジェットが囷を志願する事を分っていたのではないだろうか？

そう思うのは、初めに話した作戦が秋留らしくなかったからだ。問題点が多すぎた。

しかしジェットが囷を志願した事により、この作戦は大成功間違い無しと思えるようになった。

暫くの間は、辺りを見渡しながら森の中を問題なく進んで行った。所々にトラップが仕掛けられていたが、俺の腕にかければ発見する事は造作も無い事だ。

トラップを解除しつつ進んでいたため、二時間近くかかってしまったが、どうやら目の前に見えてきたのが、目的の館らしい。

町の図書館位の大きさと、館の周りには高くて大きい柵がつけられていた。館自体は赤い屋根で壁はレンガで出来ていたが、その全体には茨が巻きついていてる。

その時、目の前に突然、六亡星の魔法陣が現れた。

「感付かれた！」

秋留が叫んだと同時に、目の前の魔法陣から凶暴な猿のモンスター、エイプスが現れた。

エイプスは皮の鎧と棍棒と盾を装備している。

不意をつかれた俺は目の前のモンスターに攻撃する事が出来なかったが、後方で構えていたカリューの攻撃でエイプスの頭が空中を

飛んだ。

自分の頭が吹っ飛んでしまった事に身体が反応していないのか、エイプスの胴体は暫くその場に立ち尽くしていたが、やがて地面に倒れた。

「マジック・トラップだよ。デールがただの魔術師だと思って甘く見てたね」

秋留が言った。

マジック・トラップとは読んで字の如く魔法の罠だ。

魔法の罠は、ある程度魔力のある者にしか発見する事が出来ないため、俺は気付かずに魔法陣を踏んでしまったようだ。

しかし、マジック・トラップはその辺にいる魔術師には到底仕掛ける事が出来ないような高度な技のはずだ。デールは思っていたよりもかなりの強敵なのかもしれない。

「館まで走るぞ！」

カリューの叫び声を合図に俺達は走り始めたが、俺の耳は続々と館へ集結してくるモンスターの足音を聞き取っていた。

森中のモンスターが集結しようとしているだけで頭を抱えなくなる程の緊急事態だが、館の目の前まで走った俺達が目にしたのは、門の前で待ち構えている大型の一つ目モンスター、キングサイクロプスと中型のドラゴンであるグリーンドラゴンだった。

キングサイクロプスは、巨大な一つ眼で俺達の姿を睨みつけている。

三メートルはある黄金色の身体の大きさに負けない程の鉄のハンマーを構え、今にも襲って来そうだ。一方、グリーンドラゴンは、ドラゴンの中でも中型だが全長は十メートル程もある。身体は緑色の硬そうなウロコで覆われ、長い尻尾を振っている。

「やるしかないな！ 援護を頼むぞ！ 秋留！ ブレイブ！」

カリューはそう言っていると、グリーンドラゴンに向かって魔剣ケルベラーを構えつつ走り出した。

俺はネカー&ネマーのトリガーを引き、今にもカリューに向かっ

てハンマーを振り下ろしそうなキングサイクロプスの目玉を狙って硬貨の弾を発射した。

サイクロプス系モンスターの弱点はその大きな目玉だからだ。しかし、硬貨の弾がキングサイクロプスの眼に当たる寸前に、空からフライ・アイが降りてきて、キングサイクロプスの盾となった。硬貨はフライ・アイの身体を吹っ飛ばしたが、キングサイクロプスへのダメージはない。

「デールの野郎がモンスターを操ってるな！」

俺は悪態をついて、ネカー&ネマーのトリガーを連続で引いた。キングサイクロプスは右手に持っている鉄のハンマーを振り回して、迫り来る硬貨の弾丸を弾き飛ばしたが、何発かは奴の腕に命中した。

しかしそれでもキングサイクロプスは怯む事なく、その傷ついた右手で持ったハンマーでカリューを攻撃しようとする。

俺は慎重に奴の腕目掛けてトリガーを一回引き、少しの時間を置いてから、奴の眼に向かって再度トリガーを引いた。

キングサイクロプスは俺の予想通り、腕を上げて一発目の硬貨の弾丸を避けたが、その体勢からでは眼に向かって迫り来る弾丸をハンマーを使って防ぐ事は出来ない。

肉を抉る気持ち悪い音と共に、二発目の弾丸は見事にキングサイクロプスの弱点である目玉を破壊した。

キングサイクロプスは館の柵に寄りかかるように倒れた。

「ちゃんと操ってやらないと、次々と大事なモンスターが死んじまうぞー！」

俺は館の中にいるであろうデールに聞こえるように、大声で罵った。

その時、俺達の周りの空気が、門を守っているグリーンドラゴンの口に吸い込まれていくのを感じた。

その足元では、長い尻尾の攻撃を華麗にかわしつつ、カリューがドラゴンの身体に剣を突き刺している。

カリューの剣により傷つけられていたグリーンドラゴンの口が、大きく膨らみ出した。どうやら炎を吐く準備をしているらしい。空気を吸い込んでいたのはそのためか。

隣を見ると、秋留が魔法の詠唱をしていた。

「女王シヴァの口づけは全てを凍らし、その抱擁は全ての自由を奪う……、アイスバインド！」

秋留の言葉と共に、ロッドの先から氷の結晶を大きくしたような塊がドラゴンの顔目掛けて勢い良く飛んで行った。

正にグリーンドラゴンが炎を吐こうとした瞬間、秋留の放った魔法がドラゴンの口元に命中し、顔のほとんどを凍らせてしまった。

その一瞬の隙を見逃さずに、上を向いたまま凍ったドラゴンの首を、カリューは剣で切り裂いた。

ドラゴンは首筋から血の雨を降らしながら、口元が凍っているため断末魔の叫び声を上げる事もなくキンググサイクロプスの隣に倒れた。

「館の周りにモンスターが集結しつつあるぞ！」

俺の叫びにカリューは剣についたモンスターの血を払いながら言った。

「館に入るぞ！」

そう言うのと目の前に倒れている巨大なモンスター二匹を飛び越え、館の柵の前面にある扉に手を掛けた。

「ぐああああああ！」

柵に左手を掛けたカリューが叫び声を上げた。その身体からは、金色の稲妻が走っている。

戦闘の間中、傍で震えていたジーニスを含めた俺達三人は、カリューの元に駆け寄った。

カリューは扉から手を離し、全身から煙を出しながら地面に片膝をついた。

「これは物理的な電撃のバリアみたいだな。館全体を覆っているぞ。大丈夫か？ カリュー？」



俺は柵を調べながら言った。館を覆う柵ごとドーム型の電撃のバリアに守られているようだ。

「我が神、ガイアよ、この者に癒しの力を……」

気付くとジーニスが、身体中から煙を出しているカリューの腕に触れて呪文を唱えていた。

「癒合の雫！」

ジーニスが呪文を唱え終えたと同時に、カリューの身体が黄色の暖かい光に包まれた。

みるみる内に、身体から出ていた煙も消え、電撃により受けた火傷の傷も治っていく。

「あ、ありがとう、ジーニスさん。しかし、この結界はどうすればいいのか……」

立ち上がったカリューが言った。

結界をどうこうする以前に、既に俺達はモンスターに取り囲まれていた。

俺達は、前面を覆っているモンスターの群れと後方のバリアの壁に挟まれてしまった。

しかし、モンスターの群れは一向に俺達に襲ってこようとはしない。

「ようこそいらっしやいました。我が館へ……」

突然後で、男が裏声を出しているような気持ち悪い高い声が聞こえてきた。

緑色の長い髪の毛と真つ黒の不気味なローブが風に揺れ、細い顔にある眼は真つ赤だ。

写真で一度見て覚えている。館から出てきたのは魔族のデールだ。「館の中から拝見していたところ、暗黒剣士のケルベロスさんが見えたので、こうして直々に外に出てきました」

デールは武亮の行き先だけではなく、暗黒剣士ケルベロス自体を知っているらしい。

しかし、どこを見て暗黒剣士ケルベロスと言っているのだろうか？

魔剣ケルベラーを持っているカリューを、暗黒剣士ケルベロスと勘違いしているのだろうか？

「お前、デールと言う魔族だな？ 暗黒剣士ケルベロスって誰の事だよ？ この魔剣ケルベラーって一体何なんだ？」

カリューは言った。カリューの言葉を聞いて、デールは驚いたようだ。

「き、貴様、まだ人間としての心が残ったままなのか？ どうりで普通の人間と一緒に行動している筈だ！」

人間の心？

俺の頭の中に魔剣ケルベラーに関する最悪のシナリオが浮かんだ。呪われた魔剣ケルベラーを装備し続けると人間の心を失い、暗黒剣士ケルベロスとして生まれ変わってしまうのではないだろうか。

「てめえ、そこから出やがれえ！」

カリューはバリアの中にいるデールに向かって言った。

「ふふ、まあいい。まだ人間の心を残しているというなら、この俺がその邪魔な心を排除して立派な暗黒剣士ケルベロスにしてやろう。おまけの人間共には、俺の手足となっているモンスターで相手をしてやろう……」

そう言つとデールは右手に持っていた髑髏の飾りがついた杖で地面をポン、と一回突いた。

それが合図となったのか、俺達の周りで様子を窺っていたモンスターが一斉に襲い掛かってきた。

「ジェットにはさつき合図を送ったよ。ジェットが来るまでは、この場でなんとかしのぐよ！」

そう言つて、秋留はロッドを構えて、モソモソと呪文の詠唱を始めた。

俺はネカーとネマーのトリガーを引いて、近づいてくるモンスターの眉間を狙って、打ち続けた。

俺はネカーとネマーでモンスターを確実に倒しながら、デールを観察した。

どうやら、デールは沢山のモンスターを同時に細かく動かす事は出来ないようだ。しかし、これだけ数がいれば関係ないような気がする。

カリューも前へ出てケルベラーでモンスターを薙ぎ払っている。

「幻惑の霧！」

秋留は敵モンスターを混乱させる幻想術の幻惑の霧を唱えた。辺りに紫色の霧がかかる。

途端にモンスター達は同士討ちを始めたが、レベルの高いモンスターの何匹かは、尚も俺達へ攻撃を仕掛けてきた。俺は、数が少なくなり狙い安くなったモンスターを一匹ずつ倒していく。

「幻想士がいたか……。どうりで、館に近づくまで気付かなかった筈だ。しかし、その悪あがきもそこまでだ！」

デールはいつの間にか呪文の詠唱を終えていたようで、奴の身体の周りからは異様な妖気が出ている。

「ダーク・ピラー！」

デールは魔法を唱えた。今までに聞いた事のない魔法だ。

デールが魔法を唱えたと同時に、前線で戦っていたカリューの足元に六亡星が現れた。

「危ない！」

咄嗟に六亡星からカリューを突き飛ばしたのはジーニスだった。

ジーニスはカリューの代わりに六亡星の上へ倒れ、それと同時に、六亡星から黒い光の柱が上がった。その黒い光は天高くまで舞い上がる。

「ジ、ジーニスウー！」

カリューは叫んだ。

辺りは、黒い柱の威力により風が吹き荒れている。

俺達が倒した何匹かのモンスターが、竜巻のような柱に吸い込まれていった。

暫くすると、直径十メートル程あった黒い光の柱は、少しずつ小さくなり、やがて消えた。

光の柱があつた地面は大きく抉れ、その中心に、半分土砂に埋まつている人の姿がある。

「ジ、ジーニス……」

カリューは半分虚ろな眼をして、土砂を下り始めた。

その無気力な姿に俺も秋留も言葉を発する事が出来ないでいた。

後ろで様子を窺っているデールは、その光景を見て、薄ら笑いを浮かべている。

こんなバリアなどなければ、奴の身体中に、ありつただけの硬貨をブチ込んでやるのに……。

怒りに身体を震わせ、カリューの行動を見ていると、土砂に埋まった身体が突然何事も無かつたかのように起き上がった。

これには、その場にいる誰もが驚いた。

バリアの向こう側で様子を窺っていたデールも、口を半分開けた状態で固まつたようだ。

土砂の中から姿を現したのは、ジーニスを抱いたジェットだった。

「なんとか間に合ったみたいじゃな」

ジェットは地面が抉れて出来た穴から這い上がり、ジーニスを近くの木に寄りかからせた。

木の傍には、銀星もいる。

ジーニスの身体の土や埃を払いつつ、ジェットが口を開いた。

「黒魔術ダーク・ピラーは、丁度セイント・インディグネーションと反対の性質を持っている魔法で、聖なる心を持つ者にのみ、絶大なダメージを与えるんじゃない」

ジェットがデールを睨みつけながら言った。

「そ、そんな事は知っている！ 貴様はなぜ無事なのだ！」  
デールはそう言うと、杖を振った。

それと同時に空中で待機していたドリルのようになくちばしを持った鳥、ピッガーがジェット目掛けて急降下してきた。

鈍い音と共に、ジェットの背中にモンスターの鋭い嘴が突き刺さった。

小さく呻き声を上げたジェットだったが、倒れる事なくそのままデールを睨みつける。

「ワシは死人なんじゃ。聖なる心など持つとらん……」

そう言くと、ジェットは背中に突き刺さったモンスターを引き抜き、地面に叩きつけた。

そのまま腰につけた鞘からマジックレイピアを引き抜くと、地面のモンスターに突き刺した。

普段の紳士的なジェットでは、考えられないような行動だ。その眼は獣のように険しい。ジェットは怒っているようだ。

「ジーニス殿は、ワシを信じて安心してこの旅に参加してくれた……。ジーニス殿はワシが守ると約束したんじゃあ！」

ジェットの迫力にデールは顔が引きつっている。

ジェットは今にもデールに向かって飛びかかりそうな勢いだったが、まだ冷静さは無くしてはいないようだ。

辺りはモンスターの屍だらけだが、デールのいる館の周りだけ、屍が転がっていない事を確認し、今はデールには近づけないと判断したらしい。さすが、戦いの年期が違うといったところか。

ジェットの肩に手を置き、落ち着かせるように秋留が言った。

「危うくジーニスを殺されるところだったね。きちんと仕返しはしない……」

秋留は電撃のバリアの向こう側のデールを睨みつけて言った。

「岩山の巨人ジャイアントロックよ、我の前にその力を示せ！ ジヤイアント・フット！」

デールがバリアの向こう側から魔法を唱える事が出来たという事は、あの電撃のバリアは物理的なものしか弾き返す力がない。秋留もその事を理解したのか、召喚魔法を唱えた。

デールは何が起るか分らず辺りを見渡していたが、奴の上空の空間が歪み出したのに俺は気付いた。

空間からは、巨大な岩で出来た足が出てきたかと思うと、轟音と共に大地を踏み砕いた。

しかしデールは寸前のところで空中にジャンプして、巨人の足を避けている。

「岩山の巨人ジャイアントロックよ、我の前にその力を示せ！ ジヤイアント・アーム！」

秋留は連続で召喚魔法を唱えた。すると、空中で身動きの取れないデールの目の前の空間が歪み、そこから巨大な岩で出来た腕が飛び出してきた。

空中のデールは避ける事が出来ずに、巨人の腕の攻撃をまともにくらった。

骨が砕けたような鈍い音と共にデールの身体が吹き飛び、電撃のバリアを突き破って外に飛び出した。

巨人の腕の攻撃の威力は高く、百メートル程吹き飛んだデールの身体は、近くの大きめの岩に叩きつけられた。

デールは岩の前に倒れ込んだ。それと同時に今まで襲ってきていたモンスターの群れも動かなくなった。デールが意識を失ったためだろう。

「ど、どうなったんだ？」

俺は言った。

俺がデールの様子を見ようとして近づいた時、館の二階の窓が突然割れ、倒れて動かないデールの前にモンスターが舞い降りてきた。その跳躍力は先程デールが吹き飛ばされた距離をゆうに越えるほどだ。

目の前に現れたモンスターは全身真っ黒な毛で覆われ、身体作りや大きさは狼のようだったが、唯一違う点は、首と頭が二つある事だ。

その二つ首のモンスターは、地面への着地と同時に、デールに近づいていた俺へ攻撃を仕掛けてきた。

俺は奴の前足の攻撃を上体を反らして寸前でかわし、後方へ飛んだ。

しかし、俺の上着がモンスターの鋭い爪で切り裂かれた。

「こ、この不気味なモンスターは何だ？」

カリューが剣を構えながら言った。ジーニスが攻撃された事について、とりあえず落ち着いたようだ。

「良い子だ、武亮……」

二つ首を持ったモンスターの影に隠れていたデールが立ち上がって言った。

やはりまだ生きていたようだが、口からは紫色の血を流している。  
「ねえ？ あいつ、あのモンスターの事を武亮って呼ばなかった？」  
木に寄りかかっているジーニスの回復をしながら、秋留が言った。  
「ほう？ 武亮を知っているのか？」

俺達の知っている武亮は人間だったはずだが、目の前にいる武亮は明らかに人間ではなくモンスターだ。

「ど、どういう事だ？」

俺は言った。

「暗黒剣士ケルベロスは、主である魔剣ケルベラーに捨てられた時、暗黒の力が作用してその姿がモンスター、つまり魔獣ケルベロスとなるのだ」

つまり、武亮は魔獣に変化してしまったという事だ。

恐らく、ジェーン・アンダーソン村を武亮が離れた原因は、自分の身体が魔獣になり始めたためだろう。

「その青い髪の手士も、いずれこうなる運命だな、はっはっは！」

デールの言葉を聞いたカリューは、俺の隣を通り過ぎ飛び出していった。

「うおおおお」

剣を振り上げデールに向かって行ったカリューだったが、俺の時と同様に、モンスターとなってしまうた武亮が立ちはだかった。

武亮は並のモンスターでは比べ物にならない程の速さで、カリューに飛びかかった。

その速さに対応しきれなかったカリューは、武亮の前足の鋭い爪で左腕に傷を負った。

「ちくしょう！ カリユー！ 落ち着けえ！」

俺は武亮の眼を目掛けて、右手のネマーのトリガーを引いた。しかし、またしても空から降ってきたフライ・アイが盾になり、命中はしなかった。

「そんなに暇なら、俺の手足となるモンスターで再び遊んでやろう！」

デールの言葉をきっかけに今まで沈黙していたモンスターが一斉に動き出した。

モンスターが再び動き出したと同時に、ジェットは気を失っているジーニスの元へ駆けつけ、迫り来るモンスターを捌き始めた。

その動きは、二度とジーニスを危険な目には合わせないという意思が感じられる。

一方、俺の前方では、武亮とカリユーが対峙している。

武亮は二つある頭でカリユーを噛み砕こうとしたが、それをカリユーは寸前で避けた。そのままカリユーは武亮の脇を抜け、デールの前に出た。

しかし横から飛び出してきたワイルド・ウルフが飛びつき、カリユーは押し倒された。

「ブレイブ！ ぼけつとしてるんじゃないよ！」

秋留に怒鳴られて、俺は我に返った。

目の前に迫ってきていたモンスターにネカーとネマーの弾丸を打ち込んで、吹っ飛ばす。

少し離れた所では秋留がコロナバーニングを唱え、迫り来るモンスターをドロドロに溶かしていた。秋留は既に肩で息をしているようだ。連続で巨大な魔法を唱えているためだろう。

素早い手の動きで、ネカーとネマーに硬貨を補充して、俺は飛び掛ってくるモンスターを次々に倒していく。勿論、秋留の元へ襲い掛かろうとする敵と一緒に撃退する。

このまま戦い続けても状況は悪化するばかりだ。

俺の錢袋も残りが少なくなってきた。



この戦闘に終わりを告げるには、デールをなんとかしなくてはならない。

俺はモンスターを一匹ずつ確実に仕留めながら、少しずつデールとの間合いを詰めていった。

そして、尚も武亮と戦っているカリューの隣までやってきた。

「ブレイブ、俺の援護はいいから、デールの野郎をぶっ殺してくれ！ あいつを倒さないと何も変わらないぞ！」

カリューは武亮と対峙したまま言った。どうやらカリューは冷静さを取り戻したようだ。

俺は言われるまでもなくデールを始末するつもりだったが、カリューの隣まで危険な思いをして来たのは、アドバイスを聞くためではない。

「……（ヒュヒュヒュン）」

俺はカリューの懐から錢袋を拝借した。今回は、すぐに返すつもりはない。

デールを仕留めるために協力してくれ、と俺は心の中でカリューに言った。

俺はネカー&ネマーに硬貨をセットして、襲いくる敵を次々と倒しながら、更にデールに近づいた。

デールは俺が接近して来たのに気付いたようだ。

「あははは。お前一人で何が出来る？ 俺の魔法の餌食にしてく……」

俺は奴の言葉を最後まで聞かずに、止めを刺すため更にデールに近づいた。

突然、俺の足元に、六亡星が現れた。

「ちっ、またマジック・トラップか！」

俺は後方に転がり、六亡星から現れた鬼獣の攻撃を避けた。

鬼獣は頭に二本の角を持った人型のモンスターだ。右手には刀を装備している。

俺は落ち着いて鬼獣の心臓に硬貨をぶっ放した。

それで油断してしまった俺は、鬼獣からの予期しない攻撃をまともにくらってしまった。

硬貨をくらい、前傾姿勢になった鬼獣がそのまま頭突きを食らわしてきたのだ。

二本の角が俺の脇腹に食い込み、俺はその衝撃で後方に吹き飛ばされた。

なんとか体勢は維持し地面に倒れ込まずに済んだが、右脇腹から血が流れてきている。

鬼獣は心臓に致命傷の傷を負いながらも、俺に向かって突進してきた。

「はっはっは、エビルスピリットで強化したモンスターの威力はどうだい？」

どうやら、デールが魔術でモンスターを強化していたらしい。

エビルスピリットがどういう魔術かは知らないが、目の前の鬼獣の変わり様を見れば、効果は嫌でも分かる。

俺は右手で脇腹の傷を押さえながら、左手に持ったネカーで鬼獣の眉間を打ち抜いた。それでも怯まない鬼獣の両足も硬貨で吹き飛ばす。

鬼獣は地面に倒れ込み、暫くしてから動かなくなった。

「どうした？ 鬼獣の攻撃で動けなくなったのか？」

俺は肩膝をついたまま、その場を動かなかった。その姿を確認して安心したのか、デールが俺の方へ歩いてきた。

「お前、職業は何だ？ その防御力の低さだと、盗賊か何かか？」

デールはそう言いながら近づいてきている。確かに戦士系の職業ではない俺や秋留の防御力は極端に低い。

「盗賊は盗賊らしく、泥棒でもしていれば良い」

俺はデールが油断した瞬間、右手の手袋に仕込んだ煙玉をデールの足元目掛けて投げつけた。

「ぬおっ」

突然の出来事にデールは声を上げた。

俺が煙玉を投げつけた動作は速すぎてデールには見えていないからだ。

俺は立ち上がると、右手のネマーのトリガを引いて、デールを攻撃した。

しかし、硬貨はデールの身体に到達する前に弾かれてしまった。

「はっはっは、やはりそんな事だろうと思ったぞ。あらかじめ対物理攻撃のシールドを張っていて正解だったな」

デールは得意気に言っているが、マジック・トラップや、モンスターを操れる程の技量を持った奴が、何の対策もせずに俺に近づいてくる訳はないと予想していた。

俺は煙の中で高笑いしているデールの頭上目掛けて、ダークスーツの内ポケットに隠し持っていた、液体の入ったビンを投げつけた。そして丁度デールの真上にビンが来た時に、俺はネマーのトリガを引いて、ビンを割る。

デールの身体にビンの中の液体が降り注いだ。

「うわっ、なんだこの液体は！」

煙の中でデールは悪態をついているが、もう遅い。俺の仕事は終わった。

俺を侮辱した事を後悔させてやる。

暫くして、煙が晴れ、怒りに顔を強張らせているデールが現れた。「卑怯な手を使いおつて！俺の魔法で灰にしてやるぞ！」

デールは右手に持った髑髏の杖を天にかざしながら呪文を唱えた。「ダーク・ピラー！」

デールは先程の黒い柱の魔法を唱えたが何も起きなかった。俺の作戦は成功したようだ。

「ま、魔法が出ない？　どどういう事だ？」

「ジ・エンドだな」

俺は決め台詞を言うと、ネカーとネマーをデールに向けて構えた。しかし止めを刺そうとした瞬間、俺の後方でカリューの叫び声が聞こえ、カリューの大柄な身体が吹っ飛んだ。

カリューを払いのけた武亮はデールを守るように再び立ちはだかった。

顔に似合わず、本当に主人想いの良い奴だが、いい加減しつこいだが、その主人想いの武亮は突然、後ろで胸を撫で下ろしているデールの方へ振り返ると、モンスター独特の雄叫びを上げ、左の頭でデールの脇腹に、右の頭でデールの左肩に喰らいついた。

「ぐああああ！ な、何をする！」

武亮の喰らいついている脇腹と左肩には牙が深く突き刺さり、紫色の血が吹き出ている。

周りを見渡すと、今まで一つの巨大なモンスターのようには俺達を包囲して攻撃して来ていたモンスターの群れが、呪縛から解き放たれたかのように、静かにデールの最期を見守っていた。

疲労によりその場に座り込んでいある秋留と、モンスターの返り血を浴びてボロボロとなったジェットが俺の隣まで来た。

秋留が戦闘中に守り抜いたインスペクターをデールの方へ向ける。先程、武亮に吹き飛ばされたカリューも木に手をつけて、俺達の方を見ている。

気を失ったジーニスは尚も木に寄りかかり休んでいた。そのすぐ近くには銀星が立っている。戦闘中はジェットと共にジーニスを守っていたようだ。

改めて周りを見渡すと、館の周辺一帯の地面がモンスターの血で赤く染まっていた。地面には今までデールに操られていた数多くのモンスターの屍も転がっている。

「どうやら、ブレイブが使った禁呪の雫の効果は、デールのモンスターを操る事の出来る魔力まで封印してしまったみたいだね」

秋留が言った。

俺がデールに投げつけた瓶に入れていた水は禁呪の雫と言って、その水を浴びた者は暫く魔法を唱える事が出来なくなると言う代物だ。

ただ、禁呪の雫は一つ十萬カリムもする高級品のため、デールを

倒した時の報奨金がなければ、まず使う事は考えなかった。

そのデールは右手に持った髑髏の杖を思いっきり武亮の背中に突き立てた。

武亮は獣の呻き声を上げ、デールから離れた。

デールは武亮に左腕を食いちぎられていた。その傷口からは、おびただしいほどの血が流れ出ている。

「な、なぜだ……、何が起きた？」

デールは今にも気を失いそうな声を発している。

「手足に使っていたモンスターが多すぎたようだ。手と足は二本ずつあれば十分だぜ？」

俺はデールに言った。

「ふ、ふざけるなあ！」

デールは口から血を吐きながら怒鳴ったが、それと同時に空中で旋回していたピッガーの群れがデール目掛けて急降下してきた。

俺達の目の前で、デールはピッガー達の鋭いくちばしで串刺しにされた。

最早、デールは声を発する事も出来なくなったようだ。その不気味な眼だけが、俺を恨むように睨んでいる。

やがて、デールの身体からサラサラと灰が舞い始めた。

魔族はその命が尽きると、灰となって消え去ってしまうのだ。半分食われてしまったデールも例外ではない。

デールの身体が灰となって完全に消え去ると、今まで周りにいたモンスターがポツポツと姿を消し始めた。

デールの魔の手から解放してくれた俺達に攻撃してくる気配はなかった。自由を手にしたモンスター達は、どこへ向かうのだろうか。モンスターを見逃すのは良い事ではないが、今は放っておく事にする。下手に手を出して一斉に襲い掛かってきたら、今度こそ全滅してしまうかもしれない。

今までデールの手足となつて来たモンスター達へ、暫しの自由を与えたのだ。願わくば、人里離れた森などで静かに暮らして欲しい

ものだ。

ただし、次に俺達冒険者と会った時は、死を覚悟しなければなら  
ない。

特に、あそこで自由を手にしてこの場を去ろうとしている美味い  
後ろ足を持つワイルド・ウルフ。お前はいつか俺が狩ってやる……。  
周りのモンスターはほとんどいなくなったが、俺達の目の前には  
以前として、魔獣ケルベロスになってしまった武亮が背中を向けた  
まま佇んでいる。

「魔剣ケルベラーを出せ……」

獣が話しているような恐ろしく低い声が聞こえてきた。

すると目の前の武亮が振り返ってカリューに向かって言った。

「魔剣ケルベラーを出すんだ」

話しているのは武亮だった。二つの頭で同時に喋っている。

「は、話せるのか？」

カリューは驚いて言ったが、驚いたのは全員同じだ。

「魔剣ケルベラーは生きている。ケルベラーの息の根を止めれば呪  
いから解放される」

そこまで話して武亮が血を吐いた。先程のデールの攻撃の影響と  
いうよりは今まで生きてきた負担が身体に一気にのしかかってきた  
ような苦しみ方だ。

「ケルベラーは鍛冶屋の元で治療されていたはずなんだ……。今な  
ら、覚醒し切っていない今なら呪いから解放出来るはずだ……」

それで魔剣ケルベラーがサイバーのところにあつたのか。

「ほ、本当か？」

カリューは言った。

「早くケルベラーを差し出せ！」

鬼気迫る武亮の迫力にカリューは黙って魔剣ケルベラーを前に差  
し出した。

武亮はその大きな口を広げ、力の限り、魔剣に噛みついた。  
ガキンツという金属音と共に火花が散る。武亮はそのまま魔剣に

喰らいついたまま力を込めている。

全員が武亮とその剣を見守っていた。俺の手にも自然と力が入る。暫くすると、魔剣ケルベラーからヒビの入ったような音が聞こえた。

俺達の顔に一瞬笑顔が浮かんだが、突然、今までにもあったように、カリユの身体を闇が包んだ。

「ちっ！ またかよ？」

俺は後方に飛んで再びホルスターからネカー&ネマーと取り出して構えた。

「最期の悪あがきか……」

同じく後方に飛んで間合いを取った武亮が二つの口で言った。

秋留とジェットも戦闘態勢に入っている。

カリユを包んだ闇の中から、全身の肌が黒くなってしまったカリユが剣を構えて飛び出してきた。

「抜け殻は引つ込んでろー！」

カリユの口から出た言葉は、カリユの声ではなく、威圧感のある禍々しい声だった。

魔剣ケルベラーは以前の宿主だった武亮目掛けて剣を振り下ろしたが、素早さのある武亮はその攻撃を避け、カリユの後に回った。武亮は後ろから魔剣ケルベラーを持つカリユの右手に喰らいついた。

暴走してしまったカリユは怯む事なく、その左手に装備しているオリハルコンの盾で右手に噛みついていて武亮の頭を殴り始めた。しかし武亮はその攻撃に耐えながら、尚もカリユの右手に喰らいついたままだ。

「今のうちになんとかするぞ！」

俺は叫び、ネカーとネマーの照準を魔剣ケルベラーに合わせた。

「ブレイブ、それじゃあ駄目だよ。この前のJ・A支部長室の時と同じように、魔剣ケルベラーごとカリユの身体を吹き飛ばすだけだよ」

秋留が俺の隣に来て言った。

「じゃあ、どうすれば魔剣ケルベラーを破壊出来るんだ？」

「ジェット」

秋留は後方で見守っていたジェットを呼んだ。

「悪いんだけど、神聖魔法をあのかつ自体に唱える事、出来ないかな？」

秋留に聞かれ、ジェットは答えた。

「秋留殿の頼みなら断る事なんて出来ませんな。それにワシやブレイブ殿の攻撃や秋留殿の魔法では、あのかつを破壊する事は無理じゃろう」

ジェットは右手に持ったマジックレイピアを腰の鞘に収め、両手を魔剣ケルベラーの方に向けて、呪文を唱えた。

「浄化の光！」

以前、カリューの剣の呪いを解くためにジーニスが唱えた解呪の呪文を、ジェットは魔剣ケルベラー自体に唱えた。

ジェットの身体から青白い煙が上がり顔には苦痛を浮かべていたが、魔法の効果は見事、ケルベラー自体を襲った。

「ぐ、ぐあああああ」

カリューの口から悪魔のような叫び声が聞こえてきたかと思うと、カリューは喰らいついたままの武亮ごと右手に力を込めて振り回した。

地面に爪を立てて踏ん張っていた武亮だったが、その突然の力に負け、魔法を唱えていたジェットに叩きつけられた。

無防備だったジェットは後方に飛ばされ、武亮もカリューの腕から牙が外れ、後方に弾き飛ばされた。

無理矢理、右腕に喰らいついた武亮を振り回したため、カリューの右腕は血だらけとなっている。

「血、血が足りない！ か、渴く！ 渴くぞおおおお！」

カリューは叫び、辺りを見渡して、ジーニスに狙いを定めた。

カリューは地を蹴って、ジーニスに襲い掛かる。



秋留が隣で魔法を唱え始めたが、カリユーの素早さには追いつかないだろう。

俺もカリユー目掛けてネカー＆ネマーを構えたが、どこを狙えば良いか分からない。

ジーニスを守っていた銀星がカリユーの前に立ちはだかったが、魔剣ケルベラーの横一線の攻撃で首が吹き飛んだ。銀星の頭が木の根元に転がり、銀星の身体はその場に倒れた。

死馬の銀星は首が吹き飛んだ状態でも、首と胴体をつなげてやればジェットと同様に白いミミズのような物が動き出し、あつという間に首と胴体がつながってしまうので問題ないが、今は気を失っているジーニスが危険だ。

俺は意を決して、カリユーの右足目掛けてネカーのトリガを引いた。

カリユー、少し痛いけど勘弁してくれ。

見事に硬貨がカリユーの右足につけているアーマーに命中したが、怯む事なく、そのままジーニスに向かって突進し続けている。

しかし魔剣ケルベラーがジーニスの心臓を貫く瞬間、武亮がカリユーの前に立ちはだかり、その身体を盾とした。

暴走したカリユーの身体はそれでも止まる事なく、そのまま武亮の脇腹に剣を突き刺した。

魔剣ケルベラーの漆黒の刀身は武亮を貫き、ジーニスの顔の目の前まで迫った所で止まった。

武亮はその場に爪を立て、歯を食いしばり耐えている。

「う、動かない……」

カリユーが苦悩の声を上げた。武亮は身体に突き刺さった剣を筋肉で押さえつけているようだ。

武亮を貫いた漆黒の刀身を伝って、武亮の身体から流れた黒っぽい色の血がジーニスの額に垂れた。

「きゃあああ」

ジーニスは武亮の血が額に垂れた事により気絶から立ち直ったが、

その光景を目の当たりにして叫び声を上げた。

ジェットが隙をついて、ジーニスの身体を抱きかかえカリューと武亮の元から引き離れた。

「あのモンスターは武亮だよ。魔剣ケルベラーに操られ捨てられた肉体は、魔獣ケルベロスになってしまうらしいの」

困惑顔のジーニスに向かって、秋留が簡単に説明した。

「セイント・インディグネーションでは、完璧に呪いを解く事は出来なかったという事ですね？」

秋留とジーニスのやりとりを聞いていた武亮は消えそうな声で言った。

「セイント・インディグネーション……。本当に邪悪な心を持っているのは、この魔剣だ。俺の身体に突き刺さっている、この魔剣ごとセイント・インディグネーションを唱えてくれ。あの時みたいに……」

武亮はジーニスが自分を魔剣ケルベラーから解放してくれたジーニン・アンダーソンと見間違えているようだ。

俺達は暫くジーニスを見守っていたが、やがて決心したように言った。

「……分りました。一度も成功した事はありませんが、やってみましょう」

そう言うと、ジーニスは杖を構え、呪文を唱え始めた。

「ジェーン……。私に力を下さい……」

俺が聞き取れたのは、曾祖母への祈りだった。それ以外は、特別な詠唱のためか聞き取る事が出来ない。

曾祖母の意思を引き継ぎ、魔剣ケルベラーに向き合っているジーニス。

十五年前にも同じような出来事が起こっていたかと思うと、俺は自分の冒した過ちの大きさに深く反省した。

俺は呪文を唱えているジーニスの姿を見て、J・A支部長室でジーニスが言っていた言葉を思い出した。

（曾祖母を殺したのが、暗黒騎士ケルベロスだったんです）

俺はジーニスの話の矛盾に気がついて、愕然とした。

ガイア教会の一室でジーニスから聞いた話では、曾祖母であるジエーンがセイント・インディグネーションを唱えて武亮を魔剣ケルベラーの呪いから解き放ったと言っていた。

……つまりジエーンの曾祖母は暗黒騎士ケルベロスに殺されてはいない。どういう事だ……？

「セイント・インディグネーション！」

俺がジエーンの死について考えている間に、ジーニスは魔法の詠唱を終え、神聖魔法であるセイント・インディグネーションを唱えた。

武亮の足元に聖なる五亡星が光り、巨大な光の柱が天空目掛けて走り抜けた。

その光の強さに俺は思わず眼を閉じてしまった。

どれ位の間、眼を瞑っていただろうか。

再び眼を開けるとそこには、人間の姿に戻った裸の武亮と元の肌色に戻ったカリューが脇に倒れていた。

その右手には魔剣ケルベラーは握られていない。

魔剣ケルベラーは、人間に戻った武亮の脇腹に突き刺さっている。ジーニスの放ったセイントインディグネーションの効果は、魔獣と変えてしまった武亮の中の暗黒の力のみを消し去ったようだ。

「あ……りがと……う……」

武亮はジーニスに向かって言うと、その場に崩れ落ちた。その身体は、魔族にのつとられていた影響か、灰となって消えかけている。武亮の最期の言葉を聞いたジーニスは、安心と強大な魔法を使った事による疲労とで、その場に倒れそうになった。

しかし寸前のところでジェットがジーニスに近づき抱きかかえた。まだジーニスの意識はあるようだった。俺はジーニスに向かって言った。

「ジーニスさん、曾祖母のジエーンは暗黒騎士ケルベロスに殺され

た、と言っていましたよね？」

ジーニスは今にも眠りについてしまいそうな目を一生懸命開きながら話し始めた。

「セイント・インディグネーションは唱えた者の寿命を確実に縮めてしまふんです。ジェーンは高齢だったため、その魔法の威力に耐える事が出来ず、死んでしまったのです」

と、いう事は、ジーニスも確実に寿命が縮まってしまったという事か。

やはり、俺が魔剣ケルベラーを持ち出さなければ、こんな事にはならなかったのだ。

ジーニスは尚も話続けた。

「魔剣ケルベラーさえ現れなければ、曾祖母はまだ死なずに済んだはずなのに」

その魔剣は、今や灰となって消えてしまった武亮の身体があつた場所に転がっている。俺がその魔剣を見つめていると、僅かにだが、剣が動いた気がした。

「おい！ その魔剣、まだ怪しいぞ！」

俺が叫んだと同時に魔剣ケルベラーは独りでに地面から浮かび上がり、その形状を少しずつ変えていった。

刀身の部分からは、枝分かれして六本の昆虫のような足が現れ、剣の先端には、傷のように細い赤く輝いている眼が現れた。

今は、刀身から生えた六本の足でその漆黒の剣の身体を支えている。

しかしその漆黒の身体には無数のヒビが入っており、今にも砕け散りそうだ。

魔剣ケルベラーはそのボロボロの身体で最期の攻撃を仕掛けてきた。

地面を蹴り、その刀身の身体を俺の方へ飛ばしてきたのだ。

俺は冷静に右手のネマーを構え、魔剣ケルベラーに向けて硬貨を発射した。

ヒビだらけの身体で俺の放った硬貨の弾丸を弾く力はなく、その漆黒の身体は、硬貨が当たる度に、砕けていった。

その欠片が宙に舞う度にキラキラと光ながら、消えていく。

俺は目の前に迫ったケルベラーに向かって、最後のトリガを引いた。

「ヴオオオオオオ……」

魔剣ケルベラーは気持ちの悪い断末魔と共に砕け散り、俺を狙った刀身の欠片は俺の目の前の地面に突き刺さった。

やがて、地面に散らばった魔剣ケルベラーの破片は、灰になって宙を舞い出した。

どうやら、魔剣ケルベラーは魔族だったようだ。

その全てが灰となって消えてしまうのを少し離れた所でカリューが見守っていた。

「終わったな」

カリューは言った。その右手にはあの禍々しい魔剣ケルベラーは握られていない。

そう、終わったのだ。

これでデールを倒した報奨金の二千万カリム、一人頭五百万カリムだが、見事俺の物になった……。

本当は。

魔族であったケルベラーを倒した報奨金も貰いたかったが、あの剣、サイバーの小屋から勝手に持ってきたものだからなあ……。無駄な事をしてしまった。

## エピローグ

「よし、これでOKだな」

俺達は、デールの館から少し離れた所に、武亮の墓を作った。勿論、灰となって消えてしまった武亮の遺体は、この土を盛っただけの墓の中にはない。

これは、カリユールの呪いを解くのに協力してくれた武亮に対する感謝の気持ちだった。

俺達は武亮の墓を作った後、体力の消耗が激しいジーニスを首が元通り繋がった銀星の背中に乗せ、ジェーン・アンダーソン村を目指して出発した。

その途中で魔族のデールの館を秋留のコロナバーニングで破壊した。

館が崩れると、柵ごと覆っていた電撃のバリアが解除された。

どうやら、バリア発生装置は、今は瓦礫の山となってしまったデールの館の中にあっただようだ。

俺は再びこの場所へ財宝を漁りに来る事を心に誓い、その場を後にした……。

俺達がジェーン・アンダーソン村を出発したのは早朝だったが、今は真夜中となっている。

数え切れない程のモンスターと戦ったため体力の消耗が激しかったが、キャンプを張る事なく、ジェーン・アンダーソン村を目指した。

翌日の早朝にジェーン・アンダーソン村に到着した俺達は、ジーニスをガイア教会に送って行き、宿屋リフレッシュ・ハウスに向かった。

チェックインを済ませると俺達はそれぞれの部屋に入り、泥の様に眠りについた。

それから眼を覚ましたのは翌日の朝だった。俺は丸一日寝ていた事になる。

俺は惑わしの森でのデールとの戦闘で汚れてしまった装備一式を簡単に綺麗にして準備を整えてから、未だに熟睡しているカリューとジェットを起こさないように部屋を出た。

宿屋の外に出て新鮮な空気を吸うと、今までの眠気など吹き飛んでしまう。

俺は惑わしの森のデールの館に行くためにジェーン・アンダーソン村のアーチを目指して歩いた。

俺はアーチの下に秋留がいるのに気付いた。

「どうしたんだ？　こんなに朝早くに……」

俺は、デールの館に行くという後ろめたい気持ちから、眼を伏せつつ秋留に聞いた。

俺はポーカーフェイスが苦手だ。

「デールの館に財宝を探しに行くんでしょ？」

秋留は言った。

俺は早朝二人つきりという事もあり、緊張していた。

「なんでバレたんだ？　秋留は俺のやろうとしてる事が何でも分かるんだなあ」

俺は正直な気持ちを秋留に伝えた。

「ふふ、私、職業が盗賊だったこともあるんだよ」

飽きやすい性格の秋留の事だから、色々な職業に就いている事は分かっていたが、まさか盗賊になった事があるとは気付かなかった。つまり、俺の拝借も見られていたと言う事か。

俺は惑わしの森に向かおうとしている秋留について行った。

「魔族のデールの報奨金も二人で分けて、トンズラしちゃおうか？」  
二千万カリムの配当を金に無頓着なカリューやジェットに渡すのは前から嫌だった。

俺は笑顔で頷くと、秋留を追って走り出した……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0331d/>

---

盗賊ブレイブ@勇者パーティー御一行様

2010年10月8日14時49分発行